

九八 みこゑは火焰をわかつ エホバのみこゑは野をふるはせエホバはカデシの野をふるはせたまふ エホバのみこゑは鹿に子をうませ また林木をはだかにすその宮にあるすべてのもの呼はりて榮光なるかなといふ

一〇 エホバは洪水のうへに坐したまへり エホバは寶座にさして永遠に王なり エホバはその民にちからをあたへたまふ 平安をもてその民をさきはひたまはん

第三〇篇

一 エホバよわれ汝をあがめんなんぢ我をおこしてわが仇のわがごとによりて喜ぶをゆるし給はざればなり

二 わが神エホバよわれ汝によはれば汝われをいやしたまへり エホバよ汝わがたましひを陰府よりあげ我をながらへしめて墓にくだらせたまはざりき

三 エホバの聖徒よ エホバをほめうたへ奉れきよき名に感謝せよ

四 その怒はたゞしにしてその恵はいのちとともにながし夜はよもすがら泣かなしむとも朝にはよろこびうたはん

五 われ安けかりしときに謂くとしへに動かさるゝことなからんと

六 エホバよなんぢ恵をもてわが山をかたく立たせたまひき 然はあれどなんぢ面をかくしたまひたれば我おぢまどひたり

七 エホバよわれ汝によははれり 我ひたすらエホバにねがへり

八 われ墓にくだらばわが血なれの益あらん 塵はなんぢを讃たへんや

九 なんぢの眞理をのべつたへんや

一〇 エホバよ聽たまへ われを憐みたまへ

一一 エホバよ願くはわが助となりたまへ

一二 なんぢ踴躍をもてわが哀哭にかへ

一三 わが鹿服をとき歡喜をもてわが帯としたまへり

一四 われ榮をもてほめうたひつゝ黙すことなからんためなり

一五 わが神エホバよ われ永遠になんぢに感謝せん

イ民一三・二六 ホ詩二八・八
口伯三九・一三三 へ詩二八・九
ヘ創六・二七 伯三八 ト詩二五・二 三五・九
代上一六・四 詩 九七・二
一八・二五 二詩一〇・二六

チ詩六・二二 一〇三・三 七 詩一〇三・九 賽 二九・二八
ヨ伯二九・一八

マ詩三三・三 一〇二 二六・二〇 五四 夕詩一〇四・二九
七 八 寄後四・二七 七 八 寄後六・一四 一四 賽 六一・三 耶三三・一四

ソ 賽後六・一四 一四 賽 六一・三 耶三三・一四

タ 賽二〇・一〇 三 耶三三・一四 賽 六一・三 耶三三・一四

ナ 賽二〇・一〇 三 耶三三・一四 賽 六一・三 耶三三・一四

キ 民六・二五 二〇 四六・六七

第三一篇

俗長にうたはしめたるダビデのうた

一 エホバよわれ汝によりたのむ 願くはいつれの日までも愧をおはしめたまふなかなんぢの義をもてわれを助けたまへ

二 なんぢの耳をかたぶけて速かにわれをすくひたまへ 願くはわがためにかたき磐となり我をすくふ保障の家となりたまへ

三 なんぢはわが磐わが城なり されば名のゆゑをもてわれを引われを導きたまへ

四 なんぢ我をかれらが密かにまうけたる網よりひきいだしたまへ

五 なんぢはわが保帯なり われ靈魂をなんぢの手にゆだね

六 エホバよなんぢはわれを贖ひたまへり

七 われはいつはりの虚きことに心をよする者をにくむ われは獨エホバによりたのむなり

八 われはなんぢの憐憫をよろこびたのしまんなんぢわが艱難をかへりみ わがたましひの禍害をしり

九 われを仇の手にとぢこめしめたまはず わが足をひろきところに立たまへばなり

一〇 われ迫りくるしめり エホバよ我をあはれみたまへ

一一 わが目はうれひによりておとろふ靈魂も身もまた衰へぬ

一二 わが生命はかなしみにによりて消えゆき わが年華はなげきによりて消ゆけばなり

一三 わが力がわが不義によりておとろへ

一四 わが骨はかれはてたり

一五 われもろもろの仇ゆゑにそしらる わが隣にはわけて甚だし相識ものには忌憚られ憚にてわれを見るもの避てのがる

一六 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに置れず

一七 われはやぶれたる器ものごとくなれり

一八 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

一九 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二〇 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二一 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二二 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二三 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二四 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二五 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

二六 われは死たるものごとく忘れられて人のこゝろに忘れず

一七 たまへ エホバよわれに愧をおはしめ給ふなかれそは我なんぢをよべばなり 願くはあしきものに恥をうけし
 一八 め陰府にありて口をつぐましめ給へ 傲慢と輕侮とをもて義きものにむかひ妄りにのしるいつはりの口唇を
 一九 つぐましめたまへ 汝をおそるゝ者のためにたくはへなんぢに依頼むもののために人の子のまへにてほどこ
 二〇 したまへる汝のいつくしみは大なるかな 汝かれらを御前なるひそかなる所にかくして人の謀略よりまぬかれ
 二一 しめまた行宮のうちひそませて舌のあらそひをさけしめたまはん 讚べきかなエホバは堅固なる城のなか
 二二 にて奇しまるゝばかりの仁慈をわれに顯したまへり われ驚きあわてゝいへらくなんぢの目のまへより絶れ
 二三 たりと然どわれ汝によびもとめしとき汝わがねがひの聲をきゝたまへり なんぢらもろの聖徒よエホバ
 二四 をいつくしめエホバは眞實あるものをまもり 傲慢者におもく報をほどこしたまふ すべてエホバを俟望む
 ものよ雄々しかれなんぢら心をかたうせよ

第三二篇

ダビデの訓諭のうた

一 その愆をゆるされその罪をおほはれしものは福ひなり 不義をエホバに負せられざるもの心に
 二 いつはりなき者はさいはひなり 我いひあらはさざりしときは終日かなしみさけびたるが故にわが骨ふるびお
 三 とろへたり なんぢの手はよるも晝もわがうへにありて重しわが身の潤澤はかはりて夏の早のごとくなれり
 四 セラ 斯てわれなんぢの前にわが罪をあらはしわが不義をおほはざりき 我いへらくわが愆をエホバにいひあ
 五 らはさんと 斯るときしも汝わがつみの邪曲をゆるしたまへり セラ されば神をうやまふ者はなんぢに遇こと

伊詩二五・二 二詩二二・三 三詩二二・七 四詩二二・七 五詩二二・七 六詩二二・七 七詩二二・七 八詩二二・七 九詩二二・七 一〇詩二二・七 一一詩二二・七 一二詩二二・七 一三詩二二・七 一四詩二二・七 一五詩二二・七 一六詩二二・七 一七詩二二・七 一八詩二二・七 一九詩二二・七 二〇詩二二・七 二一詩二二・七 二二詩二二・七 二三詩二二・七 二四詩二二・七 二五詩二二・七 二六詩二二・七 二七詩二二・七 二八詩二二・七 二九詩二二・七 三〇詩二二・七 三一詩二二・七 三二詩二二・七 三三詩二二・七 三四詩二二・七 三五詩二二・七 三六詩二二・七 三七詩二二・七 三八詩二二・七 三九詩二二・七 四〇詩二二・七 四一詩二二・七 四二詩二二・七 四三詩二二・七 四四詩二二・七 四五詩二二・七 四六詩二二・七 四七詩二二・七 四八詩二二・七 四九詩二二・七 五〇詩二二・七 五一詩二二・七 五二詩二二・七 五三詩二二・七 五四詩二二・七 五五詩二二・七 五六詩二二・七 五七詩二二・七 五八詩二二・七 五九詩二二・七 六〇詩二二・七 六一詩二二・七 六二詩二二・七 六三詩二二・七 六四詩二二・七 六五詩二二・七 六六詩二二・七 六七詩二二・七 六八詩二二・七 六九詩二二・七 七〇詩二二・七 七一詩二二・七 七二詩二二・七 七三詩二二・七 七四詩二二・七 七五詩二二・七 七六詩二二・七 七七詩二二・七 七八詩二二・七 七九詩二二・七 八〇詩二二・七 八一詩二二・七 八二詩二二・七 八三詩二二・七 八四詩二二・七 八五詩二二・七 八六詩二二・七 八七詩二二・七 八八詩二二・七 八九詩二二・七 九〇詩二二・七 九一詩二二・七 九二詩二二・七 九三詩二二・七 九四詩二二・七 九五詩二二・七 九六詩二二・七 九七詩二二・七 九八詩二二・七 九九詩二二・七 一〇〇詩二二・七

七 をうべき間になんぢに祈らん 大水あふれ流るゝともかならずその身におよばじ 汝はわがかくるべき所なり
 八 なんぢ患難をふせきて我をまもり救のうたをもて我をかこみたまはん セラ われ汝ををしへ汝をあゆむべき
 九 途にみちびきわが目をなんぢに注てさとしん 汝等わきまへなき馬のごとく驢馬のごとくなるなかれかれら
 一〇 は鑣たづなのごとき具をもてひきとめずば近づきたることなし 悪者はかなしみ多かれどエホバに依頼む
 一一 ものは憐憫にてかこまれん たゞしき者よエホバを喜びたのしめ 凡てこゝろの直きものよ喜びよばふべし
 一二 たゞしき者よエホバによりてよろこべ 讚美はなほきものに適はしきなり 琴をもてエホバに
 一三 感謝せよ 十絃のことももてエホバをほめうたへ あたらしき歌をエホバにむかひてうたひ歡喜
 一四 の聲をあげてたくみに琴をかきならせ エホバのみことばは直くそのすべて行ひたまふところ眞實なれば
 一五 なり エホバは義と公平とをこのみたまふその仁慈はあまねく地にみつ もろもろの天はエホバのみこと
 一六 ばによりて成りてんの萬軍はエホバの口の氣によりてつくられたり エホバはうみの水をあつめてうづだか
 一七 くし深淵を庫にをさめたまふ 全地はエホバをおそれ世にすめるもろもろの人はエホバをおちかしこむべし
 一八 そはエホバ言たまへば成りおほせたまへば立るがゆるなり エホバはもろもろの國のはかりごとを虚くし
 一九 もろもろの民のおもひを徒勞にしたまふ エホバの謀略はとこしへに立ちそのみこゝろのおもひは世々にたつ
 二〇 エホバをおのが神とする國はさいはひなり エホバ嗣業にせんとて撰びたまへるその民はさいはひなり
 二一 ホバ天よりうかゞひてすべての人の子を見 その在すところより地にすむもろもろの人をみたまふ エホバ

一六 はすべてかれらの心をつくりその作ところをことごとく隠みたまふ 王者いくさびと多をもて救をえず勇士
 一七 ちから大なるをもて助をえざるなり 馬はすくひに益なくその大なるちからも人をたすくることなからん
 一八 視よエホバの目はエホバをおそるゝもの並その憐憫をのぞむものの方へにあり 此はかれらのたましひを
 一九 死よりすくひ饑饉たるときにも世にながらへしめんがためなり われらのたましひはエホバを俟望めりエホ
 二〇 バはわれらの援われらの盾なり われらはきよき名によりたのめり斯てぞわれらの心はエホバにありてよろ
 二一 こばん エホバよわれら汝をまちのぞめりこれに循ひて憐憫をわれらのうへに垂たまへ

第三四篇
 一 ダビデ、アビメレクの名へにて狂へるをなし返れていでざりしときに作れるうた

二 われつねにエホバを祝ひまつらん その頌詞はわが口にたえじ わがたましひはエホバにより
 三 て誇らん 謙たるものは之をきよてよろこばん われとともにエホバを崇めよ われらとともにその名をあげた
 四 へん われエホバを尋ねたればエホバわれにこたへ我をもろもろの畏懼よりたすけいだしたまへり かれら
 五 エホバを仰ぎのぞみて光をかうぶれりかれらの面ははぢあからむことなし この苦しむもの叫びたればエホ
 六 バこれをきよそのすべての患難よりすくひいだしたまへり エホバの使者はエホバをおそるゝ者のまはりに
 七 營をつらねてこれを援く なんぢらエホバの恩恵ふかきを嘗ひしれ エホバによりたのむ者はさいはひなり
 八 エホバの聖徒よエホバを畏れよエホバをおそるゝものには乏しきことなればなり わかき獅はともしくし
 九 て餓ることありされどエホバをたづぬるものは嘉物にかぐることあらじ 子よきたりて我にきけ われエホバ

イ伯三四・二一 耶 二伯三六・七 詩三四
 三二二・九 一五 彼前三・二二 一三〇・六
 口詩四四・六 詩一四七・一 二 二九 七 二 二 三 一
 一 詩二〇七 一四七 一五二〇 詩三七 一 二九 七 二 二 三 一
 一 詩二〇七 一四七 一五二〇 詩三七 一 二九 七 二 二 三 一

十伯三六・七 詩三三 三 三四六・一五 一 六六・二 一 七 九 九 一 七 九 一 七 九 一 七 九 一 七
 一 九 詩一四五・二九 一 九 詩一四五・二九 一 九 詩一四五・二九 一 九 詩一四五・二九 一 九 詩一四五・二九
 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七
 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七
 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七
 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七 詩一四七・一 一 二 一 八 後 一 一 三 一 七

七伯三二・一八 詩一
 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下
 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下
 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下 一 四 一 八 三 一 二 一 下

二二 を畏るべきことを汝等にをしへん 福祉をみんながために生命をしたひ存へんことをこのむ者はたれぞや
 二三 んぢの舌をおさへて悪につかしめすなんぢの口唇をおさへて虚偽をいはさらしめよ 悪をはなれて善をおこ
 二四 なひ和睦をもとめて切にこのことを勉めよ エホバの目はたゞしきものをかへりみその耳はかれらの號呼に
 二五 かたぶく エホバの聖顔はあくをなす者にむかひてその跡を地より斷滅したまふ 義者さげびたればエホ
 二六 バ之をきよてそのすべての患難よりたすけいだしたまへり エホバは心のいたみなしめる者にちかく在して
 二七 たましひの悔頼れたるものをすくひたまふ たゞしきものは患難おほしされどエホバはみなその中よりたす
 二八 けいだしたまふ エホバはかれがすべての骨をまもりたまふその一つだに折らるゝことなし 惡はあしき
 二九 ものをころさん 義人をにくむものは刑なはるべし エホバはその僕等のたましひを贖ひたまふ エホバに
 三〇 依頼むものは一人だにのみなはるゝことなからん

第三五篇

一 エホバよねがはくは我にあらそふ者とあらそひ我とたゞかふものと戦ひたまへ 干と大盾とを
 二 とりてわが援にたちいでたまへ 戦をぬきいだしたまひて我におひせまるもの途をふさぎ且わが靈魂にわれ
 三 はなんぢの救なりといひたまへ 願くはわが靈魂をたづぬるもの恥をえていやしめられ我をそこなはんと
 四 謀るものの退けられて惶てふためかんことを ねがはくはかれらが風のまへなる糝糠のごとくなりエホバの
 五 使者におひやられんことを 願くはかれらの途をくらくし滑らかにしエホバの使者にかれらを追ゆかしめたま

七 はんことを せ かれらは故なく我をとらへんとて網をあなにふせ 故なくわが靈魂をそこなはんとて阱をうがちた
 八 ればなり 願くはかれらが思ひよらぬ間にほろびきたり己がふせたる網にとらへられ自らその滅におちいらん
 九 ことを 然ときわが靈魂はエホバによりてよろこびその救をもて樂しまん 一〇 わがすべての骨はいはん エホ
 バよ汝はくるしむものを之にまさりて力つよきものより並くるしむもの貧しきものを掠めうばふ者よりたすけい
 一 だし給ふ 誰かなんち無比ふべき者あらんと 二 ころあしき證人おこりてわが知ざることを詰りとふ 三
 四 らは惡をもてわが善にむくい我がたましひを依仗なきものとせり 然どわれかれらが病しときには鹿服をつけ
 五 糧をたちてわが靈魂をくるしめたり わが祈はふところにかへれり わがかれに作ることはわが友わが兄弟に
 六 ことならず母の喪にありて痛哭がごとく哀しみうなれたり 然どかれらはわが倒れんとせしとき喜びつどひ
 七 わが知ざりしとき匪類あつまりきたりて我をせめ われを裂てやめざりき 一六 かれらは酒宴にて穢きことをのぶ
 八 する嘲笑者のごとく我にむかひて齒をかみならせり 主よいたづらに見るのみにして幾何時をへたまふや 願く
 九 はわがたましひの彼等にほろぼさるゝを脱れしめ わが生命をわかき獅よりまぬかれしめたまへ 一八 われ大なる
 一〇 會にありてなんちに感謝しおほくの民のなかにて汝をほめたゝへん 虚偽をもてわれに仇するもののわが故
 二 によるこぶことを容したまふなかれ故なくして我をにくむ者のたがひに問せすることなからしめたまへ 三〇 かれ
 三 らは平安をかたらず あさむきの言をつくりまうけて國內におだやかにすまふ者をそこなはんと謀る 然のみ
 四 ならず我にむかひて口をあけひろげ あゝ視よや視よやわれらの眼これをみたりといへり 三三 エホバよ汝すでに

イ詩九・一五 二詩一三・五
 ロ詩七・一五 一六 六詩五・一八
 一七 七二・九 七三・九
 一八 九一・一〇 九二・二二
 一九 九一・一〇 九二・二二
 二〇 九一・一〇 九二・二二
 二一 九一・一〇 九二・二二
 二二 九一・一〇 九二・二二
 二三 九一・一〇 九二・二二
 二四 九一・一〇 九二・二二
 二五 九一・一〇 九二・二二
 二六 九一・一〇 九二・二二
 二七 九一・一〇 九二・二二
 二八 九一・一〇 九二・二二
 二九 九一・一〇 九二・二二
 三〇 九一・一〇 九二・二二
 三一 九一・一〇 九二・二二
 三二 九一・一〇 九二・二二
 三三 九一・一〇 九二・二二
 三四 九一・一〇 九二・二二
 三五 九一・一〇 九二・二二
 三六 九一・一〇 九二・二二
 三七 九一・一〇 九二・二二
 三八 九一・一〇 九二・二二
 三九 九一・一〇 九二・二二
 四〇 九一・一〇 九二・二二
 四一 九一・一〇 九二・二二
 四二 九一・一〇 九二・二二
 四三 九一・一〇 九二・二二
 四四 九一・一〇 九二・二二
 四五 九一・一〇 九二・二二
 四六 九一・一〇 九二・二二
 四七 九一・一〇 九二・二二
 四八 九一・一〇 九二・二二
 四九 九一・一〇 九二・二二
 五〇 九一・一〇 九二・二二
 五一 九一・一〇 九二・二二
 五二 九一・一〇 九二・二二
 五三 九一・一〇 九二・二二
 五四 九一・一〇 九二・二二
 五五 九一・一〇 九二・二二
 五六 九一・一〇 九二・二二
 五七 九一・一〇 九二・二二
 五八 九一・一〇 九二・二二
 五九 九一・一〇 九二・二二
 六〇 九一・一〇 九二・二二
 六一 九一・一〇 九二・二二
 六二 九一・一〇 九二・二二
 六三 九一・一〇 九二・二二
 六四 九一・一〇 九二・二二
 六五 九一・一〇 九二・二二
 六六 九一・一〇 九二・二二
 六七 九一・一〇 九二・二二
 六八 九一・一〇 九二・二二
 六九 九一・一〇 九二・二二
 七〇 九一・一〇 九二・二二
 七一 九一・一〇 九二・二二
 七二 九一・一〇 九二・二二
 七三 九一・一〇 九二・二二
 七四 九一・一〇 九二・二二
 七五 九一・一〇 九二・二二
 七六 九一・一〇 九二・二二
 七七 九一・一〇 九二・二二
 七八 九一・一〇 九二・二二
 七九 九一・一〇 九二・二二
 八〇 九一・一〇 九二・二二
 八一 九一・一〇 九二・二二
 八二 九一・一〇 九二・二二
 八三 九一・一〇 九二・二二
 八四 九一・一〇 九二・二二
 八五 九一・一〇 九二・二二
 八六 九一・一〇 九二・二二
 八七 九一・一〇 九二・二二
 八八 九一・一〇 九二・二二
 八九 九一・一〇 九二・二二
 九〇 九一・一〇 九二・二二
 九一 九一・一〇 九二・二二
 九二 九一・一〇 九二・二二
 九三 九一・一〇 九二・二二
 九四 九一・一〇 九二・二二
 九五 九一・一〇 九二・二二
 九六 九一・一〇 九二・二二
 九七 九一・一〇 九二・二二
 九八 九一・一〇 九二・二二
 九九 九一・一〇 九二・二二
 一〇〇 九一・一〇 九二・二二

三三 これを観たまへり ねがはくは黙したまふなかれ主よわれに遠ざかりたまふなかれ 三三 わが神よわが主よおきた
 三四 まへ醒たまへ ねがはくはわがために審判をなし わが訟をさめたまへ 三三 わが神エホバよなんちの義にした
 三五 がひて我をさばきたまへ わが事によりてかれらに歡喜をえしめたまふなかれ 三五 かれらにその心裡にてあゝ
 三六 こゝちよきかな視よこれわが願ひしところなりといはしめたまふなかれ 又われらかれを吞つくせりといはしめ
 三六 たまふなかれ 願くはわが害なはるゝを喜ぶもの皆はぢて惶てふためき 我にむかひてほりかに高ぶるもの
 三七 の愧とはづかしめとを衣んことを 一七 わが義をよみする者をばよろこび譴はしめ大なるかなエホバその僕
 三八 はひを悦びたまふと恒にいはしめたまへ 一八 わが舌は終日なんちの義となんちの譽とをかたらん

第三六篇

一 倫長にうたはしめたるエホバの僕ダビデのうた
 二 あしきものの愆はわが心のうちにかたりてその目のまへに神をおそるゝの畏あることなしとい

三 ふ かれはおのが邪曲のあらはるゝことなく憎まるゝことなからんとて自からその目にて諂る 三 その口
 四 とばは邪曲と虚偽となり 智をこばみ善をおこなふことを息たり 四 かつその寢床にてよこしまなる事をはかり
 五 よからぬ途にたちとまりて惡をきらはず 五 エホバよなんちの仁慈は天にありなんちの眞實は雲にまでおよ
 六 ぶ 汝のたゞしきは神の山のごとくなんちの審判はおほいなる淵なり エホバよなんちは人とけものとのを護り
 七 たまふ 神よなんちの仁慈はたふときかな 人の子はなんちの翼の蔭にさけどころを得 八 なんちの屋のゆた
 九 かなるによりてことごとく飽くことをえん なんちはその歡樂のかはの水をかれらに飲しめたまはん 九 そはいの

三五 我あしきもの猛くしてはびこれを見るに生立たる地にさかえしげれる樹のごとし 然れどもかれは逝
三六 ゆけり視よたちまちに無なりぬわれ之をたづねしかど遇ことをえざりき 完人に目をそぎ直人をみよ 和平
三七 なる人には後あれど 罪をかすものは共にほろぼされ悪きもの後はかならず断るべければなり
三八 しきものの救はエホバよりいづ エホバはかれらが辛苦のときの保岩なり エホバはかれらを助けかれらを解
三九 脱ちたまふ エホバはかれらを悪者よりときはなちて救ひたまふ かれらはエホバをその避所とすればなり
四〇

第三八篇

二一 記念のためにつくれるダビデのうた
二二 エホバよねがはくは忿恚をもて我をせめ げしき怒をもて我をこらしめ給ふなかれ なんぢの
二三 矢われにあたりなんぢの手わがうへを壓へたり なんぢの怒によりてわが肉には全きところなくわが罪によ
二四 りてわが骨には健かなるところなし わが不義は首をすぎてたかく重荷のごとく負がたければなり われ愚
二五 なるによりてわが傷あしき臭をはなちて腐れたられたり われ折屈みていたくなげきうなれたたり われ終日
二六 かなしみありく わが腰はことごとく焼るがごとく肉に全きところなければなり 我おとろへはて甚くきず
二七 つけられわが心のやすからざるによりて歎歎さけべり あゝ主よわがすべての願望はなんぢの前にありわが
二八 嘆息はなんぢに隠るゝことなし わが胸をどりわが力おとろへわが眼のひかりも亦われをはなれたり
二九 が友わが親めるものはわが痲をみて遙にたちわが隣もまた速かりてたてり わが生命をたづぬるものは繩を
三〇 まうけ我をそなはんとするものは悪言をいひまた終日たばかりを謀る 然はあれどわれは聖者のごとく

イ伯五三
ヘ賽三一・五
ト代上五・二〇 伯三・二四 詩二二
レ伯三一・二四 詩二二
ナ路二三・四九
口伯二〇・五
ハ詩一四・五二 五
リ伯六・四
ワ太一・二八
カ詩三五・一四
一・一 五九・一一
ラ路一七・一三
ニ詩一四・五二 五
ル詩六・二
ヨ伯三〇・二八 詩
ソ詩六・七 八・八・九
ム路後一六・七・八
ウ詩三五・二〇
ホ詩九・九
チ詩六・一
詩四〇
タ伯七・五 詩三三・三
ネ路一〇・三二 三三
ハ路後一六・一
ノ詩三九・二・九 マ詩三五・二六
二六 賽一・二二 詩
ケ詩三二・五 詩
キ王上二・四 王下
ミ詩三九・一三
モ詩三九・一四 六二
ス詩三八・二五
オ路後一六・二二 詩
カ詩二二・三三 約
キ王上二・四 王下
ミ詩三九・一三
モ詩三九・一四 六二
ス詩三八・二五
ク詩一三・四
フ路後七・九・一〇
ア詩三五・二二
エ路四・五
エ詩九〇・一一 一二
セ伯二七・一七 伯二
ヤ申三三・三五 六
コ詩三五・一・九
サ詩二七・一六 二
メ詩一四・一三 賽三
九・八四 二八 二二 二六
五二 四 路一二
二〇 二二
二五

二四 きかずわれは口をひらかぬ啞者のごとし 如此われはきかざる人のごとく口のことあげせぬ人のごときなり
二五 エホバよ我なんぢを俟望めり 主わが神よなんぢかならず答へたまふべければなり われ囊にいふおそら
二六 くはかれらわが事によりて喜び わが足のすべらんととき我にむかひて誇りにたかぶらんと われ休るゝばか
二七 りになりぬ わが悲哀はたえずわが前にあり そは我みづから不義をいひあらはし わが罪のためになしめば
二八 なり わが仇はいきはたらきてたたく故なくして我をうらむるものおほし 悪をもて善にむくゆるものは
二九 われ善事にしたがふが故にわが仇となれり エホバよねがはくは我をはなれたまふなかれ わが神よわれに
三〇 遠かりたまふなかれ 主わがすぐひよ速きたりて我をたすけたまへ

第三九篇

一 われ囊にいへりわれ舌をもて罪をかさざらんために我すべての途をつゝし悪者のわがまへ
二 に在るあひだはわが口に衝をかけんと われ黙して啞となり善言すらることばにいださずわが愛なほおこれり
三 わが心がわがうちに熱しおもひつゞくるほどに火もえぬればわれ舌をもていへらく エホバよ願くはわが終と
四 わが日の數のいくばくなるとを知しめたまへわが無常をしらしめたまへ 視よなんぢわがすべての日を一掌に
五 すぎさらしめたまふわがいのち主前にてはなきにことならず 實にすべての人は皆その盛時だにもむなしから
六 ざるはなし セラ 人の世にあるは影にことならずその思ひなやむことはむなしからざるなしその積蓄ふる
七 ものはたが手にをさまるをしらす 主よわれ今なにをかまたんわが望はなんぢにあり ねがはくは我を

九 すべての愆より助けいだしたまへ 愚なるものに誹らるゝことなからしめたまへ 我れは黙して口をひらかず
 一〇 此はなんぢの成したまふ者なればなり 願くはなんぢの責をわれよりはなちたまへ 我なんぢの手にうちこら
 二 さるゝによりて亡ぶるばかりになりぬ なんぢ罪をせめて人をこらし その慕ひよろこぶところのものを盡
 三 くらふがごとく消うせしめたまふ 實にもろもろの人はむなしからざるなし セラ あゝエホバよねがはくは
 四 わが祈をきゝわが號呼に耳をかたぶけたまへ わが涙をみて黙したまふなかれ われはなんぢに寄る旅客すべて
 五 わが列祖のごとく宿れるものなり 我こゝを去てうせざる先になんぢ面をそむけてわれを爽快ならしめたまへ

第四〇篇

一 我たへしのびてエホバを俟望みたり エホバ我にむかひてわが號呼をきゝたまへり 二 また我を
 二 ほろびの阱より泥のなかよりとりいだしてわが足を磐のうへにおきわが歩をかたくしたまへり 三 エホバはあた
 三 らしき歌をわが口にいられたまへり此はわれらの神にさゝぐる讚美なり おほくの人はこれを見ておそれ かつエホ
 四 バによりたのまん 四 エホバをおのが頼となし 高るものによらず虚偽にかたぶく者によらざる人はさいはひなり
 五 わが神エホバよなんぢの作たまへる奇しき迹とわれらにむかふ念とは甚おほくして 汝のみまへにつらねいふ
 六 ことあたはず 我これにいひのべんとすれどその數かぞふることあたはず 七 なんぢ犠牲と祭物とをよろこびた
 七 まはず汝わが耳をひらきたまへり なんぢ燔祭と罪祭とをもとめたまはず 七 そのとき我いへらく 視よわれきた
 八 らんわがことを書の巻にしるしたり 八 わが神よわれは聖意にしたがふことを樂む なんぢの法はわが心のうち

イ詩四四・二三、七九 二伯九三四、一三一、ト利二五・二三 代上 二九・五 詩一〇一・二三、
 四四・三 伯四〇、ホ伯四・九、一三、九・九 聖後五・六、一四、五、六、カ詩三七・二三、
 四四・三 伯五〇・九、來一・二、三、一、二、七、二、一、一、七、二、一、一、七、二、一、
 一、
 一、

九 九にありと 九 われ大なる會にて義をつけしめせり 視よわれ口唇をとがず エホバよなんぢ之をしりたまふ
 一〇 われなんぢの義をわが心のうちにひめおかす なんぢの眞實となんぢの拯救とをのべつたり 我なんぢの仁慈と

二 なんぢの眞理とをほほいなる會にかくさざりき 二 エホバよなんぢ憐憫をわれにをしりたまふなかれ 仁慈と
 三 眞理とをもて恒にわれをまもりたまへ 二
 四 こと能はぬまでにたりぬ その多きことわが首の髪にもまさり わが心きえうするばかりなればなり 二 エホバ
 五 よ願くはわれをすくひたまへ エホバよ急ぎきたりて我をたすけたまへ 一四 願くはわが靈魂をたづねほろぼさん
 六 とするものの皆はぢあわてんことを わが害はるゝをよろこぶもののみな後にしりぞきて恥をおはんことを
 七 願くはなんぢを
 八 尋ねむるもの皆なんぢによりて樂みよろこばんことをなんぢの救をしたふもの恒にエホバは大なるかなと
 九 となへんことを 一七 われはくるしみ且ともし 主われをねんごろに念ひたまふなんぢはわが助なり われをすく
 一〇 ひとまふ者なり あゝわが神よねがはくはためらひたまふなかれ

第四一篇

一 我たへしにかみに誦はしめたるダビデのうた

二 エホバ之をまもり之をながらしめたまはんかれは地の地にありて福祉をえんなんぢ彼をその仇のぞみに
 三 まかせて付したまふなかれ 三 エホバは彼がわづらひの床にあるをたすけ給はんなんぢかれが病るときその
 四 衾ををしきかへたまはん 四 我いへらくエホバよわれを憐みわがたましひを置したまへ われ汝にむかひて罪を

二に 語り 二 なんぢ手をもてもろもろの國人をおひしりぞけ われらの列祖をうゑ並もろもろの民をなやまして
三 われらの列祖をばびこらせたまひき 三 かれらはおのが剣によりて國をえしにあらす おのが臂によりて勝をえ
四 しにあらす 只なんぢの右の手なんぢの臂なんぢの面のひかりによれり 汝かれらを恵みたまひたればなり 神
五 よなんぢはわが王なり ねがはくはヤコブのために救をほどこしたまへ 四 われらは汝によりて敵をたふしまた
六 我儕にさからひて起りたつものをなんぢの名によりて踐壓ふべし 六 そのはわれわが弓によりたのます わが劍も
七 また我をすくふことあたはざればなり 七 なんぢわれらを敵よりすくひまたわれらを惡むものを辱かしめたま
九八 へり 八 われらはひねもす神によりてほこり われらは永遠になんぢの名に感謝せん セラ 九 しかるに今は
一〇 われらをすてゝ恥をおはせたまへり われらの軍人とともに出ゆきたまはず 一〇 われらを敵のまへより退かしめ
二 たまへり われらを惡むものその任意にわれらを掠めうばへり 二 なんぢわれらを食にそなへらるゝ羊のごとく
三 にあたへ斯てわれらをもろもろの國人のなかにちらし 三 得るところなくしてなんぢの民をうりその價により
四 てなんぢの富をましたまはざりき 四 汝われらを隣人にそらしめ われらを環るものにあなどらしめ 嘲けらし
四 めたまへり 四 又もろもろの國のなかにわれらを談柄となし もろもろの民のなかにわれらを頭ふるるゝ者とな
二五 したまへり 二五 わが凌辱ひねもす我がまへにあり わがかほの恥われをおほへり 二六 こは我をそしり我をのゝし
二七 るもの聲により我にあだし我にうらみを報るもの故によるなり 二七 これらのこと皆われらに臨みきつれどわ
一八 れらなほ汝をわすれず なんぢの契約をいつはりまもらざりき 一八 われらの心しりぞかず われらの步履なんぢの

イ出 一五・一七 申七 八 詩三四・二 耶九 又利二六・一七 申 一六 四 詩三二・七
二 詩七八・五五 二 詩七四・二二 三 詩六〇・一七 申 一五・一三 申 一八 三 詩 三〇 九・三
八〇 八 未 申八・四 一 詩三一・一〇 八二 申 一七 申 一八 三 詩 三〇 九・三
申 八・一七 香二四 一 詩三三・一六 何一 四 申 一七 申 一八 三 詩 三〇 九・三
一 二 申 一七 申 二四 一 詩三三・一六 何一 四 申 一七 申 一八 三 詩 三〇 九・三
一 二 申 一七 申 二四 一 詩三三・一六 何一 四 申 一七 申 一八 三 詩 三〇 九・三
一 二 申 一七 申 二四 一 詩三三・一六 何一 四 申 一七 申 一八 三 詩 三〇 九・三

一九 道をはなれず 然どなんぢは野犬のすみかにてわれらをきせずつけ死蔭をもてわれらをおほひ給へり 二〇 われら
二 もしおのれの神の名をわすれ或はわれらの手を異神にのべしことあらんには 二 神はこれを糺したまはざらん
三 や神はこゝろの隠れたることをも知たまふ 三 われらは終日なんぢのために死にわたされ屠られんとする羊の
三 如くせられたり 三 主よさめたまへ何なればぬぶりたまふや 起たまへ われらをとこしへに棄たまふなかれ
三 四 いかねば聖顔をかくしてわれらがうくる苦難と虐待とをわすれたまふや 三 五 われらのたましひはかどみて
三 六 塵にふしわれらの腹は土につきたり 三 六 ねがはくは起てわれらをたすけたまへなんぢの仁慈のゆゑをもて
三 七 われらを贖ひたまへ 三 七

第四五篇

一 わが心はうるはしき事にてあふる われは王のために詠たるものをいひいでん わが舌はすみやけ
二 く寫字人の筆なり 二 なんぢは人の子輩にまさりて美しく文雅そのくちびるにそゝがる このゆゑに神はとこし
三 へに汝をさいはひしたまへり 三 英雄よなんぢその劍その榮その威をこしに佩べし 四 なんぢ眞理と柔和とたゞ
五 しきとのために威をたくましくし勝をえて乗すゝめ なんぢの右手なんぢに畏るべきことををしへん 五 なんぢ
六 の矢は鋭して王のあたの胸をつらぬきもろもろの民はなんぢの下にたふる 六 神よなんぢの寶座はいやとほ永
七 くなんぢの國のつゑは公平のつゑなり 七 なんぢは義をいつくしみ惡をにくむこのゆゑに神なんぢの神はよる
八 こびの膏をなんぢの侶よりまさりて汝にそゝぎたまへり 八 なんぢの衣はみな沒薬 蘆薈 肉桂のかをりあり 琴瑟
九 の音さうげの諸殿よりいでて汝をよろこばしめたり 九 なんぢがたふとき婦のなかにはもろもろの王のむすめ

〇 あり皇后はオフルの金をかざりてなんぢの右にたつ一〇七 女よきけ目をそゝげなんぢの耳をかたふけよなんぢの民となんぢが父の家とをわすれよ二二 さらば王はなんぢの美麗をしたはん 王はなんぢの主なりこれを伏拜め三二 ツロの女は贈物をもてきたり民間のとめるものも亦なんぢの恵をこひもとめん三三 王のむすめは殿のうちにていと栄えかゞやき そのころもは金をもて織なせり三四 かれは鍼繡せる衣をきて王のもとにいざなはる之にともなへる處女もそのあとにしたがひて汝のもとにみちびかれゆかん三五 かれらは歡喜と快樂をもていざなはれ斯して王の殿にいらん三六 なんぢの子らは列祖にかはりてたちなんぢはこれを全地に君となさん三七 我なんぢの名をよろづ代にしらしめん この故にもろもろの民はいやとほ永くなんぢに感謝すべし

第四六篇

一 神はわれらの避所また力なり なやめるとききの最ちかき助なり二 さればたとひ地はかはり山はうみの中央にうつるとも我儕はおそれし三 よしその水はなりとどろきてさわぐともその溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらんセラ四 河あり そのながれは神のみやよをよろこばしめ至上者のすみたまふ聖所をよろこばしむ五 神そのなかにいませば都はうごかじ 神は朝つとにこれを助けたまはん六 もろもろの民はさわぎたちもろもろの國はうごきたり 神その聲をいだしたまへば地はやがてとけぬ七 萬軍のエホバはわれらとともなり ヤコブの神はわれらのたかき櫓なりセラ八 きたりてエホバの事跡をみよ エホバはおほくの懼るべきことを地になしたまへり九 エホバは地のはてまでも戰闘をやめしめ弓ををり戈をたち戦車一〇

イ王上二・一九 六〇・三 六・五・一〇、二〇 又申四・七 詩一四五 詩四八・一、八 賽 耳二・二七 番三、レ民一四・九 詩四六 米詩七六・三
口申二・一三 六〇・三 二六 一・一八 九 詩九三・三、四、五 申二・三、一四 賽 一五、一六、一七、一八、一九、二〇 代下三三、ナ結三九・九
ハ申九五六 賽五四 六〇・三 二六 一・一八 九 詩九三・三、四、五 申二・三、一四 賽 一五、一六、一七、一八、一九、二〇 代下三三、ナ結三九・九
ニ 詩二二・二九、七 一 一・一八 九 詩九三・三、四、五 申二・三、一四 賽 一五、一六、一七、一八、一九、二〇 代下三三、ナ結三九・九

第四七篇

一 万軍のエホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり セラ二 伶長にうたはしめたるコラの子のうた

第四八篇

一 エホバは大なり われらの神の都そのきよき山のうちにて甚くほめたまへられたまふべし二 オンの山はきたの端たかくしてうるはしく喜悅を地にあまねくあたふことよは大なる王のみよとなり三 もろもろの殿のうちに神はおのれをかき櫓としてあらはしたまへり四 みよ王等はつどひあつまりて偕にすぎゆきぬ五 かれらは都をみてあやしみ且おそれて忽ちのがれされり六 戦慄はかれらにのぞみ その苦痛は子を

二〇 汝等しづまりて我の神たるをしれ われはもろもろの國のうちにて崇められ全地にあがめ
二一 萬軍のエホバはわれらと偕なり ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり セラ
二二 伶長にうたはしめたるコラの子のうた
二三 もろもろのたみよ手をうち歡喜のこゑをあげ神にむかひてさけべ二四 いとたかきエホバはおそるべくまた地をあまねく治しめす大なる王にてましますばなり二五 エホバはもろもろの民をわれらに服はせもろもろの國をわれらの足下にまつろはせたまふ二六 又そのいつくしみたまふヤコブが譽とする嗣業をわれらのために選びたまはんセラ二七 神はよろこびさけぶ聲とともにのぼり エホバはラツバの聲とともにのぼりたまへり
二八 ほめうたへ神をほめうたへ 頌歌へわれらの王をほめうたへ二九 しみは地にあまねく王なればなり 教訓のうたをうたひてほめよ三〇 神はもろもろの國をすべをさめたまふ 神はそのきよき寶座にすわりたまふ
三一 もろもろのたみの諸侯はつどひきたりてアブラハムの神の民となれり 地のもろもろの盾は神のものなり 神はいとたふとし三二 コラの子のうたなり 讚美なり

八七 うまんとする婦のごとし 七 なんぢは東風をおこしてタルシシの舟をやぶりたまふ 八 曩にわれらが聞しごとく
 今われらは萬軍のエホバの都われらの神のみやこにて之をみることをえたり 神はこの都をとしへまで固くし
 〇九 たまはん セラ 神よ我らはなんぢの宮のうちにて仁慈をおもへり 神よなんぢの譽はその名のごとく地の
 極にまでおよべりなんぢの右手はたゞしきにて充り なんぢのもろもろの審判によりてシオンの山はよろこ
 三三 びユダの女輩はたのしむべし 二二 シオンの周囲をありき徧くめぐりてその櫓をかぞへよ 三三 その石垣に目を
 二四 とめよそのもろもろの殿をみよなんぢらこれを後代にかたりつたへんが爲なり 二四 その神はいや遠長に
 われらの神にましましてわれらを死るまでみちびきたまはん

第四九篇

二一 二もろもろの民よきけ賤きも貴きも富るも貧きもすべて地にすめる者よなんぢらともに耳をそば
 だてよ 三 わが口はかしこきことをかたり わが心はさときことを思はん 四 われ耳を喩言にかたぶけ琴をなら
 してわが幽玄なる語をときあらはさん 五 わが踵にちかゝる不義のわれを打圍むわざはひの日もいかで懼るゝ
 ことあらんや 六 おのが富をたのみ財おほきを誇るもの 七 たれ一人おのが兄弟をあがなふことあたはず之が
 九八 ために贖價を神にさゞげ 九之をとこしへに生存へしめて朽ざらしむることあたはず (靈魂をあがなふには費
 二〇 いとおほくして此事をとこしへに捨置ざるを得ざればなり) 一〇 そは智きものも死おろかもも獸心者もひと
 二 しくほろびてその富を他人にのこすことは常にみるところなり 一 かれら竊におもふ わが家はとこしへに存り
 二 わがすまひは世々にいたらんと かれらはその地におのが名をおはせたり 二 されど人は譽のなかに永くとゞま

イ耶一八・一七 二聖二二・米四・一 申二八・五八 番七 ト聖五八・一 三三五 詩五二七、六二、ヲ太一六・二六 ヨ傳二二六
 申二七・二六 申二六・三、四〇 九 詩一三三、三三、チ傳七九・九 九 又詩三八・四 一〇 可一〇・二四 詩八九・四八、九 夕傳二二四 傳二
 二〇 八二七 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二
 二二 三〇 四九 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二
 二二 三〇 四九 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二
 二二 三〇 四九 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二
 二二 三〇 四九 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二 申四七・三二

三 らず亡びうする獸のごとし 二 斯のごときは愚かなるもの途なり 然はあれど後人はその言をよしと
 二四 せん セラ かれらは羊のむれのごとくに陰府のものと定めらる 死これが牧者とならん直きもの朝にかれらを
 二五 をさめん その美容は陰府にほろぼされて宿るところなかるべし 二五 されど神われを接たまふべければわが靈魂を
 二六 あがなひて陰府のちからより脱かれしめたまはん セラ 人のとみてその家のさかえくはらんとき汝おそる
 二七 るなかれ 一七 かれの死るときは何一つたづさへゆくことあたはずその榮はこれにしたがひて下ることをせざ
 二八 ればなり 一八 かる人はいきながらふるほどに己がたましひを祝するともみづから厚うするがゆゑに人々
 二九 なんぢをほむるとも 一九 なんぢ列祖の世にゆかん かれらはたえて光をみざるべし 三〇 尊貴なかにありて曉ら
 ざる人はほろびうする獸のごとし

第五〇篇

一 アサフのうた ぜんこのうの神エホバ詔命して日のいづるところより日のいるところまであまねく地をよびたま
 三二 へり 二 かみは美麗の極なるシオンより光をはなちたまへり 三 われらの神はきたりて黙したまはじ火その前に
 四 ものをやきつくし暴風その四周にふきあれん 四 神はその民をさばかんとて上なる天および地をよびたまへり
 六五 いはく祭物をもて我とけいやくをたてしわが聖徒をわがもとに集めよと 六 もろもろの天は神の義をあらはせ
 七 神はみづから審士たればなり セラ 七 わが民よきけ我ものいはんイスラエルよきけ我なんぢにむかひて證
 八 をなさん われは神なんぢの神なり 八 わがなんぢを責るは祭物のゆゑにあらずなんぢの燔祭はつねにわが前に

〇九 あり 我はなんぢの家より牡牛をとらず なんぢの牢より牡山羊をとらず 林のもろもろのけもの山のうへ
 二一 千々の牲畜はみなわが有なり われは山のすべての鳥をのる 野のたけき獣はみなわがものなり 世界と
 二二 そのなかに充るものとはわが有なれば縦ひわれ飢るともなんぢに告じ われいかで牡牛の肉をくらひ山羊の
 二四 血をのまんや 感謝のそなへものを神にさしげよなんぢのちかひを至上者につくのへ なやみの日にわれ
 二六 をよべ我なんぢを援けん而してなんぢ我をあがむべし 然はあれど神あしきものに言給くなんぢは教を
 二八 にくみ わが言をその後にすつものなるに何のかはありありてわが律法をのべわがけいやくを口にとりしや
 二九 八 なんぢ盗人を見れば之をよしとし姦淫をおこなふもの同伴となれり なんぢその口を悪にわたすなんぢ
 三〇 の舌は詭計をくみなせり なんぢ坐りて兄弟をそしり己がはの子を誣のしれり 汝これらの事をなし
 三三 をわれ黙しぬればなんぢ我をおのれに恰にたるものとおもへりされど我なんぢを責めてその罪をなんぢの目前
 三三 につらぬべし 神をわするものよ今このことを念へおそらくは我なんぢを捕さかんと助るものあら
 三三 じ 感謝のそなへものを獻るものは我をあがむおのれの行爲をつゝしむ者にはわれ神の救をあらはさん
 第五一篇 一 ダビデがバテセバにかよひしのお預言者ナタンの來れるときよみて伶長にうたはしめたる歌
 三二 ろもろの愆をけしたまへ 二 わが不義をことごとくあらひさり我をわが罪よりきよめたまへ 三 われはわが愆を
 四 しる わが罪はつねにわが前にあり 我はなんぢにむかひて獨なんぢに罪ををかし聖前にあしきことを行へり

イ六六六 徒一七 八何一四二 來一三 九一二五一〇七 七九 歌一五
 二五 一五 二一五 六二三二五 三二八 一八 三三三三五 三三八 七九 歌一五
 口出二九 申一〇 申二二七 徒一七 八何一四二 來一三 九一二五一〇七 七九 歌一五
 一四九 申一〇 申二二七 徒一七 八何一四二 來一三 九一二五一〇七 七九 歌一五
 一四九 申一〇 申二二七 徒一七 八何一四二 來一三 九一二五一〇七 七九 歌一五

五 されば汝ものいふときは義とせられなんぢ鞠くときは咎めなしとせられ給ふ 視よわれ邪曲のなかにうまれ
 六 罪にありてわが母われをはらみたりき 六 なんぢ眞實をこゝろの衷にまでのぞみ わが隠れたるところに智慧を
 七 しろしめ給はん 七 なんぢヒソプをもて我をきよめたまへさらばわれ浄まらん 我をあらひたまへさらばわれ
 九 雪よりも白からん 八 なんぢ我によろこびと快樂とをきかせなんぢが砕きし骨をよろこばせたまへ 九 ねがは
 一〇 くは聖顔をわがすべての罪よりそむけ わがすべての不義をけしたまへ 一〇 あゝ神よわがために清心をつくり
 二 わが裏になほき靈をあらたにおこしたまへ 二 われを聖前より棄たまふなかれ 汝のきよき靈をわれより取り
 三 たまふなかれ 三 なんぢの救のよろこびを我にかへし自由の靈をあたへて我をたもちたまへ 三さらばわれ愆を
 四 をかせる者になんぢの途ををしへん罪人はなんぢに歸りきたるべし 神よわが救のかみよ血をながし罪より
 五 我をたすけいだしたまへ わが舌は聲たからかになんぢの義をうたはん 五主よわが口唇をひらきたまへ 然ば
 六 わが口なんぢの頌美をあらはさん 六なんぢは祭物をこのみたまはずもし然らずば我これをさしげんなんぢ
 七 また燔祭をも悦びたまはず 七神のもとめたまふ祭物はくだけたる靈魂なり 神よなんぢは砕けたる悔しを
 八 を赦しめたまふまじ 八ねがはくは聖意にしたがひてシオンにさいはひしエルサレムの石垣をきづきたま
 九 へ その時なんぢ義のそなへものと燔祭と全きはんさいとを悦びたまはんかくて人々なんぢの祭壇に
 牡牛をさしげべし

第五一篇

エドム人ドエグ、サウルにきたりてダビデはアビメレクの家にきぬと告しときダビデがよみて伶長に
 うたはしめたる教訓のうた

一 一 猛者よなんぢ何なればあしき企圖をもて自らほこるや神のあはれみは恒にたえざるなり 二 なんぢの舌は
 三 あしきことをはかり利き剃刀のごとくいつはりをおこなふ 三 なんぢは善よりも悪をこのみ正義をいふよりも
 四 虚偽をいふをこのむ セラ 四 たばかりの舌よなんぢはすべての物をくひほろぼす言をこのむ 五 されば神
 五 とこしへまでも汝をくだきまた汝をとらへてその幕屋よりぬきいだし生るもの地よりなんぢの根をたやし
 七 たまはん セラ 六 義者はこれを見ておそれ彼をわらひていはん 七 神をおのが力となさずその富のゆたか
 八 なるをたのみその悪をもて己をかたくせんとする人をみよと 八 然はあれどわれは神の家にあるあをき橄欖の
 九 樹のごとし 我はいやとほながに神のあはれみに依頼まん 九 なんぢこの事をおこなひ給ひしによりて我とこし
 へになんぢに感謝しなんぢの聖徒のまへにて聖名をまちのぞまん 十 是は宜しきことなればなり

第五三篇

マハラツ(樂器の名、あるひ)にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの教訓のうた

一 愚かなるものは心のうちに神なしといへり かれらは腐れたりかれらは憎むべき不義をおこなへ
 二 り善をおこなふ者なし 三 神は天より人の子をのぞみて悟るものと神をたづぬる者とありやなしやを見たまひし
 四 三 みな退ぞきてことごとく汚れたり善をなすものなし一人だになし 四 不義をおこなふものは知覚なきか
 五 かれらは物くふごとくわが民をくらひまた神をよばふことをせざるなり 五 かれらは懼るべきことのなきとき
 六 よりて汝かれらを辱かしめたり 六 願くはシオンよりイスラエルの救のいでんことを 神その民のとははれたる
 を返したまふときヤコブはよろこびイスラエルは樂まん

第五四篇

シロンのサウルにきたりてダビデはわれらの處にかくれをるにあらざやといひたりしとき

一 神よねがはくは汝の名によりて我をすくひなんぢの力をもて我をさばきたまへ 二 神よわが祈をき
 三 たまへ わが口のことばに耳をかたぶけたまへ 三 是は外人はわれにさからひて起りたち強暴人はわがたましひ
 四 を索むるなり かれらは神をおのが前におかざりき セラ 四 みよ神はわれをたすくるものなり 主はわがたまし
 五 ひを保つものとともに在せり 五 主はわが仇にそのあしきことの報をなしたまはん 願くはなんぢの眞實に
 六 よりて彼等をほろぼしたまへ 六 我よろこびて祭物をなんぢに獻ん エホバよ我なんぢの名にむかひて感謝せん
 七 是は宜しきことなればなり 七 是はエホバはすべての患難より我をすくひたまへり わが目はわが仇につきての
 願望をみたり

第五五篇

ダビデうたのかみに琴にてうたはしめたる教訓のうた

一 神よねがはくは耳をわが祈にかたぶけたまへ わが懇求をさけて身をかくしたまふなかれ 二 わ
 三 れに聖意をとめ 我にこたへたまへ われ歎息によりてやすからず悲みうめくなり 三 これ仇のこゑと悪きもの
 四 暴虐とのゆゑなり 是はかれら不義をわれに負せ いきどほりて我におひせまるなり 四 わが心わがうちに憂ひ
 五 いたみ死のよろもろの恐懼わがうへにおちたり 五 おそれと戦慄とわれにのぞみ甚だしき恐懼われをおほへり
 六 われ云ねがはくは鳩のごとく羽翼のあらんことを さらば我とびさりて平安をえん 七 みよ我はるかにのがれ
 九 八 さりて野にすまん セラ 八 われ速かにのがれて暴風と狂風とをはなれん 九 われ都のうちに強暴とあらそひと

一〇 をみたり 主よねがはくは彼等をほろぼしたまへ かれらの舌をわかれしめたまへ 彼等はひるもよるも石垣の
 二 二 うへをあるきて邑をめぐる 邑のうちには邪曲とあしき企圖とあり 二 二 また悪きこと邑のうちにあるしへたげと
 三 欺詐とはその街衢をはなるゝことなし 二 二 われを誘れるものは仇たりしものにあらずもし然りしならば尙しの
 四 ばれしなるべし 我にむかひて己をたかくせし者はわれを恨みたりしものにあらず若しかりしならば身をかくし
 五 て彼をさけしなるべし 二 三 されどこれ汝なり われとおなじきもの わが友われと親しきものなり 二 四 われら
 六 互にしたしき語らひをなし また會衆のなかに在てともに神の家にのほりたりき 二 五 死は忽然かれらにのぞみ
 七 その生るまゝにて陰府にくだらんことを そは悪事その住處にありその中にあるべきなり 二 六 されど我はたゞ神を
 八 よばんエホバわれを救ひたまふべし 二 七 夕にあしたに晝にわれなげき且かなしみうめかん エホバわが聲をき
 九 たまふべし 二 八 エホバは我をせむる戦闘よりわが靈魂をあがなひいだして平安をえしめたまへりそはわれを攻
 一〇 るもの多かりければなり 二 九 太古よりいます者なる神はわが聲をきゝてかれらを惱めたまふべし セラ かれらに
 一一 は變ることなく神をおそるゝことなし 二 一〇 かの人はおのれと睦みをりしものに手をのべてその契約をけがしたり
 一二 その口はなめらかにして乳酥のごとくなれどもその心はたゞかひなりその言はあぶらに勝りてやはらか
 一三 なれどもぬきたる劍にことならず 二 一一 なんぢの荷をエホバにゆだねよさらば汝をさゝへたまはん たゞしき人の
 一四 うごかさるゝことを常にゆるしたまふまじ 二 一二 かくて神よなんぢはかれらを亡の坑におとし入れたまはん血を
 一五 ながすものと詭計おほきものとは生ておのが日の半にもいたらざるべし 然はあれどわれは汝によりたのまん

イ詩四一九 耶九四 三九三〇 撒前五 又詩二八三、五七、二五 路一二二二 一〇二七 傳七
 ロ詩三五・二六、三八 二詩四二二 一七 四六二四、六四 彼前五・七 一七
 ハ 再後一五二、二一、一 一 但六、一〇 路一八、チ詩七、二七 三 一、二、一八 七詩五七、二四
 六・二三 詩四一九 一 徒三、一、二〇、リ徒二二、一 九 詩三七、五 太六、カ伯一五、三三 一 撒

第五六篇

ダビデがガテにてベリシテ人にとらへられしとき詠て「遠きところををる音をたてぬ鶴」の

一 あゝ神よねがはくは我をあはれみたまへ 人いきまきて我をのまんとし終日たゞかひて我をしへたゞ
 二 わが仇ひねもす急喘てわれをのまんす誇りたかぶりて我とたゞかふものおほし 三 われおそるゝときは汝に
 三 よりたのまん 四 われ神によりてその聖言をほめまつらん われ神に依頼みればおそるゝことあらじ 肉體われ
 四 になにをなし得んや 五 かれらは終日わがことを曲るなりその思念はことごとくわれにわざはひをなす
 六 かれらは群つどひて身をひそめ わが歩に目をとめてわが靈魂をうかゞひもとむ 七 かれらは不義をもてのが
 七 八 れんとおもへり 神よねがはくは憤ほりてもろもろの民をたふしたまへ 八 汝わがあまたゝびの流離をかぞへた
 九 まへり なんぢの革囊にわが涙をたくはへたまへ 二 九 これは皆なんぢの冊にしろしあるにあらずや 九 わがよびもとむ
 一〇 る日にはわが仇しりぞかん われ神のわれを守りたまふことを知る 一〇 われ神によりてその聖言をほめまつらん
 一一 我エホバによりてそのみことばを讃まつらん 二 一 二 われ神によりたのみたれば懼るゝことあらじ 人はわれに何を
 一二 なしえんや 二 三 神よわがなんぢにたてし誓はわれをまとへり われ感謝のさゝげものを汝にさゝげん 二 三 汝わが
 一三 たましひを死よりすくひたまへばなり なんぢ我をたふさじとわが足をまもり生命の光のうちにて神のまへに
 一四 我をあゆませ給ひしにあらずや

第五七篇

ダビデが洞にいりてサウルの手をのがれしとき詠て「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて

一 我をあはれみたまへ神よわれをあはれみたまへ わが靈魂はなんぢを避所とす われ禍害のすぎさるまでは
 二 なんぢの翼のかけを避所とせん 我はいとたかき神によははん わがために百事をなしをへたまふ神によは
 三 はん 神はたすけを天よりおくりて我をのまんとする者のそしるるときに我を救ひたまはん セラ 神はその憐憫
 四 その眞實をおくりたまはん わがたましひは群る獅のなかにあり火のごとくもゆる者その齒は戈のごとく
 五 矢のごとくその舌はとき劍のごとき人の子のなかに我ふしぬ 神よねがはくはみづからを天よりも高くし
 六 みさかえを全地のうへに擧たまへ かれらはわが足をとらへんとて網をまうく わが靈魂はうなたる かれ
 七 らはわがまへに阱をほりたり而してみづからその中におちいれり セラ わが心さだまれり神よわがこゝろ
 八 定まれり われ謳ひまつらん頌まつらん わが榮よさめよ 箏よ琴よさめよ われ黎明をよびさまさん 主よ
 九 われもろもろの民のなかにてなんぢに感謝し もろもろの國のなかにて汝をほめうたはん 神よねがはくは自からを天よりも高くし光榮を
 十 は大にして天にまでいたり なんぢの眞實は雲にまでいたる 神よねがはくは自からを天よりも高くし光榮を
 一 あまねく地のうへに擧たまへ

第五八篇

一 だビデがよみて「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムのうた
 二 心のうち惡事をおこなひ その手の強暴をこの地にはかりいだすなり あしきものは胎をはなるより背き
 三 とほざかり生れいづるより迷ひていつはりをいふ かれらの毒は蛇のどくのごとし かれらは蠱術をおこなふ
 四 五

イ詩五六・一 へ詩五六・一 一〇八・二 一九〇三・二一、ソ詩五一・五 賽四八
 ロ賽二六・二〇 ト詩四〇・一一、四三 ヲ詩二六・九、三〇 一〇八・四 六八
 ハ詩一七・八、六三、七 八・五 一〇八・二、二 夕詩五七・五 夕詩四〇・三 傳
 ニ詩一三八・八、八 夕詩三〇・一、四 九・二五 一〇八・三 夕詩九四・二〇 賽 一〇二・二
 ホ詩一四四・五、七 リ詩五五・二、六、四 九・二五 夕詩三六・五、七、一 一〇二・二
 ナ伯四・一〇 詩三七・七 ム伯三・一六、四六、三 一〇、一〇七、四二 夕詩六七・四、九六、マ詩五六・六
 ラ賽七・五 詩一一・二、ウ賽一〇・二五 ノ詩六八・三三 夕詩三三・九八、九 夕詩五九・一、二、三、ア母前一九・二六 詩
 一〇 牛詩五二・六、六、四、オ詩九二・五、五 夕詩一八・四、八、九、フ詩三五・二、三、四、エ詩五七・四、四、二 六四・五、七三・一 二・四

六 もの甚たくみにまじなふその聲をだにきかざる耳ふさぐ聾ひの蝮のごとし 神よかれらの口の齒ををりたま
 七 へエホバよ壯獅の牙をぬきくださったまへ 願くはかれら流れゆく水のごとくに消失しめその矢をはなつ
 八 ときは折れたるごとくなし給はんことを また融てきえゆく蝸牛のごとく婦のときならず産たる目をみぬ嬰の
 九 ごとくならしめ給へ なんぢらの釜いまだ荊蕪の火をうけざるさきに青をも燃たるをもとも狂風にて吹さり
 十 たまはん 義者はかれらが離かへさるゝを見てよろこびその足をあしきものの血のなかにてあらはん
 二 かくて人はいふべし 實にたゞしきものに報賞あり實にさばきをほどこしたまふ神はましますなりと
 サウル、ダビデを殺さんとし人をおくりてその家をかざはしめし時ダビデがよみて

第五九篇

一 「ほろぼすなかれ」といふ調にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌
 二 わが神よねがはくは我をわが仇よりたすけいだし われを高處におきて我にさからひ起立つものより脱か
 三 れしめたまへ 邪曲をおこなふものより我をたすけいだし血をながす人より我をすくひたまへ 視よかれら
 四 は潜みかくれてわが靈魂をうかゞひ猛者むれつどひて我をせむ エホバよ此はわれに愆あるにあらず われに罪
 五 あるにあらず かれら趨りまはりて過失なきに我をそこなはんとして備をなす ねがはくは我をたすくるために
 六 目をさまして見たまへ なんぢエホバ萬軍の神イスラエルの神よねがはくは目をさましてもろもろの國に
 七 のぞみたまへ あしき罪人にあはれみを加へたまふなかれ セラ かれらは夕にかへりきたり犬のごとくほえて
 八 邑をへありく 視よかれらは口より惡をはくそのくちびるに劍あり かれらおもへらく誰ありてこの言をきか
 九 んやと されどエホバよ汝はかれらをわらひもろもろの國をあざわらひたまはん わが力よ われ汝をまち

一〇 のぞまん 神はわがたかき槽なり 憐憫をたまふ神はわれを迎へたまはん 神はわが仇につきての願望をわれに見させたまはん 願くはかれらを殺したまふなかれ わが民つひに忘れやはせん 主われらの盾よ 大能をもてかれらを散しまた卑したまへ かれらがくちびるの言はその口のつみなり かれらは詛と虚偽とをいひいづるによりてその傲慢のためにとらへられしめたまへ 忿恚をもてかれらをほろぼしたまへ 再びながらふることなきまでに彼等をほろぼしたまへ ヤコブのなかに神いまして統治めたまふことをかれらに知しめて地の極にまでおよぼしたまへ セラ かれらは夕にかへりきたり 犬のごとくほえて邑をへありくべし かれらはゆきよして食物をあさりもし飽くことなくば終 夜とゞまれり されど我はなんぢの大能をうたひ清晨にこゑをあげてなんぢの憐憫をうたひまつらん なんぢわが迫りくるしみたる日にたかき槽となり わが避所となりたまひたればなり わがちからよ我なんぢにむかひて頌辭をうたひまつらん 神はわがたかき槽われにあはれみをとたまふ神なればなり

第六〇篇

ダビデ、ナハライムのアラムおよびゾバのアラムとたゝかひをりしがヨアブかへりゆき鹽谷にてエドム人一萬二千をころしよとき教訓をなさんとてダビデがよみて「證詞の百合花」といふ詞にあはせて伶長にうたはしめたるミクタムの歌

一 神よなんぢわれらを棄われらをちらし給へり なんぢは憤りたまへり ねがはくは再びわれらを歸したまへ
二 なんぢ國をふるはせてこれを裂たまへり ねがはくはその多くの隙をおぎなひたまへ 是は國ゆりうごくなり
三 なんぢはその民にたへがたきことをしめし 人をよろめかする酒をわれらに飲しめ給へり
四 なんぢ

イ詩五九・一七、六二、ハ詩五四・七、九二、ホ詩二二・三、一八、ト詩八三・一八、一〇九・一〇、ヲ詩四四・九、
ロ詩二二・三、ニ詩四九・一五、ヘ詩七・九、リ詩五九・六、ル詩五九・九、一〇、ヲ詩四四・九、ワ代下七・二〇、
ツ制二・二六、ナ書一・六、ラ申三三・一七、ホ申四九・一〇、ノ申後八・二、オ詩四四・九、六〇、六・三、六・三、一八、一八、一四、ケ書六三・三、
ナ書一・二七、ム制四九・一〇、ノ申後八・二、ク書七・二二、マ民二四・一八、代上、フ書一八・二〇、エ詩二七・四、一、九一・四、
ア詩二一・四、
ナ書一・二七、ム制四九・一〇、ノ申後八・二、ク書七・二二、マ民二四・一八、代上、フ書一八・二〇、エ詩二七・四、一、九一・四、
ア詩二一・四、
ヲ詩二七・四、
エ詩一七・八、五七、
ア詩四〇・一、
二〇・二八、
ヲ詩二〇・五、
レ詩一〇・八、六、
ソ詩八・九、三五、

眞理のために擧しめんとて 汝をおそるゝものに一つの旗をあたへたまへり セラ ねがはくは右の手をもて救をほどこしわれらに答をなして愛しみたまふものに助をえしめたまへ 神はその聖をもていひたまへり われ甚くよろこばん われシケムをわかちスコテの谷をはからん ギレアデはわがもの マナセはわが有なり エフライムも亦わが首のまもりなり ユダはわが杖 モアブはわが足 盟なり エドムにはわが履をなげん ペリシテよわが故によりて聲をあげよと されかれを堅固なる邑にすゝましめんや 誰かれをみちびきて エドムにゆきたるか 神よなんぢはわれらを棄たまひしにあらずや 神よなんぢはわれらの軍とともいひてゆきたまはず ねがはくは助をわれにあたへて敵にむかはしめたまへ 人のたすけは空しければなり われらは神によりて勇しくはたらかん われらの敵をふみたまふものは神なればなり

第六一篇

琴にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 あゝ神よねがはくはわが哭聲をきゝたまへ わが祈にみこゝろをとめたまへ わが心くづぼるるとき地のはてより汝をよばん なんぢ我をみちびきてわが及びがたきほどの高き磐にのぼらせたまへ なんぢはわが避所われを仇よりのがれしむる堅固なる槽なればなり われ永遠になんぢの帷幄にすまはん我なんぢの翼の下にのがれん セラ 神よなんぢはわがもろもろの誓をきゝ名をおそるゝものにたまふ嗣業をわれにあたへたまへり なんぢは王の生命をのばしその年を幾代にもいたらせたまはん 王はとこしへに神のみまへにとゞまらん ねがはくは仁慈と眞實とをそなへて彼をまもりたまへ さらば我とこしへに名をほめうたひて日ごとにわがもろもろの誓をつくのひ果さん

第六二篇

一 わがたましひは黙してたゞ神をまつ わがすくひは神よりいづるなり 神こそはわが磬わが
 二 すくひなれまたわが高き櫓にしあれば我いたくは動かされじ 三 なんぢらは何のときまで人におしせまるや
 四 なんぢら相共にかたぶける石垣のごとく揺ぎうごける籬のごとくに人をたふさんとするか 五 かれらは人を
 六 たふとき位よりおとさんとのみ謀り いつはりをよるこび またその口にてはいはいひその心にてはのろふセラ
 七 わがたましひよ黙してたゞ神をまつ そはわがのぞみは神よりいづ 八 神こそはわが磬わがすくひなれ 又わが
 九 たかき櫓にすれば我はうごかさされじ 十 わが救とわが榮とは神にあり わがちからの磬わがさげどころは神に
 一〇 あり 民よいかなる時にも神によりたのめ その前になんぢらの心をそゞぎいだせ 神はわれらの避所なり セラ
 一〇 實にひくき人はむなしくたかき人はいつはりなり すべてかれらを權衡におかば上にあがりて虚しきもの
 二〇 よりも軽きなり 暴虐をもて恃とするなかれ 掠奪ふをもてほころななれ 富のましくはゝる時はこれに心を
 二二 かくるなかれ 二 ちからは神にあり 神ひとたび之をのたまへり われ二次これをきけり 三 あゝ主よあはれみも
 亦なんぢにあり なんぢは人おのの作にしたがひて報をなしたまへばなり

第六三篇

一 あゝ神よなんぢはわが神なり われ切になんぢをたづねもとむ 水なき燥きおとろへたる地にある
 二 ごとくわが靈魂はかわきて汝をのぞみ わが肉體はなんぢを戀したふ 曩にも我かくのごとく大權と榮光とを

イ詩三三・二〇 へ詩二六・二 又詩三九・五一 一 一五 押前六一七 四 伯三四・二一 後 前二・一四 四三・六
 口詩六二・六 ト前二二・二 四〇・五一 一七 羅 一四九・一 一 一〇 弗六・八 四 一 押前四二・二 代上
 ハ詩三七・二四 二 押前一・一五 詩 三三四 一 一七 結七・二七 一 一七 歌二・二 一 一六・二一 詩二七
 二 押三〇・一三 四二・四 二 一九 九 伯三一・二五 詩 一七 八六・一五 一〇 三三・二〇 太一六 一 一七 歌二・二
 ホ詩二八・三 一 詩一八・二 五二・七 路二・ 三・八 伯九・九 二二七 羅二・六 歌 夕詩四二・二一 八四・

三 みんことをねがひ聖所にありて目をなんぢより離れしめざりき 三 なんぢの仁慈はいのちにも勝れるゆゑにわが
 四 口唇はなんぢを讃まつらん 四 斯われはわが生るあひだ汝をいはひ名によりてわが手をあげん 五 われ床にあり
 五 て汝をおもひいで夜の更るまゝになんぢを深くおもはん時 六 わがたましひは髓と脂とにて饗さるゝごとく飽こと
 七 をえわが口はよろこびの口唇をもてなんぢを讃たへん 七 そはなんぢわが助となりたまひたれば我なんぢの
 八 翼のかけに入てよろこびたのしまん 八 わがたましひはなんぢを慕追ふ みぎの手はわれを支ふるなり 九 然ど
 九 わがたましひを滅さんとて尋ねもとむるものは地のふかきところにゆき 一〇 又つるぎの刃にわたされ野犬の獲る
 二 ところとなるべし 二 しかれども王は神をよろこばん 神によりて誓をたつるものはみな誇ることをえん 虚偽を
 三 いふものの口はふさがるべければなり

第六四篇

一 神よわがなげくときわが聲をきゝたまへ わが生命をまもりて仇のおそれより脱かれしめたまへ
 二 ねがはくは汝われをかくして悪をなすもの陰かなる謀略よりまぬかれしめ不義をおこなふものの喧嘩より
 三 まぬかれしめ給へ 三 かれらは劍のごとくおのが舌をとき 四 その弓をはり矢をつがへるごとく苦言をはなち
 四 隠れたるところにて全者を射んとす俄かにこれを射ておそるゝことなし 五 また彼此にあしき企圖をはげまし
 五 共にはかりてひそかに網をまうく 斯ていふ誰かわれらを見んと 六 かれらはさまざまの不義をたづねいだして
 六 云われらは懇ろにたづね終れりとおのの衷のおもひと心とはふかし 七 然はあれど神は矢にてかれらを射
 七 たまふべし かれらは俄かに傷をうけん 八 斯てかれらの舌は其身にさからふがゆゑに遂にかれらは躓かん 九 此

九 を見るものみな逃れさるべし もろもろの人はおそれん而して神のみわざをのべつたへその作たまへること
 一〇 を考ふべし 義者はエホバをよろこびて之によりたのまんすべて心のなほきものは皆ほこることを得ん

第六五篇

一 あゝ神よさんびはシオンにて汝をまつ 人はみまへにて誓をはたさん 祈をきよたまふものよ

二 諸人こそぞりて汝にきたらん 不義のことば我にかてり なんぢ我儕のもろもろの愆をきよめたまはん 汝に
 三 えらばれ汝にちかづけられて大庭にすまふ者はさいはひなり われらはなんぢの家なんぢの宮のきよき處のめぐ
 四 みにて飽くことをえん われらが救のかみよ 地と海とのもろもろの極なるきはめて遠ものの恃とするなんぢは
 五 公義によりて畏るべきことをもて我儕にこたへたまはん かみは大能をおび その権力によりてもろもろの山
 六 をかたくたしめ 海のひびき狂瀾のひびきもろもろの民のかしがましきを鎮めたまへり されば極遠に
 七 すめる人々もなんぢのくさぐさの豫兆をみておそるなんぢ朝夕のいづる處をよろこび謳はしめたまふ
 八 なんぢ地にのぞみて漑そぎおほいに之をゆたかにしたまへり 神のかはに水みちたり なんぢ如此そなへをな
 九 して穀物をかれらにあたへたまへり なんぢ 賦をおほいにうるほし敵をたひらにし白雨にてこれをやはらかに
 一〇 にしその萌芽を祝し また恩恵をもて年の冕弁としたまへり なんぢの途には膏したれり その恩滴は
 一一 野の牧場をうるほし小山はみな歡びにかこまる 牧場はみな羊のむれを衣もろもろの谷は穀物におほはれ
 一二 たり かれらは皆よろこびてよばはりまた謳ふ

イ詩四〇・三 二聖六六・二三 二四 約壹一七 七 詩七六・一〇 聖 二四
 口耶五〇・二八、五一 ホ詩三八、四、四〇 九 又詩二二・二七 一七・二二、二三 夕詩四六、四
 ハ詩三二・二、五八 へ詩五一・二、七九、チ詩三三・二、八四 ラ詩八九・九、一〇七 ヨ詩六八・九、一〇、レ聖五五・二二
 ・一〇、六八・三 九 聖六・七 來九 四 詩三三・二、八四 ラ詩八九・九、一〇七 ヨ詩六八・九、一〇、レ聖五五・二二
 三、一、一七、一 出四二、一 オ詩二二、三 聖四八 ヤ聖一三・九 彼前 ケ聖五一、二三 六、一四、一七、一 夕詩三三、一、一 聖一五 聖四・三 一、一五、約九・三一
 ラ詩九六、一、二 牛書三、一四、一六 ク詩一七、三 聖四八 ヤ聖一三・九 彼前 ケ聖五一、二三 六、一四、一七、一 夕詩三三、一、一 聖一五 聖四・三 一、一五、約九・三一
 ム詩四六、八 一 詩一、四、一六 二〇 七、三 聖四八 ヤ聖一三・九 彼前 ケ聖五一、二三 六、一四、一七、一 夕詩三三、一、一 聖一五 聖四・三 一、一五、約九・三一

第六六篇

一 全地よ神にむかひて歡びよばはれ 二 その名の榮光をうたへ その頌美をさかえしめよ 三 かみ

一 全地よ神にむかひて歡びよばはれ 二 その名の榮光をうたへ その頌美をさかえしめよ 三 かみ
 四 に告まつれ 汝のもろもろの功用はおそるべきかな 大なる力によりてなんぢの仇はなんぢに畏れたがひ 全
 五 地はなんぢを拜みてうたひ名をほめうたはんと セラ 來りて神のみわざをみよ 人の子輩にむかひて作たまふ
 六 ことはおそるべきかな 神はうみをかへて乾ける地となしたまへり ひとびと歩行にて河をわたりき その處に
 七 てわれらは神をよるこべり 神はその大能をもてとこしへに統治め その目は諸國をみたまふ そむく者みづか
 八 らを崇むべからず セラ もろもろの民よわれらの神をほめまつれ 神をほめたふる聲をきこえしめよ 九 神
 一〇 はわれらの靈魂をならへしめ われらの足のうごかさるゝことをゆるしたまはず 神よなんぢはわれらを試
 一一 みて白銀をねるごとくにわれらを鍊たまひたればなり 汝われらを網にひきいれ われらの腰におもき荷をお
 一二 き 人々をわれらの首のうへに騎こえしめたまひき われらは火のなか水のなかをすぎゆけり されど汝その中
 一三 よりわれらをひきいだし 豐盛なる處にいたらしめたまへり 四 われ燔祭をもてなんぢの家にゆかん 迫りくるし
 一四 みたるときにわが口唇のいひいでわが口ののべし誓をなんぢに償はん 五 われ肥たるものを燔祭とし 牡羊を馨香
 一五 として汝にさしげ 牡牛と牡山羊とをそなへまつらん セラ 神をおそるゝ人よ みな來りてきけ われ神のわが
 一六 たましひのために作たまへることをのべん 七 われわが口をもて神によばはり また舌をもてあがむ 八 然るに
 一七 わが心にしれる不義あらば主はわれにきよたまふまじ 九 されどまことに神はきよたまへり 聖意をわがいのりの
 一八 聲にとめたまへり 神はほむべきかな わが祈をしりぞけず その憐憫をわれよりとりのぞきたまはざりき

第六七篇

一 ねがはくは神われらをあはれみわれらをさきはひてその聖顔をわれらのうへに照したまはん
 二 ことをセラ 此はなんぢの途のあまねく地にしられなんぢの救のもろもろの國のうち知れんがためなり
 三 かみよ庶民はなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたへん もろもろの國はたのしみ又よこび
 四 うたふべしなんぢは直をもて庶民をさばき地のうへなる萬の國をさめたまふべければなり セラ 神よ
 五 たみらはなんぢに感謝し もろもろの民はみな汝をほめたへん 地は産物をいだせり 神わが神はわれらを
 六 福ひたまはん 神われらをさきはひたまふべしかくて地のもろもろの極ことごとく神をおそれん

第六八篇

一 ねがはくは神おきたまへその仇はことごとくちり神をにくむものは前よりにげざらんことを
 二 烟のおひやらるゝごとくかれらを驅逐たまへ 悪きものは火のまへに蠟のとくるごとく 神のみまへにてほろぶ
 三 べし されど義きものには歡喜あり かれら神の前にてよろこびをどらん實にたのしみて喜ばん 神のみまへ
 四 にうたへその名をほめたへよ 乘て野をすぐる者のために大道をきづけ かれの名をヤハとよぶその前による
 五 こびをどれ きよき住居にまします神はみなしごの父やもめの審士なり 神はよるべなきものを家族の中に
 六 をらしめ囚人をときて福祉にみちびきたまふ されど悖逆者はうるほひなき地にすめり 神よなんぢは民
 七 にさきだちいでて野をすゝみゆきたまひき セラ そのとき地ふるひ天かみのみまへに漏る シナイの山すら神

イ民六・二五 詩四 ハ路二・三〇・三一多 ヘ利二六四 詩八五 リ賽九・一八 何一三 ヲ詩六六四 三・九 四〇
 六六・三一・一六 二二二 結三四・二七 又詩九七・五 米一・四 カ詩一〇七・一〇、一 ン出二二・二一 士四
 一〇・三・七一・九 二詩六六・四 ト詩二二・二七 又詩九七・五 米一・四 カ詩一〇七・一〇、一 ン出二二・二一 士四
 一〇・三・七一・九 二詩六六・四 ト詩二二・二七 又詩九七・五 米一・四 カ詩一〇七・一〇、一 ン出二二・二一 士四
 一〇・三・七一・九 二詩六六・四 ト詩二二・二七 又詩九七・五 米一・四 カ詩一〇七・一〇、一 ン出二二・二一 士四
 一〇・三・七一・九 二詩六六・四 ト詩二二・二七 又詩九七・五 米一・四 カ詩一〇七・一〇、一 ン出二二・二一 士四

九 イスラエルの神の前にふるひうごけり 神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたるとき豊かなる雨をふらせ
 一〇 て之をかたくしたまへり 曩になんぢの公會はその中にとどまれり 神よなんぢは恵をもて貧きもののために
 一一 預備をなしたまひき 主みことばを賜ふその佳音をのぶる婦女はおほくして群をなせり もろもろの軍旅
 一二 の王たちはにげさる 逃去りたれば家なる婦女はその掠物をわかつ なんぢら羊の牢のうちに入すときは鴿の
 一三 つばさの白銀におほはれその毛の黄金におほはるゝがごとし 全能者かしこにて列王をちらし給へるときはサ
 一四 ルモンシナイの山に雪ふりたるがごとくなりき バシヤンのやまは神の山なりバシヤンのやまは峰かさなれる山なり
 一五 峰かさなれるもろもろの山よなんぢら何なれば神の住所にえらびたまへる山をねたみ見るや 然れエホバは
 一六 永遠にこの山にすみたまはん 神の戦車はよろづに萬をかさね干にちちをくはふ 主その中にいませり 聖所
 一七 にいますごとくシナイの山にいましゝがごとし なんぢ高處にのぼり虜者を取りこにしてひきぬ禮物を人の
 一八 なかよりも叛逆者のなかよりも受たまへり ヤハの神にに任たまはんが爲なり 日々ににわれらの荷を
 一九 おひたまふ主われらのすくひの神はほむべきかな セラ 神はしばしばわれらを助けたまへる神なり 死より
 二〇 のがれうるは主エホバに由る 神はその仇のかうべを撃やぶりたまはん 愆のなかにとゞまるものの髪おほき
 二一 顛頂をうちやぶりたまはん 主いへらく我バシヤンよりかれらを携へかへり海のふかき所よりたづさへ
 二二 歸らん 斯てなんぢの足をそのあたの血にひたし之をなんぢの犬の舌になめしめん 神よすべての人は
 二三 なんぢの進ききたまふをみたり わが神わが王の聖所にすゝみゆきたまふを見たり 蓑つうつ童女のなかに

三 苦草をわがくひものにあたへわが渴けるときに醋をのませたり ねがはくは彼等のまへなる筈は網となり
 三三 そのたのむ安逸はつひに網となれ 三三 その目をくらくして見しめずその腰をつねにふるはしめたまへ 願く
 三四 はなんちの忿恚をかれらのうへにそゝぎ汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ 三三 かれらの屋をむなし
 三五 せよその幕屋に人をすまはするなかれ 三六 かれらはなんちが撃たまひたる者をせめなんちが傷けたまひたる
 三六 ものの痛をかたりふるればなり 三六 ねがはくはかれらの不義に不義をくはへてなんちの義にあづからせ給ふ
 三九 なかれ 二八 かれらを生命の冊よりけして義きものとともに記さるゝことなからしめたまへ 斯てわれはくるし
 三〇 み且うれひあり 神よねがはくはなんちの救われを高く處におかんことを 三〇 われ歌をもて神の名をほめたまへ
 三三 感謝をもて神をあがめまつらん 三三 此はをうしまたは角と蹄とある力つよき牡牛にまさりてエホバよろこびたま
 三三 はん 謙遜者はこれを見てよろこべり 神をしたふ者よなんちらの心はいくべし 三三 エホバは乏しきものの聲
 三四 をきゝその俘囚をかるしめたまはざればなり 三四 天地はエホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものとは
 三五 エホバを讃まつるべし 三五 神はシオンをすくひユダのもろもろの邑を建たまふべければなり かれらは其處に
 三六 すみ且これをおのが有とせん 三六 その僕のすゑも亦これを嗣その名をいつくしむ者その中にすまん
 三六 俗長にうたはしめたるダビデが記念のうた

第七〇篇

一 神よねがはくは我をすくひたまへ エホバよ速きたりて我をたすけたまへ 二 わが靈魂をたづぬ
 三 るものの恥あわてんことを わが害はるゝをよろこぶものその後にしりぞきて恥をおはんことを 三 あゝ視よ

伊太二七・三四、四八 一・二二・三九、四〇 羅 一・二〇 路 九・九 結 一三・九 路 一〇 九 九・一三
 可一五・二三 約 一・一〇 哥後三 へ 賽五三・四 二・二〇 來 二二・三三 三 詩 二二・二六
 一五・二九 二 撒前二・一六 下代下二八・九 亞 一 又 出 三二・三二 申 四 一 詩 二八・七 三 詩 五〇・一、二、四、
 八 賽六・九、一〇 約 二 撒前二・一六 徒 一 一 羅 一・二八 三 撒 三・五、一三 王 詩 五〇・一、二、四、 九 詩 九六・一、一四、
 一 詩 三二・一 一 耶 一七・七、一七 一 耶 一七・七、一七 三 撒 三・五、一三 王 詩 五〇・一、二、四、 九 詩 九六・一、一四、
 一 詩 三二・一 一 耶 一七・七、一七 三 撒 三・五、一三 王 詩 五〇・一、二、四、 九 詩 九六・一、一四、
 一 詩 三二・一 一 耶 一七・七、一七 三 撒 三・五、一三 王 詩 五〇・一、二、四、 九 詩 九六・一、一四、

視よやといふもののおのが恥によりて後にしりぞかんことを すべて汝をたづねもとむる者のなんちによりて
 樂みよろこばんことをなんちの救をしたふものにつねに神は大なるかなとなへんことを われは苦しみ且
 ともし神よいそぎて我にきたりたまへ 汝はわが助われを救ふものなり エホバよねがはくは猶豫たまふなかれ

第七一篇

一 エホバよ我なんちに依頼むねがはくは何の日までも恥うくることなからしめ給へ 二 なんちの
 義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ なんちの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ 三
 四 がはくは汝わがすまひの磐となりたまへ われ恒にそのところに往くことを得んなんち我をすくはんとて勅命を
 五 いたしたまへり そは汝はわが磐わが城なり 四 わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のでより 我をまぬ
 六 かれしめたまへ 主エホバよなんちはわが望なり 七 わが幼少よりの恃なり 六 われ胎をはなるゝより汝にまも
 七 られ母の腹にありしときより汝にめぐまれたり 我つねに汝をほめたまへん 七 我おほくの人にあやしまるゝこ
 八 とき者となれり 然どなんちはわが堅固なる避所なり 八 なんちの頌辭となんちの頌美とは終日わが口にみちん
 九 わが年老ぬるとき我をすてたまふなかれ わが力おとろふるとき我をはなれたまふなかれ 一〇 わが仇はわが
 二 ことを論らひ わが靈魂をうかゞふ者はたがひに議ていふ 二 神かれを離れたり彼をたすくる者なし かれを追て
 三 とらへよと 神よわれに遠ざかりたまふなかれ わが神よとく來りて我をたすけたまへ 三 わがたましひの
 四 敵ははぢ且おとろへ我をそこなはんとするものは謗と辱とにおほはれよ 四 されど我はたえず望をいだきていや
 五 ますます汝をほめたまへん 五 わが口はひねもす汝の義となんちの救とをかたらん われその數をしらざれば

二六 なり 一六 われは主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん われは只なんぢの義のみをかたらん 神よなんぢ
 二七 われを幼少より教へたまへり われ今にいたるまで 汝のくすしき事跡をのべつたへたり 神よねがはくは
 二八 われ老て頭髮しろくなるも我がなんぢの力を次代にのべつたへ なんぢの大能を世にうまれいづる凡のものに
 二九 宣傳ふるまで我をはなれ給ふなかれ 神よなんぢの義もまた甚たかしなんぢは大なることをなしたまへり
 三〇 神よたれか汝にひとしき者あらんや 汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへりなんぢ再びわれらを活し
 三一 われらを地の深所よりあげたまはん ねがはくは我をいよいよ大ならしめ歸りきたりて我をなぐさめ給へ
 三二 わが神よさらばわれ等をもて汝をほめなんぢの眞實をほめたまへん イスラエルの聖者よわれ等をもて
 三三 なんぢを讃うたはん われ聖前にうたふときわが口唇よろこびなんぢの贖ひたまへるわが靈魂おほいに喜ばん
 三四 わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん われを害はんとするもの愧惶つればなり

第七二篇

ソロモンのうた

一 神よねがはくは汝のもろもろの審判を王にあたへなんぢの義をわうの子にあたへたまへ かれ
 二 は義をもてなんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん 義によりて山と岡とは民に平康をあたふべし
 三 かれは民のくるしむ者のために審判をなし乏しきものの子輩をすくひ唐ぐるものを壞きたまはん かれら
 四 は日と月とのあらんかぎり世々おしなべて汝をおそるべし かれは刈とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす
 五 白雨のごとくのぞまん かれの世にたゞしき者はさかえ平和は月のうするまで豊かならん またその政治は

イ詩七二・九 本六六・二、二 詩一〇三・四 王詩八五・一〇 賽ヨ後三三・四 何六 四・二二、二四 詩
 口詩五七・一〇 へ詩九二・一三、一 詩七二・八、一五 三二・二七、二七 二二 二八、八〇、一、 二九、二二、二六、
 ハ詩三五・一〇、八六 五〇・三 又詩七二・一三 王賽二・四、二四 四 八九・二五 四九 二九、二二、二六、
 二八、八九、六、八 ト王下九・二二 賽九・二二、二四、三 九 九・二七、一七、 路一・三三、 一〇 一〇 二七、
 二六、〇、三 六〇・九 六二・二 賽九・二二、二四、三 八九・三六、三七、 出三三・三三、 王上 二七、
 二七、
 ラ伯二九・二 本詩八九・三六 才路一四八 十代上二九・一〇 詩マ尼九・六 一四・九 詩三三・七 二七、一〇、二九、
 ム詩一六・二五 ノ制一三・三、 二二、 七七一、四、 一三六 四一・二二、 一〇六 ケ民一四・二二 一四 一四・二、二 詩 一七、一〇、二九、
 ウ王上四・二〇 一八 耶四・二 七七、四、 一三六 四一・二二、 一〇六 ケ民一四・二二 一四 一四・二、二 詩 一七、一〇、二九、
 一七、一〇、二九、
 九の野にをる者はそのまへに屈み 二〇のその仇は塵をなめん
 九の野にをる者はそのまへに屈み 二〇のその仇は塵をなめん
 九の野にをる者はそのまへに屈み 二〇のその仇は塵をなめん

一〇九 海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし 野にをる者はそのまへに屈み 二〇のその仇は塵をなめん
 二一 シシおよび島々の王たちは貢ををさめシバとセバの王たちは禮物をさしげん もろもろの王はそのまへに
 二二 俯伏しもろもろの國はかれにつかへん 三 かれは乏しき者をその叫ぶときにすくひ 助けなき苦しむ者をたすけ
 二三 弱きものと乏しき者とをあはれみ乏しきものの靈魂をすくひ 四 かれらのたましひを暴虐と強暴により
 二四 あがなひたまふその血はみまへに貴かるべし 五 かれらは存ふべし人はシバの黄金をさしげてかれのために
 二五 恒にいのり終日かれをいはん 六 國のうち五穀ゆたかにしてその實はレバノンのごとく山のいたゞきにそよぎ
 二六 邑の人々は地の草のごとく榮ゆべし 七 かれの名はつねにたえず 八 かれの名は日の久しきごとくに絶ることなし
 二七 人はかれによりて福祉をえんもろもろの國はかれをさいはひなる者ととなへん 九 大イイスラエルの神
 二八 のみ奇しき事跡をなしたまへり 神エホバはほむべきかな 一〇 彼の榮光の名はよくにほむべきかな 全地はその
 二九 榮光にて満べしアーメンアーメン 一〇 エッサイの子ダビデの祈はをはりぬ

第七三篇

アサフのうた

一 神はイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひてまことに恵あり 然はあれどわれはわが足
 二 つまづくばかりわが歩すべかりにてありき 三 こはわれ悪きものの榮ゆるを見てその誇れる者をねたみし
 三 による 四 かれらは死るに苦しみなくそのちからは反てかたし 五 かれらは人のごとく愛にをらす人のごとく
 六 患難にあふことなし 七 このゆゑに傲慢は妝飾のごとくその頭をめくり 八 強暴はこころのごとく彼等をおほへり
 七 かれら肥ふとりてその目とびいで心の欲にまさりて物をうるなり 九 また嘲笑をなし惡をもて暴虐のことばを

いだし高ぶりてもいふ 九 その口を天におきその舌を地にあまねく往しむ 一〇 このゆゑにかれの民はこゝに
 二一 加へり水のみちたる杯をしほりいだして 一二 いへらく神いかで知たまはんや 至上者に知識あらんやと 視よ
 二三 かれらは悪きものなるに常にやすらかにしてその富ましくはれり 一三 誠に我はいたづらに心をきよめ罪をか
 二四 さずして手をあらひたり 一四 そはわれ終日なやみにあひ朝ごとに責をうけしなり 一五 われもし斯ることを述んと
 二六 いひしならば我なんちが子輩の代をあやませしならん 一六 われこれらの道理をしらんとして思ひめぐらしに
 二七 わが眼いたく痛たり 一七 われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでは然りき 一八 誠になんちはかれ
 二九 らを滑かなるところにおきかれらを滅亡におとしいれ給ふ 一九 かれらは瞬間にやぶれたるかな 彼等は恐怖を
 三〇 もてことごとく滅びたり 二〇 主よなんち目をさましてかれらが像をかるしめたまはんときは夢みし人の目さめ
 三二 たるがごとし 二二 わが心はうれへ わが腎はさゝれたり 二三 われおろかにして知覚なし聖前にありて獸にひとし
 三三 かりき 三三 されど我つねになんちとともにあり 汝わが右手をたもちたまへり 三四 なんちその訓諭をもて我を
 三五 みちびき後またわれをうけて榮光のうちに入たまはん 三五 汝のほかに我たれをか天にもたん 地にはなんちの
 三六 他にわが慕ふものなし 三六 わが身とわが心とはおとろふ されど神はわがこゝろの磐わがとしへの嗣業なり
 三七 視よなんちに遠きものは滅びん 汝をばなれて姦淫をおこなふ者はみななんち之をほろぼしたまひたり
 三八 神にちかづき奉るは我によきことなり われは主エホバを避所としてそのもろもの事跡をのべつたへん

第七四篇

アサフの教訓のうた

イ 彼後二・一八 編 二詩七三三 卜 傳八・二七
 一六 水 伯二・一五 三四 詩七三・三
 一七 詩七五・八 九 三・三三 馬 詩三三・三
 一八 詩二二・一三 詩 三・三四 又 詩三五・六
 一九 詩二二・九四・七 詩 二六・六 又 詩七五・六五
 二〇 詩四四・九・二三 三
 二一 六〇・一〇・七七 牛 出二五・一六 申 九
 二二 七〇 耶 三・三七 十五上六・一八・二九
 二三 三三・二四 申 三二・九 耶 一〇
 二四 詩九五・七・一〇 二六 王 下二五・九
 二五 詩八九・三九 九
 二六 詩八三・四 一
 二七 詩八・一 一
 二八 詩九二・六 三〇
 二九 詩八四・二 一一九
 三〇 詩九二・六 三〇
 三一 詩八四・二 一一九
 三二 詩九二・六 三〇
 三三 詩八四・二 一一九
 三四 詩九二・六 三〇
 三五 詩八四・二 一一九
 三六 詩九二・六 三〇
 三七 詩八四・二 一一九
 三八 詩九二・六 三〇
 三九 詩八四・二 一一九
 四〇 詩九二・六 三〇

一 神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや 奈何ばなんちの草苑の羊にみいかりの煙あがるや
 二 ねがはくは往昔なんちが買求めたまへる公會ゆづりの支派となさんとて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ
 三 又なんちが住たまふシオンのおもひいで給へ 三 とこしへの滅亡の跡にみあしを向たまへ 仇は聖所にてもろ
 四 もろの悪きわざをおこなへり 四 なんちの敵はなんちの集のなかに吼たけびおのが旗をたてて誌とせり 五 かれ
 五 らは林のしげみにて斧をあぐる人の状にみゆ 六 いま鉞と鎚とをもて聖所のなかなる彫刻めるものをことごとく
 六 毀ちおとせり 七 かれらはなんちの聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり 八 かれら心のうちに
 九 いふ われらことごとく之をこぼちあらさんとかくて國內なる神のもろもの會堂をやりつくせり 九 われらの
 一〇 誌はみえず預言者も今はなし 斯ていくその時をかふべきわれらのうちに知るものなし 一〇 神よ敵はいくその時
 一一 をふるまでそしるや 仇はなんちの名をとこしへに汚すならんか 一二 いかなれば汝その手みぎの手をひきたまふ
 一二 やねがはくは手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ 一三 神はいにしへよりわが王なり すぐひを世
 一四 の中におこなひたまへり 一四 なんちその力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をください 一四 鱉のかうべをうち
 一五 くだき野にすめる民にあたへて食となしたまへり 一五 なんちは泉と水流とをひらき 又もろもの大河をからし
 一六 たまへり 一六 晝はなんちのもの夜も又汝のものなり なんちは光と日とをそなへ 一七 あまねく地のもろもの界
 一八 をたて夏と冬とをつくりたまへり 一八 エホバよ仇はなんちをそしり愚かなる民はなんちの名をけがせりこの事を
 一九 おもひいでたまへ 一九 願くはなんちの鶴のたましひを野のあらしにわたしたまふなかれ 苦しむもの命を

三〇 とこしへに忘れたまふなかれ 契約をかへりみたまへ 地のくらきところは強暴の宅にて充たればなり ね
 三二 がはくは虐げらるゝものを慚退かしめ給ふなかれ 惱るものと苦しむものとに聖名をほめたゝへしめたまへ
 三三 神よおきてなんぢの訟をあげつらひ愚かなるものの終日なんぢを誇れるをみこゝろに記たまへ なんぢの
 敵の聲をわすれたまふなかれ 汝にさからひて起りたつ者のかしがましき聲はたえずあがり

第七五篇

一 神よわれら汝にかんしやす われら感謝す なんぢの名はちかく坐せばなり もろもろの人はなん
 二 ぢの奇しき事跡をかたりあへり 定りたる期いたらば我なほき審判をなさん 地とすべての之にすむものと
 三 消去しとき我そのもろもろの柱をたてたり セラ われ誇れるものに誇りかにおこなふなかれといひ 悪きもの
 四 に角をあぐるなかれといへり なんぢらの角をたかく擧るなかれ頸をかたくして高りいふなかれ 擧ること
 五 は東よりにあらず西よりにあらず また南よりにあらずなるなり たゞ神のみ審士にましますば此をさげ彼を
 六 あげたまふ エホバの手にさかづきありて酒あわだてり その中にもまじりてみつ 神これをそゞぎいだせり
 七 誠にその滓は地のすべてのあしき者しぼりて飲むべし されど我はヤコブの神をのべつたへん とこしへに
 八 讃うたはん われ悪きものすべての角をきりはなたん 義きものの角はあげらるべし

第七六篇

一 神はユダにいられたまへり その名はイスラエルに大なり またサレムの中にその幕屋あり
 二 その居所はシオンにあり 彼所にてかれは弓の火矢ををり盾と剣と戦陣とをやぶりたまひき セラ なんぢ
 三 琴にあはせて伶長にうたはしめたるアサフの歌なり 讚美なり
 四 イ創一七・七八 利 三三・二二 申前二七 但二 六〇・三 耶二五 申三二・七 詩一四 四八・二五
 五 一〇六・四五 詩 七四・二八 八九 二詩五〇・六 五八 二二 一五 歌一四・一〇 申三二・二〇 又詩八九・一七 一四 詩四六・九 結三九
 六 三九・四 三九・二〇 申代下二〇・二九 三 申代下三二・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二
 七 三九・四 三九・二〇 申代下二〇・二九 三 申代下三二・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二
 八 三九・四 三九・二〇 申代下二〇・二九 三 申代下三二・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二
 九 三九・四 三九・二〇 申代下二〇・二九 三 申代下三二・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二
 一〇 三九・四 三九・二〇 申代下二〇・二九 三 申代下三二・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二 申代下三三・二二

第七七篇

一 我わがこゑをあげて神によははん われ聲を神にあげなばその耳をわれにかたぶけたまはん
 二 わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり 夜わが手をのべてゆるむることなかりき わがたましひは慰めらる
 三 るをいなみたり われ神をおもひいでて打なやむ われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬ セラ なんぢは
 四 わが眼をさへて閉がしめたまはず 我はものいふこと能はぬほどに惱みたり われむかしの日にしへの
 五 年をおもへり われ夜わが歌をおもひいづ 我わが心にてふかくおもひわが靈魂はねもころに尋ねもとむ
 六 主はとこしへに棄たまふや 再びめぐみを垂たまはざるや その憐憫はのこりなく永遠にさり そのちかひは
 七 世々ながく廢れたるや 神は恩をほどこすことを忘れたまふや 怒をもてそのあはれみを滅たまふや セラ

第七七篇

一 我わがこゑをあげて神によははん われ聲を神にあげなばその耳をわれにかたぶけたまはん
 二 わがなやみの日にわれ主をたづねまつれり 夜わが手をのべてゆるむることなかりき わがたましひは慰めらる
 三 るをいなみたり われ神をおもひいでて打なやむ われ思ひなげきてわが靈魂おとろへぬ セラ なんぢは
 四 わが眼をさへて閉がしめたまはず 我はものいふこと能はぬほどに惱みたり われむかしの日にしへの
 五 年をおもへり われ夜わが歌をおもひいづ 我わが心にてふかくおもひわが靈魂はねもころに尋ねもとむ
 六 主はとこしへに棄たまふや 再びめぐみを垂たまはざるや その憐憫はのこりなく永遠にさり そのちかひは
 七 世々ながく廢れたるや 神は恩をほどこすことを忘れたまふや 怒をもてそのあはれみを滅たまふや セラ

二六 神は天に東風をふかせ大能もて南の風をみちびきたまへり 神はかれらのうへに塵のごとく肉をふらせ
 二七 海の沙のごとく翼ある鳥をふらせて その營のなかその住所のまはりに落したまへり 斯てかれらは食ひて
 二八 飽たりぬ 神はこれにその欲みしものを與へたまへり かれらが未だその慾をはなれず食物のなほ口のうちに
 二九 あるほどに 神のいかり既かれらに對ひてたちのぼり彼等のうちにて最もこえたる者をころしイスラエルの
 三〇 わかき男をうちたふしたまへり これらの事ありしかど彼等はなほ罪ををかしてその奇しきみわざを信ぜざり
 三一 しかば 神はかれらの目を空しくすぐさせその年をおそれつゝ過させたまへり 神かれらを殺したまへる
 三二 時かれら神をたづね歸りきたりて懇ろに神をもとめたり かくて神はおのれの磐いとたかき神はおのれの
 三三 贖主なることをおもひいでたり 然はあれど彼等はたゞその口をもて神にへつらひその舌をもて神にいつ
 三四 はりをいひたりしのみ そはかれらのころは神にむかひて堅からずその契約をまもるに忠信ならざりき
 三五 されど神はあはれみに充たまへばかれらの不義をゆるして亡したまはず屢ばそのみいかりを轉してことごと
 三六 くは忿恚をふりおこし給はざりき 又かれがたゞ肉にして過去ばふたゞび歸りこぬ風なるをおもひいで給へり
 三七 かれらは野にて神にそむき荒野にて神をうれへしめしこと幾次ぞや かれらかへすがへす神をころみ
 三八 イスラエルの聖者をはづかしめたり かれらは神の手をも敵より贖ひたまひし日をおもひいでざりき
 三九 神はそのもろもろの豫兆をエジプトにあらはしその奇しき事をゾアンの野にあらはし かれらの河を血に
 四〇 かはらせてその流を飲あたはざらしめ また蠅の群をおくりてかれらをくはしめ蛙をおくりてかれらを亡させ

イ民二・三二 本詩七八・二二 一六 第一四一 九 第一四二 九
 二六 六四 六五 二六 六四 六五 二六 六四 六五 二六 六四 六五 二六 六四 六五 二六 六四 六五 二六 六四 六五
 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六 一七 一四 一六

四六 たまへり 神はかれらの田産を蝨賊にわたしかれらの勤勞を蝗にあたへたまへり 神は雹をもてかれら
 四七 の葡萄の樹をからし霜をもてかれらの桑の樹をからし その家畜をへうにわたしその群をもゆる閃電にわた
 四八 し かれらの上にはげしき怒といきどほりと怨恨となやみと禍害のつかひの群とをなげいだし給へり 神は
 四九 その怒をもらす道をまうけかれらのたましひを死よりまぬかれしめすそのいのちを疫癘にわたし エジプト
 五〇 にてすべての初子をうちハムの幕屋にてかれらの力の始をうちたまへり されどおのれの民を羊のごとくに
 五一 引いだしかれらを曠野にてけだもの群のごとくにみちびき かれらをともなひておそれなく安けからしめ
 五二 給へりされど海はかれらの仇をおほへり 神はその聖所のさかひその右の手にて購たまへるこの山に彼らを
 五三 携へたまへり 又かれらの前にもろもろの國人をおもひいだし準繩をもちぬ その地をわかちて嗣業となし
 五四 イスラエルの族をかれらの幕屋にすまはせたまへり 然はあれど彼等はいとたかき神をころみ之にそむきて
 五五 そのもろもろの證詞をまもらず 叛きしりぞきてその列祖の如く眞實をうしなひくるへる弓のごとくひるが
 五六 へりて逸ゆけり 高處をまうけて神のいきどほりをひき刻める像にて神の嫉妬をおこしたり 神きゝたま
 五七 ひて甚だしくいかり大にイスラエルを憎みたまひしかば 人々の間におきたまひし幕屋なるシロのあげばりを
 五八 棄さり その力をとりことならしめ その榮光を敵の手にわたし その民を劍にあたへその嗣業にむかひて
 五九 甚だしく怒りたまへり 火はかれらのわかき男をやきつくしかれらの處女はその婚姻の歌によりて響らるゝ
 六〇 ことなく かれらの祭司はつるぎにて仆れかれらの寡婦は喪のなげきだにせざりき 斯るときに主は

六六 ねぶりし者のさめしごとく勇士の酒によりてさけぶがごとく目さめたまひて 六六 その敵をうちしりぞけとこし
 六八 への辱をかれらに負せたまへり 六七 またヨセフの幕屋をいなみエフライムの族をえらばず 六八 ユダの族その
 六九 につくしみたまふシオンの山をえらびたまへり 六九 その聖所を山のごとく永遠にさだめたまへる地のごとくに立
 七〇 たまへり 七〇 またその僕ダビデをえらびて羊の牢のなかよりとり 七一 乳をあたふる牝羊にしたがひゆく勤のうち
 七二 より携へきたりてその民ヤコブその嗣業イスラエルを牧はせたまへり 七三 斯てダビデはそのころの完全に
 したがひてかれらを牧ひその手のたくみをもて之をみちびけり

第七九篇

一 あゝ神よもろもろの異邦人はなんぢの嗣業の地ををかしなんぢの聖宮をけがしエルサレムを
 二 こぼちて礫堆となし 二 なんぢの僕のしかばねをそらの鳥に與へて餌となしなんぢの聖徒の肉を地のけものに
 三 あたへ 三 その血をエルサレムのめぐりに水のごとく流したり 四 されど之をはうむる人なし 四 われらは隣人に
 五 そしられ四周のひとびとに侮られ嘲けらるゝものとなれり 五 エホバよ斯て幾何時をへたまふや 六 汝とこしへに
 六 怒たまふやなんぢのねたまひは火のごとく燃るか 六 願くはなんぢを識ることくにびと聖名をよばざるもろも
 七 ろの國のうへに烈怒をそゝぎたまへ 七 かれらはヤコブを呑その住處をあらしたればなり 八 われらにむかひて
 八 先祖のよこしまなるわざを記念したまふなかれ願くはなんぢの憐憫をもて速かにわれらを迎へたまへ 九 われらは
 九 貶されて甚だしく卑くなりたればなり 九 われらのすくひの神よ名のえいくわうのために我儕をたすけ名のため

イ詩四四・二三	ホ王上六・一	キ王上六・一	ル王上九・九	カ詩一四一・七	タ詩七四・一、九	ソ王上五・四、五	ナ王上六・四
ハ王上二・二三	ヘ王上六・一	ト王上九・九	ヤ王上九・九	キ詩一四一・七	タ詩七四・一、九	ソ王上五・四、五	ナ王上六・四
イ詩四四・二三	ホ王上六・一	キ王上六・一	ル王上九・九	カ詩一四一・七	タ詩七四・一、九	ソ王上五・四、五	ナ王上六・四
ハ王上二・二三	ヘ王上六・一	ト王上九・九	ヤ王上九・九	キ詩一四一・七	タ詩七四・一、九	ソ王上五・四、五	ナ王上六・四
イ詩四四・二三	ホ王上六・一	キ王上六・一	ル王上九・九	カ詩一四一・七	タ詩七四・一、九	ソ王上五・四、五	ナ王上六・四

一 われらを救ひわれらの罪をのぞきたまへ 一 かなれば異邦人はいふかれらの神はいづくにありやと願く
 二 はなんぢの僕等がながれし血の報をわれらの目前になして異邦人にしらしめたまへ 二 ねがはくは汝のみまへ
 三 にとらはれびとの嘆息のとどかんことをなんぢの大なる能力により死にさだめられし者をまもりて存へしめ
 四 たまへ 三 主よわれらの隣人のなんぢをそしりたる謗を七倍ましてその懐にむくいかへしたまへ 四 然ばわれら
 五 なんぢの民なんぢの草苑のひつじは永遠になんぢに感謝しその頌辭を世々あらはさん 五

第八〇篇

一 イスラエルの牧者よひつじの群のごとくヨセフを導きたまふものよ耳をかたぶけたまへ 一 ケルビ
 二 ムのうへに坐したまふものよ光をはなちたまへ 二 エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんぢの力をふりお
 三 こし來りてわれらを救ひたまへ 三 神よふたゝびわれらを復しなんぢの聖顔のひかりをてらしたまへ 四 然ばわれ
 四 ら救をえん 四 ばんぐんの神エホバよなんぢその民の祈にむかひて何のときまで怒りたまふや 五 汝かれら
 五 になみだの糧をくらはせ涙を量器にみちみつるほどあたへて飲しめ給へり 六 汝われらを隣人のあひあらそふ
 六 種料となしたまふわれらの仇はたがひにあざわらへり 七 萬軍の神よふたゝびわれらを復したまへ 八 汝のみかほ
 七 の光をてらしたまへ 八 さらばわれら救をえん 九 なんぢ葡萄の樹をエジプトより携へいだしもろもろの國人を
 八 おひしりぞけて之をうゑたまへり 九 汝そのまへに地をまうけたまひしかば深く根して國にはびこれり 一〇 その
 九 影はもろもろの山をおほひ 一〇 そのえだは神の香柏のごとくにてありき 一一 その樹はえだを海にまでのべ 一二 その若枝

三 聲をあげ汝をにくむものは首をあげたり かれらはたくみな謀略をもてなんちの民にむかひ相共にはかりて
 汝のかくれたる者にむかふ 四 かれらいひたりき 來かれらを斷滅してふたゞび國をたつることを得ざらしめイ
 スラエルの名をふたゞび人にしられざらしめんと 五 かれらは心を一つにしてともにはかり互にかひをなして
 なんちに逆ふ 六 こはエドムの幕屋にすめる人イシマエル人 モアブ、ハガル人 七 ゲバル、アンモン、アマレク、
 ペリシテおよびツロの民などなり 八 アッスリヤも亦かれらにくみせり 斯てロトの子輩のたすけをなせり セラ
 九 なんぢ曩にミデアンにしたまへる如くキシヨンの河にてシセラとヤビンとに作たまへるごとく彼等にもなし
 たまへ 一〇 かれらはエンドルにてほろび地のために肥料となれり 一 二 かれらの貴人をオレブ、ゼエブのごとく
 そのもろもろの侯をゼバ、ザルムンナのごとくなしたまへ 二 三 かれらはいへりわれら神の草苑をえてわが有とす
 べしと 四 わが神よかれらをまきあげらるる塵のごとく風のまへの藁のごとくならしめたまへ 五 林をやく火の
 ごとく山をもやす燄のごとく 六 なんぢの暴風をもてかれらを追ひなんちの旋風をもてかれらを怖れしめたまへ
 一六 かれらの面に恥をみたまへ 一七 エホバよ然ばかれらなんちの名をもとめん 一八 かれらをとこしへに恥おそ
 れしめ惶てまどひて亡びうせしめたまへ 一九 然ばかれらはエホバてふ名をもちたまふ汝のみ全地をしらしめす
 至上者なることを知るべし

第八四篇

一 万軍のエホバよなんちの帷幄はいかに愛すべきかな 二 わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大
 庭をしたひ わが心わが身はいける神にむかひて呼ぶ 三 誠やすめは窩をえ燕子はその雛をいるる巢をえたり

一 万軍のエホバよなんちの帷幄はいかに愛すべきかな 二 わが靈魂はたえいるばかりにエホバの大
 庭をしたひ わが心わが身はいける神にむかひて呼ぶ 三 誠やすめは窩をえ燕子はその雛をいるる巢をえたり

イ詩八一・一五 ハ結三・六、九耶一 一 一 土四二五、二四、 一 一 二七
 二 二九、三三、三六、 二 二 代二一〇、一〇、 二 二 王下九三七、 一 一 一 三八、二二、二二
 三 二七、三三、三六、 三 三 一 一 七、 二 一 二七 又一七・三二、一四 一 一 九、一七
 四 二九、三三、三六、 四 四 一 一 九、二二、 一 一 一 二 九、二二 詩一四・七 耶三〇 一 一 一 七、一七、
 五 二九、三三、三六、 五 五 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 六 二九、三三、三六、 六 六 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 七 二九、三三、三六、 七 七 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 八 二九、三三、三六、 八 八 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 九 二九、三三、三六、 九 九 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一〇 二九、三三、三六、 一〇 一〇 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一一 二九、三三、三六、 一一 一一 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一二 二九、三三、三六、 一二 一二 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一三 二九、三三、三六、 一三 一三 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一四 二九、三三、三六、 一四 一四 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一五 二九、三三、三六、 一五 一五 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一六 二九、三三、三六、 一六 一六 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一七 二九、三三、三六、 一七 一七 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一八 二九、三三、三六、 一八 一八 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 一九 二九、三三、三六、 一九 一九 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二〇 二九、三三、三六、 二〇 二〇 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二一 二九、三三、三六、 二一 二一 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二二 二九、三三、三六、 二二 二二 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二三 二九、三三、三六、 二三 二三 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二四 二九、三三、三六、 二四 二四 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二五 二九、三三、三六、 二五 二五 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二六 二九、三三、三六、 二六 二六 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二七 二九、三三、三六、 二七 二七 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二八 二九、三三、三六、 二八 二八 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 二九 二九、三三、三六、 二九 二九 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二
 三〇 二九、三三、三六、 三〇 三〇 一 一 九、二二 詩八四 一 一 一 二 九、二二 結三九・二五、 一 一 一 二

一 萬軍のエホバわが王わが神よ 二 これなんちの祭壇なり 三 なんちの家にすむものは福ひなり 四 かゝる人はつねに汝
 をたゞへまつらん セラ 五 その力なんちにありその心シオンの大路にある者はさいはひなり 六 かれらは涙の
 谷をすぐれども其處をおほくの泉あるところとなす また前の雨はもろもろの恵をもて之をおほへり 七 かれら
 は力より力にすゝみ遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ 八 ばんぐんの神エホバよわが祈をきゝたまへ
 ヤコブの神よ耳をかたぶけたまへ セラ 九 われらの盾なる神よ みそなはしてなんちの受膏者の顔をかへりみ
 たまへ 一〇 なんちの大殿にすまふ一日は千日にもまさり われは悪の幕屋にをらんよりは 寧ろわが神のいへの
 門守とならんことを欲ふなり 一一 そは神エホバは盾なり 盾なり エホバは恩とえいくわうとをあたへ直くあゆむ
 ものに善物をこぼみたまふことなし 一二 萬軍のエホバよなんちに依頼むものはさいはひなり

第八五篇

一 エホバよなんちは御國にめぐみをそゞぎたまへりなんぢヤコブの俘囚をかへしたまひき 二
 三 汝すべての怒をすてその烈しきいき 四 汝すべての怒をすてその烈しきいき

一 エホバよなんちは御國にめぐみをそゞぎたまへりなんぢヤコブの俘囚をかへしたまひき 二
 三 汝すべての怒をすてその烈しきいき 四 汝すべての怒をすてその烈しきいき
 五 なんぢ永遠
 六 になんぢ永遠
 七 なんぢ永遠
 八 なんぢ永遠
 九 なんぢ永遠
 一〇 なんぢ永遠
 一一 なんぢ永遠
 一二 なんぢ永遠
 一三 なんぢ永遠
 一四 なんぢ永遠
 一五 なんぢ永遠
 一六 なんぢ永遠
 一七 なんぢ永遠
 一八 なんぢ永遠
 一九 なんぢ永遠
 二〇 なんぢ永遠
 二一 なんぢ永遠
 二二 なんぢ永遠
 二三 なんぢ永遠
 二四 なんぢ永遠
 二五 なんぢ永遠
 二六 なんぢ永遠
 二七 なんぢ永遠
 二八 なんぢ永遠
 二九 なんぢ永遠
 三〇 なんぢ永遠

九 ふたゝび歸るなかれ 實にそのすくひは神をおそる者にちかしかくて榮光はわれらの國にとゞまらん
 一〇 あはれみと眞實とともにあひ義と平和とたがひに接吻せり まことは地よりはえ義は天よりみおろせり
 一一 エホバ善物をあたへたまへばわれらの國は物産をいださん 義はエホバのまへにゆきエホバのあゆみ
 一二 たまふ跡をわれに踏しめん

ダビデの祈禱

第八六篇

一 エホバよなんぢ耳をかたぶけて我にこたへたまへ 我はくるしみかつ乏しければなり ねがは
 二 くはわが靈魂をまもりたまへ われ神をうやまふ者なればなり わが神よなんぢに依頼める汝のしもべを救ひ給へ
 三 主よわれを憐みたまへ われ終日なんぢによばふ なんぢの僕のたましひを悦ばせたまへ 主よわが靈魂は
 四 なんぢを仰ぎのぞむ 主よなんぢは恵ふかくまた赦をこのみたまふ 汝によばふ凡てのものを豊かにあはれみ
 五 たまふ エホバよわがいのりに耳をかたぶけ わが懇求のこゑをきゝたまへ われわが患難の日になんぢに
 六 呼はん なんぢは我にこたへたまふべし 主よもろもろの神のなかに汝にひとしきものはなく汝のみわざに
 七 伴しきものはなし 主よなんぢの造れるもろもろの國はなんぢの前きたりて伏拜まん かれらは聖名をあが
 八 むべし なんぢは大なり奇しき事跡をなしたまふ 唯なんぢのみ神にましますべし エホバよなんぢの道を
 九 われに教へたまへ我なんぢの眞理をあゆまん ねがはくは我をして心ひとつに聖名をおそれしめたまへ 主わ
 一〇 が神よ我心をつくして汝をほめたまへとこしへに聖名をあがめまつらん そはなんぢの憐憫はわれに大なり

イ 賽四六・一三 二 賽四五・八
 ロ 賽二五・約一・一 ホ 賽八四・二二 雅一
 ハ 賽七二・三 賽三二 へ 賽六七・六
 ニ 賽二・二四 ト 賽八九・二四
 ッ 賽五六一・三、一、一 ナ 出三四・六 民一七
 ヴ 賽五八・三 賽八六・五、一〇、三
 六 賽八六・五、一〇、三
 八 一、一、一、四、三、三
 八、四、七、一、四、五、
 八、三、三、三
 八、三、三、三
 ヲ 賽二六・三
 〇七、一、四、五、九
 カ 中三・二、四
 二、二、八、七、七、一、四
 ソ 詩二五・四、二七、一
 リ 詩五〇・一、五、七、一
 耳二・三、三
 日 詩二二・三、一、一〇
 中六・四、三、三、三、九
 一、一、二、九、三、三、一、
 又 詩二五・一、一、四、三、三、
 ヲ 詩五〇・一、五、
 二、二、八、賽四三・七
 賽三七・二、六、四、四
 六、可一、二、二、九
 ヲ 賽二五・一、一、
 夕 出二五・一、一、
 詩七
 賽前八・四、四、四、六
 オ 賽八九・一、一〇、
 賽五・一、九、
 マ 詩二七・九、五、一、
 一、四
 ケ 賽一八・七、
 フ 詩二〇・七、一、八

二四 わがたましひを陰府のふかき處より助けいだしたまへり 神よたかぶれるものは我にさからひて起りたち 暴
 二五 ぶる人の會はわがたましひをもとめ 斯てなんぢを己がまへに置きざりき されど主よなんぢは憐憫とめぐみと
 二六 にとみ怒をおそくし愛しみと眞實とにゆたかなる神にましますべし 我をかへりみ我をあはれみたまへ ねがは
 二七 くは汝のしもべに能力を興へ汝のはしための子をすくひたまへ 我にめぐみの憑據をあらはしたまへ 然ばわれ
 二八 をにくむ者これを見て恥をいだかん そはエホバよなんぢ我をたすけ我をなぐさめたまへばなり

第八七篇

一 エホバの基はきよき山にあり 二 エホバはヤコブのすべての住居にまさりてシオンのもろもろの
 二 門を愛したまふ 三 神の都よなんぢにつきておほくの榮光のことを語りはやせり セラ われはラハブ、バビロ
 四 シオンをも我をしるものの中にあげん べリシテ、ツロ、エテオピアを視よこの人はかしこに生れたりといはん 五
 五 オンにつきては如此いはん 此もの彼ものその中にうまれたり至上者みづからシオンを立たまはんと 六 エホバ
 六 もろもろの民をしるしたまふ時このものは彼處にうまれたりと算へあげたまはん セラ 七 うたふもの踊るもの
 七 皆いはん わがもろもろの泉はなんぢの中にありと

第八八篇

一 わがすくひの神エホバよわれ晝も夜もなんぢの前にさけべり 願くはわが祈をみまへにいたらせ汝の
 二 みゝをわが號呼のこゑにかたぶけたまへ 三 わがたましひは患難にてみち我がいのちは陰府にちかづけり

四 われは穴にいるものとともにかぞへられ依仗なき人のごとくなれり 五 われ墓のうちなる殺されしものごとく死者のうちにてすてらる汝かれらを再びころに記たまはずかれらは御手より断滅されしものなり 六 なんぢ我をいとふかき穴くらき處ふかき淵におきたまひき 七 なんぢの怒はいたくわれにせまれりなんぢそのもろもろの浪をもて我をくるしめ給へりセラ 八 わが相識ものを我よりとほさけ我をかれらに憎ませたまへり 九 われは鋼閉されていづることあたはず 九 わが眼はなやみの故をもておとろへぬ われ日ごとに汝をよべり エホバよなんぢに向ひてわが兩手をのべたり 一〇 なんぢ死者にくすしき事跡をあらはしたまはんや 亡にしもの立てなんぢを讃たへんやセラ 二 なんぢのいつくしみは墓のうちに汝のまことは滅亡のなかに宣傳へられんや 三 汝のくすしきみわざは幽暗になんぢの義は忘失のくにに知るゝことあらんや 三 されどエホバよ我なんぢに向ひてさけべりわがいのりは朝にまへに達らん 四 エホバよなんぢ何なればわが靈魂をすてたまふや何なればわれに面をかくしたまふや 五 われ幼稚よりなやみて死るばかりなり我なんぢの恐嚇にあひてくるしみまどへり 六 汝のはげしき怒わがうへをすぐ汝のおびやかし我をほろぼせり 七 これらの事ひねもす大水のごとく我をめぐりことごとく來りて我をかこみふさげり 八 なんぢ我をいつくしむ者とわが友とをとほさけ わが相識るものを幽暗にいれたまへり

第八九篇

一 エズラ人エタンのをしへの歌
二 われエホバの憐憫をとこしへにうたはん われ口もてエホバの眞實をよろづ代につげしらせん

イ詩二八・一 二四 一四三六 又伯一〇・二二 詩ヲ詩五・三、一九九 三伯六・四
 口等五三・八 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 二九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 三九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 四九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 五九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 六九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 七九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 八九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九一伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九二伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九三伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九四伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九五伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九六伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九七伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九八伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 九九伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六
 一〇〇伯一〇・二二 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六 一四三六

二 われいふあはれみは永遠にたてらる汝はその眞實をかたく天にさだめたまはんと 三 われわが撰びたるものと契約をむすびわが僕ダビデにちかひたり 四 われなんぢの裔をとこしへに固うしなんぢの座位をたてて代々におよばしめんセラ 五 エホバよもろもろの天はなんぢの奇しき事跡をほめんなんぢの眞實もまた潔きものの會にてほめらるべし 六 蒼天にてたれかエホバに類ふものあらんや神の子のなかに誰かエホバのごとき者あらんや 七 神はきよきものの公會のなかにて畏むべきものなりその四周にあるすべての者にまさりて懼るべきものなり 八 萬軍の神エホバよハハ汝のごとく大能あるものは誰ぞやなんぢの眞實はなんぢをめぐりたり 九 なんぢ海のあるををさめその浪のたちあがらんとときは之をしづめたまふなり 一〇 なんぢラハブを殺されしもののごとく撃碎きおのれの仇どもを力ある腕をもて打散したまへり 一一 もろもろの天はなんぢのもの地もまた汝のものなり世界とその中にみつるものとはなんぢの基したまへるなり 一二 北と南はなんぢ造りたまへり タボル、ヘルモンはなんぢの名によりて歡びよばふ 一三 なんぢは大能のみうでをもちたまふなんぢの手はつよく汝のみの手はたかし 一四 義と公平はなんぢの寶座のもととなり あはれみと眞實とは聖顔のまへにあらはれゆく 一五 よろこびの音をしる民はさいはひなり エホバよかれらはみかほの光のなかをあゆめり 一六 かれらは名によりて終日よろこび 汝の義によりて高くあげられたり 一七 かれらの力の榮光はなんぢなり 汝の恵によりてわれらの角はたかくあげられん 一八 そはわれらの盾はエホバに屬われらの王はイスラエルの聖者につけり 一九 そのとき異象をもてなんぢの聖徒につけたまはく われ扶助をちからあるものに委ねたり わが民のなかより一人を

二〇 えらびて高くあげたり 三〇 われわが僕ダビデをえて之にわが聖膏をそゝげり 三二 わが手はかれとともに堅くわ
 三三 が臂はかれを強くせん 三三 仇かれをしへたぐることなし悪の子かれを苦しむることなからん 三三 われかれの前に
 三四 そのもろもろの敵をたふし彼をにくめるものを撃ん 三四 されどわが眞實とわが憐憫とはダビデとともに居りわ
 三五 が名によりてその角はたかくあげられん 三五 われ亦かれの手を海のうへにおきそのみぎの手を河のうへにおか
 二六 ン ダビデ我にむかひて汝はわが父わが神わがすくひの岩なりとよばん 二七 われまた彼をわが初子となし地の
 二八 王たちのうち最もたかき者となさん 二八 われとこしへに憐憫をかれがためにたもち之とたてし契約はかはるこ
 二九 となかるべし 二九 われまたその裔をとこしへに存へそのくらゐを天の日數のごとくながらへしめん 三〇 もしその
 三〇 子わが法をはなれ わが審判にしたがひて歩ます 三二 わが律法をやぶりわが誠命をまもらずば 三三 われ杖をもて
 三三 かれらの愆をたゞし鞭をもてその邪曲をたゞすべし 三三 されど彼よりわが憐憫をことごとくはとりさらずわが
 三四 眞實をおとろへしむることなからん 三四 われおのれの契約をやぶらず己のくちびるより出ししことをかへじ 三五 わ
 三五 恒にわが前にあらん 三六 また月のごとく永遠にたてられん空にある證人はまことなり セラ 三六 されどその
 三六 受膏者をとほざけて棄たまへり なんぢ之をいきどほりたまへり 三九 なんぢ己がしもべの契約をいみ 其かんむり
 四〇 をけがして地にまでおとし給へり 四〇 またその垣をことごとく倒しその保砦をあれたれしめたまへり 四一 その
 四二 道をすぐるすべての者にかすめられ隣人にのゝしらる 四二 なんぢかれが敵のみぎの手をたかく擧そのもろもろの

一四二 詩三九 エホバは永遠にほむべきかな アイメン アイメン
 一四三 詩四九 九
 一四四 詩五五 五
 一四五 詩六九 九
 一四六 詩七二 八、一〇、一八
 一四七 詩七三 一七
 一四八 詩七五 一七
 一四九 詩七六 一七
 一五〇 詩七八 一七
 一五一 詩七九 一七
 一五二 詩八〇 一七
 一五三 詩八一 一七
 一五四 詩八二 一七
 一五五 詩八三 一七
 一五六 詩八四 一七
 一五七 詩八五 一七
 一五八 詩八六 一七
 一五九 詩八七 一七
 一六〇 詩八八 一七
 一六一 詩八九 一七
 一六二 詩九〇 一七
 一六三 詩九一 一七
 一六四 詩九二 一七
 一六五 詩九三 一七
 一六六 詩九四 一七
 一六七 詩九五 一七
 一六八 詩九六 一七
 一六九 詩九七 一七
 一七〇 詩九八 一七
 一七一 詩九九 一七
 一七二 詩一〇〇 一七

四三 仇をよろこばしめたまへり 四三 なんぢかれの劍の刃をふりかへして戦鬪にたつに堪へざらしめたまひき 四四 また
 四四 その光輝をけしその座位を地になげおとし 四四 その年若き日をちぢめ恥をそのうへに覆たまへり セラ 四六 エホバ
 四五 よかくて幾何時をへたまふや 自己をとこしへに隠したまふや忿怒は火のもゆるごとくなるべきか 四七 ねがはく
 四七 はわが時のいかに短かきかを思ひたまへ 汝いたづらにすべての人の子をつくりたまはんや 四八 誰かいきて死を
 四八 みす又おのがたましひを陰府より救ひうるものあらんや セラ 四九 主よなんぢが眞實をもてダビデに誓ひたまへ
 五〇 昔日のあはれみはいづこにありや 五〇 主よねがはくはなんぢの僕のうちをみこゝろにとめたまへ エホバ
 五〇 よ汝のもろもろの仇はわれをそしりなんぢの受膏者のあしあとをそしれり 我もろもろの民のそしりをわが懐中
 五二 にいだく 五二 エホバは永遠にほむべきかな アイメン アイメン
 五三 神の人モーセの祈禱

第九〇篇

二一 主よなんぢは往古より世々われらの居所にてましますせり 二二 山いまだ生いでず汝いまだ地と世界

三 とをつくりたまはざりしとき 永遠よりとこしへまでなんぢは神なり 三 なんぢ人を塵にかへらしめて宣はく
 四 人の子よなんぢら歸れと 四 なんぢの目前には千年もすでにすぎる昨日のごとく また夜間のひとゝきにおなじ
 五 なんぢこれらを大水のごとく流去らしめたまふ かれらは一夜の寝のごとく朝にはえいづる青草のごとし
 七六 朝にはえいでてさかえ夕にはかられて枯るなり 七六 われらはなんぢの怒によりて消うせ 汝のいきどほりにより
 七六 て怖まどふ 汝われらの不義をみまへに置 われらの隠れたるつみを聖顔のひかりのなかにおきたまへり 九
 一〇 れらのもろもろの日はなんぢの怒によりて過去りわれらがすべての年のつくるは一息のごとし 一〇 われらが

二四 ごとくそだつべし 二五 エホバの宮にうゑられしものはわれらの神の大庭にさかえん 二六 かれらは年老てなほ果を
 二七 むすび豊かにうるほひ緑の色みちみちて 二八 エホバの直きものなることを示すべし 二九 エホバはわが巖なりエホバ
 三〇 には不義なし

第九三篇

一 エホバは統御たまふ エホバは稜威をきたまへり エホバは能力をころもとなし帯となしたまへり
 二 さればまた世界もかたくたちて動かさるゝことなし 三 なんぢの寶座はいにしへより堅くたちぬ
 四 汝はとこしへより在せり 五 大水はこゑをあげたり エホバよおほみづは聲をあげたり おほみづは浪をあぐ
 六 エホバは高處にいましてその威力はおほくの水のかきまきくにまさりて盛んなり 七 なんぢの證詞は
 八 いとかたし エホバよ聖潔はなんぢの家にとこしへまでも適應なり

第九四篇

一 エホバよ仇をかへすは汝にあり神よあたを報すはなんぢにあり ねがはくは光をはなちたまへ
 二 世をさばきたまふものよ 願くは起てたかぶる者にそのうくべき報をなしたまへ 三 エホバよ悪き
 四 もの幾何のときを經んとするや あしきもの勝誇りていくそのとしを經るや 五 かれらはみだりに言をいだして
 六 誇りものいふすべて不義をおこなふ者はみづから高ぶれり 七 エホバよ彼等はなんぢの民をうちくだきなんぢ
 八 の業をそこなふ 九 かれらは娼婦と旅人との生命をうしなひ孤子をころす 十 かれらはいふヤハは見すヤコブ
 九 の神はさとらざるべしと 十 民のなかなる無知よなんぢらさとれ 愚かなる者よいづれのときにか智からん
 十一 みを植るものきくことをせざらんや 目をつくれるもの見ることをせざらんや 十二 もろもろの國ををしふる者
 十三 たがすことを爲ざらんや 人に知識をあたふる者しることなからんや 十四 エホバは人の思念のむなしきを知り

イ詩一〇〇・四、一三 ハ 九二・一〇、九三 七 九二・一〇、九三 ト 九二・一〇、九三 リ 九二・一〇、九三
 二 九二・一〇、九三 ム 九二・一〇、九三 ニ 九二・一〇、九三 ヲ 九二・一〇、九三 ウ 九二・一〇、九三
 三 九二・一〇、九三 エ 九二・一〇、九三 ケ 九二・一〇、九三 コ 九二・一〇、九三 ク 九二・一〇、九三
 四 九二・一〇、九三 ケ 九二・一〇、九三 コ 九二・一〇、九三 ク 九二・一〇、九三

二二 たまふ 二三 ヤハよなんぢの懲めたまふ人なんぢの法をしへらるゝ人はさいはひなるかな 二四 かゝる人をわざ
 二五 はひの日よりのがれしめ 悪きもののために坑のほらるゝまで これに平安をあたへたまはん 二六 そはエホバその
 二七 民をすてたまはずその嗣業をはなれたまはざるなり 二八 審判はたゞしきにかへり 心のなほき者はみなその後
 二九 したがはん 三〇 誰かわがために起りたちて悪きものを責んや 三十一 誰か我がために立て不義をおこなふ者をせめんや
 三二 もしエホバ我をたすけたまはざりせば 三三 わが靈魂はとくに幽寂ところに住ひしならん 三四 さてどわが足すべり
 三五 むといひしとき エホバよなんぢの憐憫われをさへたまへり 三六 わがうちに憂慮のみつる時 なんぢの安慰
 三七 わがたましひを喜ばせたまふ 三八 律法をもて害ふことをはかる惡の位はなんぢに親むことを得んや 三九 彼等は
 四〇 あひかたらひて 義人のたましひをせめ罪なき血をつみに定む 四一 然はあれどエホバはわがたかき櫓 わが神は
 四二 わが避所の磐なりき 四三 神はかれらの邪曲をその身におはしめ 四四 かれらをその惡き事のなかに滅したまはん われ
 四五 らの神エホバはこれを滅したまはん

第九五篇

一 率われらエホバにむかひてうたひ 二 すぐひの磐にむかひてよろこばしき聲をあげん 三 われら感
 四 謝をもてその前にゆき エホバにむかひ歌をもて歡ばしきこゑをあげん 五 そはエホバは大なる神な
 六 りもろもろの神にまされる大なる王なり 七 地のふかき處みなその手にあり 八 山のいたゞきもまた神のものなり
 九 うみは神のものその造りたまふところ 早くもまたその手にて造りたまへり 十 いざわれら拜みひれふし
 十一 我儕をつくれる主エホバのみまへに曲跪くべし 十二 彼はわれらの神なり 十三 われらはその草苑の民その手のひつじ

八 なり今日(けふ)なんぢらがその聲(こゑ)をきかんことをのぞむ 九 なんぢらメリバに在りしときのごとく野(の)なるマサにあり
 九 し日の如く(ごと)その心(こゝろ)をかたくなにするなかれ 九 その時(とき)なんぢらの列祖(れいそ)われをこゝろみ我(われ)をためし又(また)わがわざを
 〇 みたり 一〇 われその代(よ)のためにうれへて四十年(しじゅうねん)を歴(か)われいへりかれらは心(こゝろ)あやまれる民(たみ)わが道(みち)を知(し)ざりきと
 二 このゆゑに我(われ)いきどほりて彼等(かれら)はわが安息(やすみ)にいるべからずと誓(ちか)ひたり

第九六篇

一 あたらしき歌(うた)をエホバにむかひてうたへ 全地(ぜんち)よエホバにむかひて謳(うた)ふべし 二 エホバに向(むか)ひて
 三 うたひその名(な)をほめよ 日(ひ)ごとにその救(すくひ)をのべつたへよ 三 もろもろの國(くに)のなかにその榮光(えいこう)をあら
 四 はしもろもろの民(たみ)のなかにその奇(く)しきみわざを顯(あら)すべし 四 そはエホバはおほいなり大(おほ)いにほめたふべきもの
 五 なりもろもろの神(かみ)にまさりて畏(おそ)るべきものなり 五 もろもろの民(たみ)のすべての神(かみ)はことごとく虚(うた)しされどエホバ
 六 はもろもろの天(てん)をつくりたまへり 六 尊貴(たうき)と稜威(れいゐ)とはその前(まへ)にあり能(ちから)と善美(ぜんび)とはその聖所(せいじよ)にあり 七 もろもろの
 七 民(たみ)のやから榮光(えいこう)とちからとをエホバにあたへよ 八 その聖名(せいみな)にかなふ榮光(えいこう)をもてエホバにあ
 八 たへ獻物(けんぶつ)をたづさへてその大庭(おほには)にきたれ 九 きよき美(うつく)しきものをもてエホバををがめ 全地(ぜんち)よその前(まへ)にをのけ
 一〇 もろもろの國(くに)のなかにいへ 一〇 エホバは統御(すべ)たまふ世界(せかい)もかたくたちて動かさるゝことなし 一〇 エホバは正直(たし)を
 二 もてすべての民(たみ)をさばきたまはんと 二 天(てん)はよろこび地(ち)はたのしみ海(うみ)とそなかに盈(み)るものとはなりどよみ
 三 田畑(たはた)とその中(なか)のすべての物(もの)とはよろこぶべしかくて林(はやし)のもろもろの樹(き)もまたエホバの前(まへ)によろこぶうたはん
 三 エホバ來りたまふ地(ち)をさばかんとて來りたまふ義(ぎ)をもて世界(せかい)をさばきその眞實(まこと)をもてもろもろの民(たみ)をさばき

イ來三七、一五、四、ヘ詩七八、八、四〇、三〇、來三一、一、リ詩一八、三、三
 七、七、五、六、前四一〇、九、一八、四、三五、又詩九五、三、カ詩二九、一、二、歌二一、一五、一九、ツ詩九八、七、
 口出七二、七、民、ニ民一四、二、二、ト代上一六、三、三、三、ル耶一〇、一、二、ヨ詩二九、二、一〇、レ詩六七、四、九六、ネ詩六七、四、歌一九、
 一四、二二、二〇、ホ來三二、一〇、一七、ト詩三三、三、三、ヲ詩一五、一五、一五、祭、タ詩九三、一、九七、一、ソ詩六九、三、四、一、
 一三、申六、二六、ハ民一四、三、三、二、八、チ詩一四、五、三、三、四、二、五、タ詩九三、一、九七、一、ソ詩六九、三、四、一、

たまはん

第九七篇

一 エホバは統御(すべ)たまふ全地(ぜんち)はたのしみ多くの島々(しま)はよろこぶべし 二 雲(くも)とくらきとはその周環(めぐり)に
 三 あり義(ぎ)と公平(こうへい)とはその寶座(みくら)のもとぬなり 三 火(ひ)ありそのみまへにすみその四周(まわり)の敵(てき)をやきつく
 四 エホバのいなびかりは世界(せかい)をてらす地(ち)これを見てふるへり 五 もろもろの山(やま)はエホバのみまへ全地(ぜんち)の主(しゆ)
 六 みまへにて蠟(ろう)のごとくとけぬ 六 もろもろの天(てん)はその義(ぎ)をあらはしよろづの民(たみ)はその榮光(えいこう)をみたり 七 すべて
 七 きざめる像(よう)につかへ虚(うた)しきものによりてみづから誇(ほ)るものは恥辱(はづかしめ)をうくべし もろもろの神(かみ)よみなエホバをふし
 八 をがめ 八 エホバよなんぢの審判(さんぱん)のゆゑによりシオンはきよてよろこびユダの女輩(むすめら)はみな樂(たの)しめり 九 エホバよ
 九 なんぢ全地(ぜんち)のうへにましまして至高(いた)くなんぢもろもろの神(かみ)のうへにましまして至貴(いた)とし 一〇 エホバを愛(いと)しむ
 一〇 ものよ惡(あく)をにくめ エホバはその聖徒(せいと)のたましひをまもり之(これ)をあしきものの手(て)より助けいだしたまふ 一一 光(ひ)は
 一一 たゞしき人(ひと)のためにまかれ欣喜(よろこ)びはこゝろ直(ただ)きもののために播(ま)かれたり 一二 義(ぎ)人(ひと)よエホバによりて喜(よろこ)ぶそのきよ
 一二 き名(な)に感謝(かんしゃ)せよ

第九八篇

一 あたらしき歌(うた)をエホバにむかひてうたへ 二 そは妙(た)なる事(こと)をおこなひその右(みぎ)の手(て)そのきよき臂(かひ)を
 二 もて己(おのれ)のために救(すくひ)をなし畢(お)たまへり 二 エホバはそのすくひを知(し)しめその義(ぎ)をもろもろの國(くに)人の目(め)のまへにあ
 三 らはし給(たま)へり 三 又(また)その憐憫(あはれみ)と眞實(まこと)とをイスラエルの家(いへ)にむかひて記念(きねん)したまふ 地(ち)の極(はて)もことごとくわが神(かみ)
 三 詩 篇 九七・一——九八・三 一〇五五

四 すぐひを見たり 全地よエホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ聲をはなちてよろこびうたへ讚うたへ 琴を
 五 もてエホバをほめうたへ 琴の音と歌のこゑとをもてせよ 六 ラッパと角笛をふきならし 王エホバのみまへによ
 六 ろこばしき聲をあげよ 七 海とそのなかに盈るもの 世界とせかいにすむものと鳴響むべし 八 大水はその手を
 九 うちもろもろの山はあひともにエホバの前によろこびうたふべし 九 エホバ地をさばかんために來りたまへば
 なりエホバ義をもて世界をさばき 公平をもてもろもろの民をさばきたまはん

第九九篇

一 エホバは統御たまふもろもろの民はをのくべし エホバはケルビムの間にいます地ふるはん
 二 エホバはシオンにましまして大なりもろもろの民にすぐれてたふとし 三 かれらは汝のおほい
 四 なる畏るべき名をほめたふべし エホバは聖なるかな 四 王のちからは審判をこのみたまふ 汝はかたく
 五 公平をたてヤコブのなかに審判と公義とをおこなひたまふ 五 われらの神エホバをあがめその承足のもとにて
 六 拜みまつれ エホバは聖なるかな 六 その祭司のなかにモーセとアロンとありその名をよぶ者のなかにサム
 七 エルありかれらエホバをよびしに應へたまへり 七 エホバ雲の柱のうちにましましてかれらに語りたまへり
 八 かれらはその證詞とその賜はりたる律法とを守りたりき 八 われらの神エホバよなんぢ彼等にこたへたまへり
 九 かれらのなしし事にむくいたまひたれどまた赦免をあたへたまへる神にてましますせり 九 われらの神エホバを
 崇めそのきよき山にてをがみまつれそはわれらの神エホバは聖なるなり

第一〇〇篇

感謝のうた

一 詩九五・二、一〇〇 八詩九六・一 一八二〇・八〇二 出四一・五、一五・二四 三、九九・五、ナ詩一九七三、一
 二 詩九五・二 二五五・二二 詩九七・九 代上二八・二 詩二五 申前七・九 申九・二〇 一八二〇・一、一四九
 三 詩九六・一 代上 詩九六・一 一五〇・一三 申二八・五八 歌 一三二・七 一三二・八 民一四・二〇 耶 一、一八・二八
 四 一五・二八 代下 詩九六・一 一五〇・一三 申二八・五八 歌 一三二・七 一三二・八 民一四・二〇 耶 一、一八・二八
 五 二九・二七 出三五・二三 詩 又伯三六・五 七 耶 一五・二 出三三・二一、二四 申三三・三、七 詩九五・二、九八・四 二、二〇・三、一
 六 詩六六・一三、一一 牛詩八九・一 詩九三・六 申前二 詩九七・一〇 後二 詩一八・二七 詩 二二・二二 二六 詩一八・六
 七 六・七、一、九 申前八・一四 申前九 詩 二二・二二、二五、二九 詩 七五・一〇 耶 出二二・三 申前九 詩 二七・九、六九、 詩 二七・九、六九、 詩 二七・九、六九、 詩 二七・九、六九、
 八 詩一三六・一 申上九・四、二、一四 四〇・四、二五、五 二九 詩 七五・一〇 耶 出二二・三 申前九 詩 二七・九、六九、 詩 二七・九、六九、 詩 二七・九、六九、
 九 詩九五・二、一〇〇 八詩九六・一 一八二〇・八〇二 出四一・五、一五・二四 三、九九・五、ナ詩一九七三、一
 二 詩九五・二 二五五・二二 詩九七・九 代上二八・二 詩二五 申前七・九 申九・二〇 一八二〇・一、一四九
 三 詩九六・一 代上 詩九六・一 一五〇・一三 申二八・五八 歌 一三二・七 一三二・八 民一四・二〇 耶 一、一八・二八
 四 一五・二八 代下 詩九六・一 一五〇・一三 申二八・五八 歌 一三二・七 一三二・八 民一四・二〇 耶 一、一八・二八
 五 二九・二七 出三五・二三 詩 又伯三六・五 七 耶 一五・二 出三三・二一、二四 申三三・三、七 詩九五・二、九八・四 二、二〇・三、一

一 全地よエホバにむかひて歡ばしき聲をあげよ 二 欣喜をいだきてエホバに事へうたひつゝその前にきた
 二 知れエホバこそ神にますなれ われらを造りたまへるものはエホバにましまして我儕はその屬なりわれら
 三 はその民その草苑のひつじなり 四 感謝しつゝその門にいりほめたふへつゝその大庭にいれ 感謝してその名を
 五 ほめたふへよ 五 エホバはめぐみふかくその憐憫かぎりなくその眞實よろづ世におよぶべければなり

第一〇一篇

一 われ憐憫と審判とをうたはん エホバよ我なんぢを讀うたはん 二 われ心をさとして全き道
 二 をまもらんなんぢいづれの時われにきたりたまふや 我なほき心をもてわが家のうちをありかん 三 われわが
 三 眼前にいやしき事をおかず われ叛くもの業をにくむそのわざは我につかじ 四 僻めるころは我よりはなれ
 四 悪きものを知ることをこのます 五 隠にその友をそしめるものは我これをほろぼさん 高ぶる眼また驕れる心の
 五 ものは我これをしのびじ 六 わが眼は國のうちの忠なる者を見て之をわれとともに住はせん 全き道をあゆむ人
 六 はわれに事へん 欺くことをなす者はわが家のうちに住むことをえず 虚偽をいふものはわが目前にたつこと
 七 を得じ 八 われ朝な朝なこの國のあしき者をことごとく滅し エホバの邑より不義をおこなふ者をことごとく
 絶除かん

第一〇二篇

一 なやみたる者おもひくづほれてその歎息をエホバの前にそゞぎいだせるとき祈禱
 二 エホバよわが祈をきゝたまへ 願くはわが號呼のこゑの御前にいたらんことを 二 わが窮苦の日
 三 みかほを蔽ひたまふなかれなんぢの耳をわれにかたづけ 我がよぶ日にすみやかに我にこたへたまへ 三 わが

四 もろもろの日は煙のごとくきえ わが骨はたきごのごとく焚るるなり 四 わがこゝろは草のごとく撃れてしほれ
 六五 たり われ糧をくらふを忘れしによる 五 わが歎息のこゑによりてわが骨はわが肉につく 六 われは野の鶉の
 七 ごとく荒たる跡のふくろふのごとくになりぬ 七 われ醒てねぶらずたゞ友なくして屋蓋にをる雀のごとくなれり
 九八 ^ハ わが仇はひねもす我をそしる 猖狂ひて我をせむるもの我をさして誓ふ 九 われは糧をくらふごとくに灰をく
 一〇 らひ わが飲ものには涙をまじへたり 一〇 これは皆なんぢの怒と忿恚とによりてなり なんぢ我をもたげてなげすて
 三二 給へり わが齡はかたぶける日影のごとし またわれは草のごとく萎れたり 一二 されどエホバよなんぢは
 三三 永遠にながらへ その名はよろづ世にながらへん 一三 なんぢ起てシオンをあはれみたまはん そのシオンに恩恵を
 四 ほどこしたまふときなり そのさだまれる期すでに來れり 一四 なんぢの僕はシオンの石をもよるこび その塵をさ
 六五 ^ヘ 愛しむ もろもろの國はエホバの名をおそれ 地のもろもろの王はその榮光をおそれん 一六 エホバはシオンを
 七 ぎづき榮光をもてあらはれたまへり 一七 エホバは乏しきものの祈をかへりみ彼等のいのりを藐しめたまはざりき
 一八 ^ハ 來んとするのちの世のためにこの事をしるさん 新しくつくられたる民はヤハをほめたまふべし 一九 エホバ
 二〇 その聖所のたかき所よりみおろし天より地をみたまへり 二〇 これは俘囚のなげきをきゝ死にさだまれる者をとき
 二一 はなち 人々のシオンにてエホバの名をあらはしエルサレムにてその頌美をあらはさんが爲なり 二一 かゝる時
 二二 にもろもろの民もろもろの國つどひあつまりてエホバに事へまつらん 二二 エホバはわがちからを途にておと
 二四 ろへしめ わが齡をみじかからしめ給へり 二四 我いへり ねがはくはわが神よわがすべての日のなかばにて 我を

イ伯三〇・三〇 詩三二 伯三〇・二九
 一・一〇 哀一・二三 ホ番二二・四
 口詩三七・二 詩一〇 へ社二六・一一
 二二・一一 二二・二二 二二・二二
 ハ伯一九・二〇 哀四 詩四二・三八〇・五
 八 伯一九・二〇 哀四 詩四二・三八〇・五
 二〇 彼後三・七 フ詩六九・三六
 一〇 一・二二 一〇・一〇 一〇・三三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七
 二〇 彼後三・七 フ詩六九・三六
 一〇 一・二二 一〇・一〇 一〇・三三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七
 二〇 彼後三・七 フ詩六九・三六
 一〇 一・二二 一〇・一〇 一〇・三三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七

夕馬三六・一 來一三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七
 二〇 彼後三・七 フ詩六九・三六
 一〇 一・二二 一〇・一〇 一〇・三三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七
 二〇 彼後三・七 フ詩六九・三六
 一〇 一・二二 一〇・一〇 一〇・三三
 六六・五 一七 夕馬三六・一 來一三
 六六・二二 羅八 八 雅一・一七

二五 とりさりたまふなかれ 汝のよはひは世々かぎりなし 二五 汝いにしへ地の基をすゑたまへり 天もまたなんぢの手
 二六 の工なり 二六 これらは亡びん されど汝はつねに存らへたまはん これらはみな衣のごとくふるびん 汝これらを
 二七 袍のごとく更たまはん されば彼等はかはらん 二七 然れども汝はかはることなし なんぢの齡はをはらざるなり
 二八 汝のしもべの子輩はながらへん その裔はかたく前にたてらるべし

第一〇三篇

ダビデのうた

二一 わが靈魂よエホバをほめまつれ わが哀なるすべてのものよそのきよき名をほめまつれ 二
 三 がたましひよエホバを讃まつれ そのすべての恩恵をわするるなかれ 三 エホバはなんぢがすべての不義をゆる
 四 し汝のすべての疾をいやし 四 なんぢの生命をほるびより贖ひいだし 仁慈と憐憫とを汝にかうぶらせ 五 なんぢ
 六 の口を嘉物にてあかしめたまふ 斯てなんぢは壯きて驚のごとく新になるなり 六 エホバはすべて虐げらるる者
 七 のために公義と審判とをおこなひたまふ 七 おのれの途をモーセにらしめ おのれの作爲をイスラエルの子輩
 九八 にらしめ給へり 九 エホバはあはれみと恩恵にみちて怒りたまふことおそく 仁慈ゆたかにまします 九 恒に
 一〇 せむることをせず永遠にいかりを懷きたまはざるなり 一〇 エホバはわれらの罪の量にしたがひて我儕をあしらひ
 一一 たまはず われらの不義のかさにしたがひて報いたまはざりき 一一 エホバをおそるるものにエホバの賜ふその
 一二 あはれみは大にして 天の地よりも高きがごとし 一二 そのわれらより愆をとほさけたまふことは 東の西より遠き
 一三 がごとし 一三 エホバの己をおそるる者をあはれみたまふことは 父がその子をあはれむが如し 一四 エホバは我儕の

三九 エホバは雲を敷きて蓋となし夜は火をもて照したまへり 又かれらの求によりて鴉をきたらしめ天の餅
 四〇 にてかれらを飽しめたまへり 磐をひらきたまへば水ほどばしりいで 潤ひなきところに川をなして流れいで
 四一 たり エホバそのきよき聖言とその僕アブラハムとをおもひいでたまひたればなり その民をみちびきて
 四二 歡びついでしめそのえらべる民をみちびきて誦ひついでしめたまへり もろもろの國人の地をかれらに
 四三 與へたまひしかば 彼等もろもろのたみの勤勞をおのが有とせり 彼は彼等がその律にしたがひその法をまも
 四四 らんが爲なり エホバをほめたまへよ

第一〇六篇

一 エホバをほめたまへ エホバに感謝せよそのめぐみはふかくその憐憫はかぎりなし 二 されか
 三 エホバの力ある事跡をかたり その讚べきことを悉くいひあらはし得んや 審判をまもる人々
 四 つねに正義をおこなふ者はさいはひなり エホバよなんぢの民にたまふ惠をもて我をおぼえなんぢの救をも
 五 てわれに臨みたまへ さらば我なんぢの撰びたまへる者のさいはひを見なんぢの國の歡喜をよろこび なんぢ
 六 の嗣業とともに誇ることをせん われら列祖とともに罪をかせり 我儕よこしまをなし悪をおこなへり
 七 われらの列祖はなんぢがエジプトにてなしたまへる奇しき事跡をさとらず 汝のあはれみの豊かなるを心にと
 八 めす 海のほとり即ち紅海のほとりにて逆きたり されどエホバはその名のゆゑをもて彼等をすくひたまへり
 九 これは大なる能力をらしめんとてなり また紅海を叱咤したまひたれば乾きたり かくて民をみちびきて野を
 一〇 ゆくがごとくに淵をすぎしめ 恨むるものの手よりかれらをすくひ 仇の手よりかれらを贖ひたまへり 水

イ出二三・二 尼九 ヨ出二七・六 民二〇 へ申六・一〇、一二 番 千代上一六・三四 詩 卅九・一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇、一〇一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九、一一〇、一一一、一一二、一一三、一一四、一一五、一一六、一一七、一一八、一一九、一二〇、一二一、一二二、一二三、一二四、一二五、一二六、一二七、一二八、一二九、一三〇、一三一、一三二、一三三、一三四、一三五、一三六、一三七、一三八、一三九、一四〇、一四一、一四二、一四三、一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、一五一、一五二、一五三、一五四、一五五、一五六、一五七、一五八、一五九、一六〇、一六一、一六二、一六三、一六四、一六五、一六六、一六七、一六八、一六九、一七〇、一七一、一七二、一七三、一七四、一七五、一七六、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、一八二、一八三、一八四、一八五、一八六、一八七、一八八、一八九、一九〇、一九一、一九二、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、二〇三、二〇四、二〇五、二〇六、二〇七、二〇八、二〇九、二一〇、二一一、二一二、二一三、二一四、二一五、二一六、二一七、二一八、二一九、二二〇、二二一、二二二、二二三、二二四、二二五、二二六、二二七、二二八、二二九、二三〇、二三一、二三二、二三三、二三四、二三五、二三六、二三七、二三八、二三九、二四〇、二四一、二四二、二四三、二四四、二四五、二四六、二四七、二四八、二四九、二五〇、二五一、二五二、二五三、二五四、二五五、二五六、二五七、二五八、二五九、二六〇、二六一、二六二、二六三、二六四、二六五、二六六、二六七、二六八、二六九、二七〇、二七一、二七二、二七三、二七四、二七五、二七六、二七七、二七八、二七九、二八〇、二八一、二八二、二八三、二八四、二八五、二八六、二八七、二八八、二八九、二九〇、二九一、二九二、二九三、二九四、二九五、二九六、二九七、二九八、二九九、三〇〇、三〇一、三〇二、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、三〇八、三〇九、三一〇、三一一、三一二、三一三、三一四、三一五、三一六、三一七、三一八、三一九、三二〇、三二一、三二二、三二三、三二四、三二五、三二六、三二七、三二八、三二九、三三〇、三三一、三三二、三三三、三三四、三三五、三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五二、三五三、三五四、三五五、三五六、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三八〇、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、五五九、五六〇、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一二、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一二、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五二、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇

一 エホバをおほひたればその一人だにのこりし者なかりき 二 このとき彼等そのみことは信じしその頌美をうたへ
 三 彼等しはしがほどにその事跡をわれその訓誨をまたす 野にていたくむさぼり荒野にて神をこゝろみ
 四 たりき エホバはかれらの願欲をかなへたまひしかどその靈魂をやせしめたまへり 一六 たみは營のうちにて
 五 モーセを嫉みエホバの聖者アロンをねたまひしかば 地ひらけてダタンを呑みアブラムの黨類をおほひ 一八 火は
 六 このともがらの中にもえおこり焔はあしき者をやきつくせり 一九 かれらはホルプの山にて憤をつくり鑄たる像を
 七 をがみたり 三〇 かくの如くおのが榮光をかへて草をくらふ牛のかたち似す 二一 救主なる神はエジプトにて大な
 八 るわざをなし 三三 ハムの地にて奇しき事跡をなし紅海のほとりにて懼るべきことを爲たまへり かれは斯る神を
 九 わすれたり 三三 この故にエホバかれらを亡さんと宣まへり されど神のえらみたまへる者モーセやぶれの間隙に
 一〇 ありてその前にたちその烈怒をひきかへして滅亡をまぬかれしめたり 三六 かれら美しき地を蔑しそのみことば
 一一 を信ぜず 二五 剩さへその幕屋にてつぶやきエホバの聲をもきかさざりき 二六 この故に手をあげて彼等にむかひたま
 一二 へりこれ野にてかれらを斃れしめんとし 三二 又もろもろの國のうちにてその裔をたふれしめもろもろの地に
 一三 かれらを散さんとしたまへるなり 二八 彼らはバアルベオルにつきて死するもの祭物をくらひたり 三九 斯のごとく
 一四 その行爲をもてエホバの烈怒をひきいだしければえやみ侵しりたり 三〇 そのときビネハスたちて裁判をなせり
 一五 かくて疫癘はやみぬ 三二 ビネハスは萬代までとこしへにこのことを義とせられたり 三三 民メリバの水のほとり
 一六 にてエホバの烈怒をひきおこししかばかれらの故によりてモーセも禍害にあへり 三三 かれら神の靈にそむき

二二 食をもとむべし 彼のもてるすべてのものは債主にうばはれ かれの勤勞は外人にかすめらるべし 三三 かれに
 二三 恵をあたふる人ひとりだになく かれの孤子をあはれむ者もなく 三三 其の裔はたえその名はつぎの世にきえうす
 二四 べし 其の父等のよこしまはエホバのみこゝろに記され 其の母のつみはきえざるべし 三五 かれらは恒にエホ
 二六 バの前におかれ 其の名は地より断るべし 一六 かくる人はあはれみを施すことをおもはず 反りて貸しきもの乏し
 二七 きもの心のいためる者をころさんとして攻たりき 一七 かくる人は 証ふことをこのむ 此の故にのろひ己にいたる
 二八 恵むことをたのします 此の故にめぐみ己にとほざかれり 一八 かくる人は ころものごとくに 証をきる 此の故に
 二九 のろひ水のごとくに おのれの衷にいり 油のごとくに おのれの骨にいれり 一九 ねがはくは 証をおのれのきたる衣の
 三〇 ごとく 帯のごとくなして 恒にみづから 纏はんことを 一〇 此の事は わが敵と わが靈魂に さからひて 悪言をいふ
 三一 者にと エホバのあたへたまふ報なり 三二 されど主エホバよ なんぢの名のゆるをもて 我をかへり みたまへ なんぢ
 三三 の憐憫はいとふかし ねがはくは 我をたすけたまへ 三三 われは 貧しくして 乏し わが心うちにて 傷をうく 三三 わが
 三四 ゆく状は ゆふ日の影のごとく また 蝗のごとく 吹さらるゝなり 三四 わが膝は 斷食によりて よろめき わが肉は やせ
 三五 おとろふ 三三 われは 彼等にそしらるゝ者となれり かれら我をみるときは 首をふる 三六 わが神エホバよ ねがはく
 三六 は 我をたすけ 其の憐憫にしたがひて 我をすくひたまへ 三七 エホバよ 此れらは 皆なんぢの手よりいで 汝のなしたま
 三七 へることなるを 彼等にしらしめたまへ 三八 かれらは 証へども 汝はめぐみたまふ かれらの立ときは 恥かしめらる
 三九 れども なんぢの僕は よるこばん 三九 わがもろもろの敵は あなどりを 衣おのが 恥を外袍のごとくに まとふべし

イ伯五・五、一八九 水尼四・五 耶一八・チ德一四・一四 結 ル來一・二・二二
 口伯一八・一九 詩 三三三 三三三 三三三 三三三
 三三三 三三三 三三三 三三三
 二二二 二二二 二二二 二二二
 二二二 二二二 二二二 二二二

一〇九・三〇—一〇九・三二
 一〇九・三三—一〇九・三五
 一〇九・三六—一〇九・三八
 一〇九・三九—一〇九・四一
 一〇九・四二—一〇九・四四
 一〇九・四五—一〇九・四七
 一〇九・四八—一〇九・五〇
 一〇九・五一—一〇九・五三
 一〇九・五四—一〇九・五六
 一〇九・五七—一〇九・五九
 一〇九・六〇—一〇九・六二
 一〇九・六三—一〇九・六五
 一〇九・六六—一〇九・六八
 一〇九・六九—一〇九・七一
 一〇九・七二—一〇九・七四
 一〇九・七五—一〇九・七七
 一〇九・七八—一〇九・八〇
 一〇九・八一—一〇九・八三
 一〇九・八四—一〇九・八六
 一〇九・八七—一〇九・八九
 一〇九・九〇—一〇九・九二
 一〇九・九三—一〇九・九五
 一〇九・九六—一〇九・九八
 一〇九・九九—一〇九・一〇一
 一〇九・一〇二—一〇九・一〇四
 一〇九・一〇五—一〇九・一〇七
 一〇九・一〇八—一〇九・一〇九

三〇 われはわが口をもて大にエホバに謝し おほくの人のなかにて 讚まつらむ 三一 エホバはまづしきもの右にた
 ちてその靈魂を罪せんとする者より之をすくひたまへり

第一一〇篇

一 エホバわが主にのたまふ 我なんぢの仇をなんぢの承足とするまでは わが右にさすべし 二 エ
 ホバはなんぢのちからの杖をシオンよりつきいださしめたまはん 汝はもろもろの仇のなかに王となるべし
 三 なんぢのいきほひの日に なんぢの民は 聖なるうるはしき衣をつけ 心よりよろこびて 己をさしげん なんぢは朝
 四 の胎よりいづる 壯きものの露をもてり エホバ誓をたてて 聖意をかへさせたまふことなし 汝はメルキセデク
 五 の狀にひとしくとこしへに 祭司たり 主はなんぢの右にありて そのいかりの日に 王等をうちたまへり 六 主は
 六五 もろもろの國のなかにて 審判をおこなひたまはん 此處にも 彼處にも 屍をみたまへり 寛濶なる地をすぶる 首領を
 七 うちたまへり 七 かれ道のほとりの川より 汲てのみ 斯てかうべを擧ん
 八 エホバを讚たへよ 我はなほきものの會あるひは 公會にて 心をつくして エホバに感謝せん
 九 エホバのみわざは大なり すべてその事跡をしたふものは 之をかながへ 究む 三 其の行ひたま
 四 ふところは 榮光ありまた 稜威あり 其の公義はとこしへに 失することなし 四 エホバは 其の奇しきみわざを人の
 五 こゝろに記しめたまへり エホバは めぐみと 憐憫とにて 充たまふ 五 エホバは 己をおそるゝものに 糧をあたへた
 六 まへり また 其の契約をとこしへに 心にとめたまはん 六 エホバは もろもろの國の 所領をおのれの民にあたへて

第一一一篇

その作爲のちからを之にあらはしたまへり 七 その手のみわざは眞實なり公義なり そのもろもろの訓諭はかたし 九八 これらは世々かぎりなく堅くたち眞實と正直とにてなれり 九 エホバはそのために救贖をほどこしその契約をとこしへに立たまへり エホバの名は聖にしてあがむべきなり 一〇 エホバをおそるゝは智慧のはじめなり これらを行ふものは皆あきらかなる聰ある人なり エホバの頌美はとこしへに失ることなし

第一一二篇

エホバを讃まつれ エホバを畏れてそのもろもろの誠命をいたく喜ぶものはさいはひなり 一 かゝる人のすゑは地にてつよく直きものの類はさいはひを得ん 三 富と財とはその家にあり その公義はとこしへにうすることなし 四 直き者のために暗きなかにも光あらはる 彼は恵ゆたかに憐憫にみつ る義しきものなり 五 恵をほどこし貸ことをなす者はさいはひなり かゝる人は審判をうくるときおのが訴をさ さへうべし 六 又とこしへまで動かさるゝことなからん 義者はながく忘れらるゝことなかるべし 七 彼はあし き音信によりて畏れず その心エホバに依頼みてさだまれり 八 その心かたたくたちて懼るゝことなく敵につきて の願望をつひに見ん 九 彼はちらして貧者にあたふその正義はとこしへにうすることなし その角はあがめを うけて擧られん 一〇 悪者はこれを見てうれへもだえ切齒しつゝ消さらん また悪きものの願望はほろぶべし

第一一三篇

エホバをほめまつれ汝等エホバの僕よほめまつれ エホバの名をほめまつれ 今より永遠にい たるまでエホバの名はほむべきかな 三 日のいづる處より日のいる處までエホバの名はほめらる べし 四 エホバはもろもろの國の上においてたかくその榮光は天よりもたかし 六 われらの神エホバにたぐふ

Table of references and cross-references between chapters and verses of the Bible, including references to Psalms, Isaiah, and other books.

べき者はたれぞや 寶座をその高處にする己をひくゝして天と地とをかへりみ給ふ まづしきものを塵よりあげ 乏しきものを糞土よりあげて もろもろの諸侯とともにすわらせ その民のきみたちと共にすわらせたまはん 九 またはらみなき婦に家をまもらせ おほくの子女のよろこばしき母たらしめたまふ エホバを讃まつれ

第一一四篇

イスラエルの民エジプトをいで ヤコブのいへ異言の民をはなれしとき ユダはエホバの 聖所となりイスラエルはエホバの所領となれり 海はこれを見てにげヨルダン後は後にしりぞ 四 山は牡羊のごとくをどり小山はこひつじのごとく躍り 海よなんぢ何とてにぐるやヨルダンよなんぢ 何とて後にしりぞくや 六 山よなにとて牡羊のごとくをどるや小山よなにとて小羊のごとく躍るや 七 地よ主の みまへヤコブの神の前にをのゝけ 八 主はいはを池にかはらせ石をいづみに變らせたまへり

第一一五篇

エホバよ榮光をわれらに歸するなかれ われらに歸するなかれ なんぢのあはれみと汝のまこと との故によりてたゞ名にのみ歸したまへ 二 もろもろの國人はいかなればいふ 今かれらの神は いづくにありやと 然どわれらの神は天にいます 神はみこゝろのまゝにすべての事をおこなひ給へり 四 かれらの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり 五 その偶像は口あれどいはす目あれどみず 耳あれどき 六 手あれどとらず脚あれどあゆまず喉より聲をいだすことなし 八 此をつくる者とこれに 依頼むものとは皆これにひとしからん 九 イスラエルよなんぢエホバに依頼め エホバはかれらの助かれらの盾なり 一〇 アロンの家よなんぢらエホバによりたのため エホバはかれらの助かれらの盾なり 一〇 エホバを畏るゝものよ

二 エホバに依頼め エホバはかれらの助かれらの盾なり 三 エホバは我儕をみこころに記たまへり われらを恵みイ
 三 スラエルの家をめぐみアロンのいへをめぐみ 四 また小なるも大なるもエホバをおそるゝ者をめぐみたまはん
 四 願くはエホバなんぢらを増加へなんぢらとなんぢらの子孫とをましくはへ給はんことを 五 なんぢらは天地
 六 をつくりたまへるエホバに恵まるゝ者なり 七 天はエホバの天なりされど地は人の子にあたへたまへり
 八 死人も幽寂ところの下れるものもヤハを讚稱ふることなし 九 然どわれらは今より永遠にいたるまでエホバ
 一〇 を讃まつらむ 汝等エホバをほめたゝへよ

第一一六篇

一 われエホバを愛しむそはわが聲とわが願望とをきゝたまへばなり 二 エホバみゝを我にかた
 三 ぶけたまひしが故に われ世にあらんかぎりエホバを呼まつらむ 四 死の繩われをまとひ陰府の
 五 くるしみ我にのぞめり われは患難とうれへとにあへり 六 その時われエホバの名をよべり エホバよ願くはわが
 七 靈魂をすくひたまへと 八 エホバは恩恵ゆたかにして公義ましませり われらの神はあはれみ深し 九 エホバは
 一〇 愚かなるものを護りたまふ われ卑くせられしがエホバ我をすくひたまへり 一 一 わが靈魂よなんぢの平安にかへ
 一二 れ エホバは豊かになんぢを待ひたまへばなり 一三 汝はわがたましひを死よりわが目をなみだよりわが足を
 一四 頭顱よりたすけいだしたまひき 一五 われは活るもの國にてエホバの前にあゆまん 一六 われ大になやめりといひ
 一七 つゝもなほ信じたり 一八 われ惶てしときに云らくすべての人はいつはりなりと 一九 我いかにしてその賜へるも
 二〇 ろもろの恩恵をエホバにむくいんや 二一 われ救のさかづきをとりてエホバの名をよびまつらむ 二二 我すべての民
 二三 のまへにてエホバにわが誓をつくのはん 二四 エホバの聖徒の死はそのみまへにて貴とし 二五 エホバよ誠にわれは

イ詩二八・二四 二詩六五・八八・一〇 ホ詩二三・二 但二 一詩一九・一三七 二九
 ロ詩二九・一五 一詩九六・五 一詩二〇 一詩一〇三・八 一詩一〇五・一七 一詩一三・六 一詩一九
 ハ詩一八・一 一詩一〇三・八 一詩一〇五・一七 一詩一三・六 一詩一九

六二八 卷二九
 ツ詩二二・四 一詩七二・二 詩五〇 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一
 一四三・二 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一
 一四三・二 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一
 一四三・二 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一
 一四三・二 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一 一詩一〇七・二 一詩一〇九・一

一七 なんぢの僕なり われはなんぢの婢女の子にして汝のしもべなり なんぢわが縲紲をときたまへり 一八 われ感謝を
 一八 そなへものとして汝にさゝげん われエホバの名をよばん 一九 我すべての民のまへにてエホバにわがちかひを償
 一九 はん エルサレムよ汝のなかにてエホバのいへの大庭のなかにて此をつくのふべし エホバを讃まつれ

第一一七篇

一 もろもろの國よなんぢらエホバを讃まつれ もろもろの民よなんぢらエホバを稱へまつれ
 二 そはわれらに賜ふその憐憫はおほいなり エホバの眞實はとこしへに絶ることなし エホバを

第一一八篇

一 エホバに感謝せよエホバは恩恵ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし 二 イスラエルは率い
 三 ふべしその憐憫はとこしへにたゆることなしと 四 アロンの家はいさ言ふべしそのあはれみは
 五 永遠にたゆることなしと 六 エホバを畏るゝものは率いふべしその憐憫はとこしへにたゆることなしと
 七 患難のなかよりエホバをよべば エホバこたへて我をひろき處におきたまへり 八 エホバわが方にいませばわれ
 九 におそれなし 人われに何をなしえんや 一〇 エホバはわれを助くるものととも我がかたに坐すこの故にわれを
 一一 憎むものにつきての願望をわれ見ることえん 一二 エホバに依頼むは人にたよるよりも勝りてよし 一三 エホバに
 一四 よりたのむはもろもろの侯にたよるよりも勝りてよし 一五 もろもろの國はわれを圍めり われエホバの名により
 一六 て彼等をほろぼさん 一七 かれらは我をかこめり我をかこめりエホバの名によりて彼等をほろぼさん 一八 かれらは
 一九 蜂のごとく我をかこめり かれらは荊の火のごとく消たり われはエホバの名によりてかれらを滅さん 二〇 汝われ

二四 を倒さんとしていたく刺つれど エホバわれを助けたまへり 二四 エホバはわが力が歌にしてわが救となりたまへり
二五 歡喜とすくひとの聲はたゞしきもの幕屋にあり エホバのみぎの手はいさましき動作をなしたまふ
二六 エホバのみぎの手はたかくあがり エホバの右の手はいさましき動作をなしたまふ 二七 われは死ることなか
二八 らん 存へてヤハの事跡をいひあらはさん ヤハはいたく我をこらしたまひしかど死には付したまはざりき
二九 わがために義の門をひらけ 我そのうちにいりてヤハに感謝せん 三〇 こはエホバの門なり たゞしきものは
三一 その内にいるべし 三二 われ汝に感謝せん なんぢ我にこたへてわが救となりたまへばなり 三三 工師のすてたる
三四 石はすみの首石となれり 三三 これエホバの成たまへる事にしてわれらの目にあやしとする所なり 三四 これエホバ
三五 の設けたまへる日なり われらはこの日によるこびたのしまん 三五 エホバよねがはくはわれらを今すくひたまへ
三六 エホバよねがはくは我儕をいま榮えしめたまへ 三六 エホバの名によりて来るものは福ひなり われらエホバの家
三七 よりなんぢらを祝せり 三七 エホバは神なり われらに光をあたまへり 繩をもて祭壇の角にいけにへをつなげ
三八 なんぢはわが神なり 我なんぢに感謝せん なんぢはわが神なり 我なんぢを崇めまつらん 三九 エホバにかんしや
三九 せよ エホバは恩惠ふかくその憐憫とこしへに絶ることなし

第一一九篇

アレフ

一 おのが道をなほくしてエホバの律法をあゆむ者はさいはひなり 二 エホバのもろもろの證詞を
 二 まもり 心をつくしてエホバを尋求むるものは福ひなり 三 かゝる人は不義をおこなはずして エホバの道を

イ出二五・二 賽二二	水啓後六・九	リ詩二六・二	一七徒四・一一 弗	路一九三・八 羅四	ヨ詩二二・一	ソ伯三二・二六 約啓
ロ出二五・六	ハ啓二六・二	ト詩二四・七	二二・〇 彼前二	七	ヨ詩二二・八・一	二二・八
ハ詩六・五 哈二二	チ賽三五・八 默二	ル太二二・四 可一	ヲ太二・九 二三	九	タ詩二二・八・一	ツ詩二一・九・七一
ニ詩七三・二八	二七・三三 二四	二二・〇 路二〇	三九 可一・九	カ出二五・二 賽二五	レ約啓三九・五・一八	ネ代下一五・一五
ナ詩一九・二二	ハ一・〇 八二 二四	ハ一・〇 八二 二四	五・四 七・七〇 七七	九二五 詩三九	十詩四二・二六 六三	マ詩一九・一〇
ラ詩三七・三二 路二	二六・三三 六四 六	ウ詩三四・一一	二二 四八 七八	オ詩二六・七	一 二 啓後五・六	一〇 一〇 一八

ナ詩一九・二二
 八詩二二
 ハ一・〇 八二 二四
 二六・三三 六四 六
 ウ詩三四・一一
 ノ詩二二・二 一九 三
 タ創四七 九 代上二
 九二五 詩三九
 一 二 啓後五・六
 一〇 一〇 一八
 ケ詩三九 八

五 四 あゆむなり 四 エホバよなんぢ訓諭をわれらに命じてねんごろに守らせたまふ 五 なんぢわが道をかたくたてて
 七 六 その律法をまもらせたまはんことを 六 われ汝のもろもろの誠命にこゝろをとむるときは恥ることあらじ 七 わ
 八 れ汝のたゞしき審判をまなばど直き心をもてなんぢに感謝せん 八 われは律法をまもらん われを棄はてたまふ
 なかれ

〇 ベテ

九 わかき人はなによりてかその道をきよめん 聖言にしたがひて慎むのほかぞなき 一〇 われ心をつくして汝
 二 をたづねもとめたり 願くはなんぢの誠命より迷ひいださしめ給ふなかれ 二 われ汝にむかひて罪ををかすまじき
 三 爲になんぢの言をわが心のうちに藏へたり 三 讀べきかな エホバよねがはくは律法をわれに教へたまへ 三三 われ
 四 わが口唇をもてなんぢの口よりいでもろもろの審判をのべつたへたり 四 我もろもろの財貨をよるこぶごと
 五 くに汝のあかしの道をよるこべり 五 我なんぢの訓諭をおもひ汝のみちに心をとめん 六 われは律法をよるこび
 六 聖言をわするゝことなからん

〇 ギメル

一七 ねがはくは汝のしもべを豊にあしらひて存へしめたまへ 一八 なんぢわが眼を
 二八 一八 ひらきなんぢの法のうちなる奇しきことを我にみせたまへ 一九 われは世にある旅客なり 我になんぢの誠命を
 三〇 かくしたまふなかれ 二〇 斷るときなくなんぢの審判をしたふが故にわが靈魂はくだくるなり 二一 汝はたかぶる
 三三 者せめたまへり なんぢの誠命よりまよひいづる者はのろはる 三三 我なんぢの證詞をまもりたり 我より謗と

三三 あなとりとを取去たまへ 又もろもろの候は坐して相語りわれをそこなはんとせり 然はあれど汝のしもべは
三四 律法をふかく思へり 汝のもろもろの證詞はわれをよろこばせわれをさとす者なり

○ ダレテ

三五 わが靈魂は塵につきぬ なんぢの言にしたがひて我をいかしたまへ 我わがふめる道をあらはしよかば
三六 汝こたへを我になしたまへり なんぢの律法をわれに教へたまへ なんぢの訓諭のみちを我にわきまへしめた
三七 まへ われ汝のくすしき事跡をふかく思はん わがたましひ痛めるによりてとけゆくねがはくは聖言にしたが
三八 ひて我にちからを予へたまへ 願くはいつはりの道をわれより遠ざけなんぢの法をもて我をめぐみたまへ
三九 われは眞實のみちをえらび 恒になんぢのもろもろの審判をわが前におけり 我なんぢの證詞をしたひて
四〇 離れず エホバよねがはくは我をはずかしめ給ふなかれ われ汝のいましめの道をはしらん その時なんぢわが
心をひろく爲たまふべし

○ へ

四一 エホバよ願くはなんぢの律法のみちを我にをしへたまへ われ終にいたるまで之をまもらん われに
四二 智慧をあたへ給へ さらば我なんぢの法をまもり心をつくして之にしたがはん われに汝のいましめの道を
四三 ふましめたまへ われその道をたのしめばなり わが心をなんぢの證詞にかたぶかしめて 貪利にかたぶかしめ
四四 給ふなかれ わが眼をほかにむけて虚しきことを見さらしめ 我をなんぢの途にて活し給へ ひとすらに汝を

イ詩一九・二五 一四三・二一 太一〇・三三 歌二 七結三三・三一 可七 三三三・三五
ロ詩一九・七七 九 ホ詩二五・四、二七 一 二六 二二、二二 路一二 夕詩一九・四〇
ハ詩四四・二五 九、一一 一、八六、一一、一一 一、八六、一一、一一 二、二六、二六 來一、二五 提前六・一〇 後後七・二五
ニ詩一九・四〇、 へ詩一四五・五六 ヌ詩一九・二二 二、二六、二六 來一、二五 提前六・一〇 後後七・二五
カ詩三三・一五

ツ詩一九・二〇 四九・一五六、一五 九七七 二六、二二 歌二 七結三三・三一 可七 三三三・三五
セ詩一九・二五、三 九、一一 一、八六、一一、一一 一、八六、一一、一一 二、二六、二六 來一、二五 提前六・一〇 後後七・二五
七、八、一〇、一二 一、八六、一一、一一 一、八六、一一、一一 二、二六、二六 來一、二五 提前六・一〇 後後七・二五
ナ詩二八・一 太一 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七
ネ詩一〇六・四、一一 〇・二八、一九 徒 二、二六、二二 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七
ム詩二九・一五 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七 一、一四七

三九 おそるゝ汝のしもべに 聖言をかたくしたまへ わがおそるゝ謗をのぞきたまへ そはなんぢの審判はきはめて
四〇 善し 我なんぢの訓諭をしたへり 願くはなんぢの義をもて我をいかしたまへ

○ ワウ

四一 エホバよ聖言にしたがひてなんぢの憐憫なんぢの拯救を我にのぞませたまへ さらば我われを謗るもの
四二 に答ふることをえん われ聖言によりたのめばなり 又わが口より眞理のことばをことごとく除き給ふなかれ
四三 われなんぢの審判をのぞみたればなり われたえずいや永久になんぢの法をまもらん われなんぢの訓諭を
四四 もとめたるにより障なくしてあゆまん われまた王たちの前になんぢの證詞をかたりて恥ることあらじ 我
四五 わが愛するなんぢの誠命をもて己をたのしません われ手をわがあいする汝のいましめに擧げ なんぢの律法
四六 をふかく思はん

○ ザイン

四九 ねがはくは汝のしもべに 宣ひたる聖言をおもひいだしたまへ 汝われに之をのぞましめ給へり なんぢ
五〇 の聖言はわれを活しよがゆゑに 今もなほわが艱難のときの安慰なり 高ぶる者おほいに我をあざわらへりさ
五一 れど我なんぢの法をはなれざりき エホバよわれ汝がふるき往昔よりの審判をおもひいだして 自から慰めたり
五二 なんぢの法をすつる悪者のゆゑによりて 我はげしき怒をおこしたり なんぢの律法はわが旅の家にてわが
五三 歌となれり エホバよわれ夜間になんぢの名をおもひいだして なんぢの法をまもられり われ汝のさとしを
五四 守りしによりてこの事をえたるなり

八九 エホバよみことばは天にてとこしへに定まり 九〇 なんぢの眞實はよろづ世におよぶなんぢ地をかたく立
九〇 たまへば地はつねにあり 九一 これらのものはなんぢの命令にしたがひ恒にありて今日にいたる萬のものは皆
九二 なんぢの僕なればなり 九三 なんぢの法わがたのしみとならざりしならば我はつひに患難のうち滅びたるならん
九三 われ恒になんぢの訓諭をわすれじ 九四 汝これをもて我をいかにしたまへばなり 九四 我はなんぢの有なりねがはくは
九五 我をすくひたまへ われ汝のさとしを求めたり 九五 悪きものは我をほろぼさんとして窺ひぬ われは唯なんぢの
九六 もろもろの證詞をおもはん 九六 我ももろの純全に限あるをみたり 九六 されど汝のいましめはいと廣し

○ メム

九七 われなんぢの法をいつくしむこといかばかりぞや われ終日これを深くおもふ 九八 なんぢの誠命はつねに
九八 我とともにありて 我をわが仇にまさりて慧からしむ 九八 我はなんぢの證詞をふかくおもふが故に わがすべての
一〇〇 師にまさりて智慧おほし 一〇〇 我はなんぢの訓諭をまもるがゆゑに 老たる者にまさりて事をわきまふるなり
一〇一 われ聖言をまもらんために わが足をとどめてもろもろのあしき途にゆかしめず 一〇一 なんぢ我ををしへたま
一〇三 ひしによりて 我なんぢの審判をばなれざりき 一〇三 みことばの滋味はわが膠にあまきこといかばかりぞや 蜜の
一〇四 わが口に甘きにまされり 一〇四 我なんぢの訓諭によりて智慧をえたり このゆゑに虚偽のすべての途をにくむ

○ ヌン

一〇五 なんぢの聖言はわがあしの燈火わが路のひかりなり 一〇六 われなんぢのたゞしき審判をまもらんことをちか
一〇七 ひ且かたくせり 一〇七 われ甚いたく苦しめり エホバよねがはくは聖言にしたがひて我をいかにしたまへ 一〇八 エホバ

イ詩八九・一 太二四 口聖三三・二五 三五 提後三・二五 又詩一九・一〇 彼八 三六六・二三
一・三四・三五 彼前 八詩一九・二四 二五 提後三・二七 九 又詩一九・二二 彼八 三六六・二三
一・三四・三五 彼前 八詩一九・二四 二五 提後三・二七 九 又詩一九・二二 彼八 三六六・二三

一〇九 よねがはくは誠意よりするわが口の獻物をうけて なんぢの審判をしへたまへ 一〇九 わが靈魂はつねに危険を
一〇一〇 をかすされど我なんぢの法をわすれず 一〇一〇 あしき者わがために罪をまうけたり されどわれ汝のさとしより迷ひ
一〇一〇 いでざりき 一〇一〇 われ汝のもろもろの證詞をとこしへにわが嗣業とせり これらの證詞はわが心をよろこばしむ
一〇一一 われ汝のおきてを終までとこしへに守らんとて 一〇一一 これにこゝろを傾けたり

○ サメク

一一二 われ二心のものをにくみ 汝のおきてを愛しむ 一一二 なんぢはわが匿るべき所わが盾なり われ聖言によりて
一一三 望をいだく 一一三 悪きをなすものよ我をばなれされ われわが神のいましめを守らん 一一三 聖言にしたがひ我をさ
一一四 へて生存しめたまへ わが望につきて恥なからしめたまへ 一一四 われを支へたまへ さらばわれ安けかるべし われ
一一五 恒になんぢの律法にこゝろをそゝがん 一一五 すべて律法よりまよひいづるものを汝かるしめたまへり かれらの
一一六 欺詐はむなしければなり 一一六 なんぢは地のすべての悪きものを渣滓のごとく除きさりたまふ この故にわれ汝の
一一七 あかしを愛す 一一七 わが肉體なんぢを懼るゝによりてふるふ 我はなんぢの審判をおそる

○ アイン

一一八 われは審判と公義とおこなふ 我をすてて虐ぐるものに委ねたまふなかれ 一一八 汝のしもべの中保となり
一一九 て福祉をえしめたまへ 高ぶるもの我をしへたぐるを容したまふなかれ 一一九 わが眼はなんぢの救となんぢのた
一二〇 だしき聖言とをしたらふによりておとろふ 一二〇 ねがはくはなんぢの憐憫にしたがひてなんぢの僕をあしらひ 我に

二二五 なんぢの律法をしへたまへ 我はなんぢの僕なり われに智慧をあたへてなんぢの證詞をしらしめたまへ
 二二六 彼等はなんぢの法をすてたり 今はエホバのはたらきたまふべき時なり 此の故にわれ金よりもまじり
 二二七 なき金よりもまさりて汝のいましめを愛す この故にもろものことに係るなんぢの一切のさとしを正しと
 二二八 おもふ我すべてのいつはりの途をにくむ

〇 べ

二二九 汝のあかしは妙なり かゝるが故にわが靈魂これをまもる 聖言うちひらくれば光をはなちて 愚かなる
 二三〇 ものをさとからしむ 我なんぢの誠命をしたふが故に わが口をひろくあけて喘ぎもとめたり ねがはくは
 二三一 聖名を愛するものに恒になしたまふごとく 身をかへして我をあはれみたまへ 聖言をもてわが步履をとの
 二三二 へもろもろの邪曲をわれに主たらしめたまふなかれ われを人のしへたげより贖ひたまへ さらばわれ訓諭を
 二三三 まもらん ねがはくは聖顔をなんぢの僕のうへにてらし 汝のおきてを我にをしへ給へ 人なんぢの法を
 二三四 まもらざるによりて わが眼のなみだ河のごとくに流る

〇 ツアデー

二三七 エホバよなんぢは義しくなんぢの審判はなほし 汝たゞしきと此上なき眞實とをもて その證詞を命じ
 二三八 給へり わが敵なんぢの聖言をわすれたるをもて わが熱心われをほろぼせり なんぢの聖言はいときよし
 二三九 此故になんぢの僕はこれを愛す われは微なるものにて人にあなどらるれども 汝のさとしを忘れず なん
 二四〇

イ詩一九・一二 一三九
 口詩一九・一六 一四〇
 ハ詩一九・二〇、二二 一四一
 九七二 一四二
 二詩一九・一〇四 一四三
 ホ詩一九・一七 一四四
 四 一四五
 又詩一九・二三 一四六
 九七九 一四七
 二詩一九・一〇四 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五
 一五六
 一五七
 一五八
 一五九
 一六〇

二四一 ぢの義はとしへの義なり 汝ののりは眞理なり われ患難と憂とにかゝれども 汝のいましめはわが喜樂なり
 二四二 なんぢの證詞はとしへの義し ねがはくはわれに智慧をたまへ 我ながらふることを得ん

〇 コフ

二四五 われ心をつくしてよばはれり エホバよ我にこたへたまへ 我なんぢの律法をまもらん われ汝をよばは
 二四六 れり ねがはくはわれを救ひ給へ 我なんぢの證詞をまもらん われ詰朝おきいでて呼はれり われ聖言によりて
 二四七 望をいだけり 夜の更のきたらぬに先だち わが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ ねがはくはなんぢの
 二四八 仁慈にしたがひてわが聲をきゝたまへ エホバよなんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ 悪をおひもと
 二四九 むるものは我にちかづけり 彼等はなんぢの法にとほくはなる エホバよ汝はわれに近くまさせり なんぢの
 二五〇 すべての誠命はまことなり われ早くよりなんぢの證詞によりて 汝がこれを永遠にたてたまへることを知り

〇 レン

二五三 ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ 我なんぢの法をわすれざればなり ねがはくはわが訟を
 二五四 あげつらひて我をあがなひ 聖言にしたがひて我をいかしたまへ すくひは悪きものより遠くはなる かれらは
 二五五 なんぢの律法をもとめざればなり エホバよなんぢの憐憫はおほいなり 願くはなんぢの審判にしたがひて我
 二五六 をいかしたまへ 我をせむる者われに敵する者おほし 我なんぢの證詞をはなるゝことなかりき 虚偽をお
 二五七 こなふもの汝のみことばを守らざるにより 我かれらを見てうれへたり ねがはくはわが汝のさとしを愛する
 二五八 こと幾何なるをかへりみたまへ エホバよなんぢの仁慈にしたがひて我をいかしたまへ なんぢのみことばの

ろのやから即ちヤハの支派かしこに上りきたりイスラエルにむかひて證詞をなしましたエホバの名にかんしやを
 六五 ます 彼處にさばきの寶座まうけらる これダビデの家のみくらなり エルサレムのために平安をいのれ
 七 エルサレムを愛するものは榮ゆべし ねがはくはなんぢの石垣のうちに平安ありなんぢの諸殿のうちに福祉
 九八 あらんことを わが兄弟のためわが侶のために われ今なんぢのなかに平安あれといはん われらの神エホ
 九八 パのいへのために我なんぢの福祉をもとめん
 二一 京まうでの歌

第一二三篇

二一 天にいますものよ我なんぢにむかひて目をあぐ 二 みや僕その主の手に目をそゞぎ 婢女その
 三 主母の手に目をそゞがごとくわれらはわが神エホバに目をそゞぎてそのわれを憐みたまはんことをまつ 三 ね
 四 がはくはわれらを憐みたまへ エホバよわれらを憐みたまへそはわれらに輕侮はみちあふれぬ おもひわづら
 四 ひなきものの凌辱とたかぶるものの輕侮とは われらの靈魂にみちあふれぬ

第一二四篇

二一 今イスラエルはいふべしエホバもしわれらの方にいませず 二 人々われらにさからひて起り
 三 たつときエホバもし我儕のかたに在ざりしならんには 三 かれらの怒のわれらにむかひておこりし時 われら
 四 を生るまゝにて呑しならん 四 また水はわれらをおほひ 流はわれらの靈魂をうちこえ 五 高ぶる水はわれらの
 七六 靈魂をうちこえしならん 六 エホバはほむべきかな 我儕をかれらの齒にわたして嚙くらはせたまはざりき 七 我
 八 儕のたましひは捕鳥者のわなをのがるゝ鳥のごとくにのがれたり 羅はやぶれてわれらはのがれたり 八 われらの

助は天地をつくりたまへるエホバの名にあり

第一二五篇

二一 一 エホバに依頼むものはシオン山のうごかさるゝことなくして永遠にあるがごとし 二 エル
 三 サレムを山のかこめるごとくエホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん 三 惡の杖はたゞしきものの
 四 所領にとゞまることなかるべし 斯てたゞしきものはその手を不義にのぶることあらじ 四 エホバよねがはくは
 五 善人とこゝろ直きものとに福祉をほどこしたまへ 五 されどエホバは轉へりておのが曲れる道にいるものを
 五 惡きわざをなすものとともに去しめたまはん 平安はイスラエルのうへにあれ

第一二六篇

二一 一 エホバ、シオンの俘囚をかへしたまひし時 われらは夢みるもののごとくなりき 二 そのとき
 三 笑はわれらの口にみち歌はわれらの舌にみたり エホバかれらのために大なることを作たまへりといへる者もろ
 四 ころの國のなかにありき 三 エホバわれらのために大なることをなしたまひたれば我儕はたのしめり 四 エホバ
 五 よ願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ 五 涙とともに播くものは歡喜とともに穫らん
 六 その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど 禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん

第一二七篇

二一 一 エホバ家をたてたまふにあらずば 建るもの勤勞はむなしく エホバ城をまもりたまふにあら
 二 ずば衛士のためをるは徒勞なり 二 なんぢら早くおき遅くいねて辛苦の糧をくらふはむなしきなり 斯てエホバ

もとめうるまでは 我家の幕屋にいらす わが臥床にのほらす わが目をねぶらしめす わが眼瞼をとぢしめざるべしと
 われらエフラタにて之をききヤアルの野にて見とめたり われらはその居所にゆきて その承足のまへに俯伏さん
 エホバよねがはくは起きて なんぢの稜威の權とともになんぢの安居所にいらたまへ なんぢの祭司たちは義を衣なんぢの聖徒はみな歡びよばふべし
 なんぢの僕ダビデのために なんぢの受膏者の面をしりぞけたまふなかれ
 エホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ 曰くわれなんぢの身よりいでし者をなんぢの座位にさせしめん
 なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらばかれらの子輩もまた永遠になんぢの座位にさすべしと
 エホバはシオンを擇びておのが居所にせんとのぞみたまへり
 曰くこれは永遠にわが安居處なり われこゝに住んそはわれ之をのぞみたればなり
 われシオンの糧をゆたかに祝しくひものをもてその貧者をあかしめん
 われ救をもてその祭司たちに衣せんその聖徒はみな聲たからかによろこびよばふべし
 われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん
 わが受膏者のために燈火をそなへたり
 われかれの仇にはぢを衣せんされどかれはその冠弁さかゆべし

第一三三篇

視よはらから相睦とともをるはいかに善いかに樂きかな
 首にそゝがれたる貴きあぶら鬚にながれアロンの鬚にながれ
 その衣のすそにまで流れしたゝるゝがごとく
 またヘルモンの露くだりてシオンの山にながるゝがごとし
 そはエホバかしこに福祉をくだし
 窮なき生命をさへあたへたまへり

イ禮六・四 へ長一〇・三五 代下 六一・二〇 一六路一・六九 徒 力代下六・四一 詩一 王上一・三六、一
 口律前二七・二 六・四一、四二 三 詩八九・三、四、三 二二〇 三三・九、一四九、四 五・四 代下二二・七 未出三〇・二五、三〇
 口律前二七・二 六・四一、四二 三 詩八九・三、四、三 二二〇 三三・九、一四九、四 五・四 代下二二・七 未出三〇・二五、三〇
 二律前二七・二 六・四一、四二 三 詩八九・三、四、三 二二〇 三三・九、一四九、四 五・四 代下二二・七 未出三〇・二五、三〇
 ホ律前二七・二 六・四一、四二 三 詩八九・三、四、三 二二〇 三三・九、一四九、四 五・四 代下二二・七 未出三〇・二五、三〇

第一三四篇

夜間エホバのいへにたちエホバに事ふるもろもの僕よ
 エホバをほめまつれ
 なんぢら聖所にむかひ手をあげてエホバをほめまつれ
 ねがはくはエホバ天地をつくりたまへるもの
 シオンより汝をめぐみたまはんことを

第一三五篇

なんぢらエホバを讚稱へよ
 エホバの名をほめたゝへよ
 エホバの僕等ほめたゝへよ
 エホバの家われらの神のいへの大庭にたつものよ
 讚稱へよ
 エホバは恵ふかしなんぢらエホバをほめたゝへよ
 その聖名はうるはし讚うたへ
 そはヤハおのがためにヤコブをえらみ
 イスラエルをえらみてその珍寶となしたまへり
 われエホバの大なるとわれらの主のもろもの神にまされるとをしれり
 エホバその聖旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみなことごとく行ひ給ふなり
 エホバは地のはてより霧をのぼらせ
 雨のために電光をつくり
 その庫より風をいだしたまふ
 エホバは人より畜類にいたるまでエジプトの首出をうちたまへり
 エジプトよ
 エホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりて
 バロとその僕とに臨ませ給へり
 エホバはおほくの國々をうち
 又いきほひある王等をころし給へり
 アモリ人のわうシホン、バシヤンの王オグならびにカナンの國々なり
 かれらの地をゆづりとし
 その民イスラエルの嗣業としてあたへ給へり
 エホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし
 エホバよなんぢの記念はよろづ世におよばん
 エホバはその民のために審判をなし
 その僕等にかゝはれる聖意をかへたまふ可ればなり
 もろもろの

二六 くにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり 二六 そのぐうざうは口あれどいはず目あれど見ず 一七 耳あれ
 二七 どきかずまたその口に氣息あることなし 一八 これを造るものとのによりたのむものとは皆これにひとしからん
 二九 イスラエルの家よエホバをほめまつれ アロンのいへよエホバをほめまつれ 一〇 レビの家よエホバをほめまつ
 二二 ね エホバを畏るゝものよエホバをほめまつれ 二二 エルサレムにすみたまふエホバは シオンにて讃まつるべき
 かな エホバをほめたゝへよ

第一三六篇

一 エホバに感謝せよエホバはめぐみふかしその憐憫はとこしへに絶ることなければなり 二
 二 ろもろの神の神にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 三 もろもろの
 四 主の主にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 四 たゞ獨りおほいなる奇跡なしたまふ
 五 ものに感謝せよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 五 智慧をもてるもろもろの天をつくりたまへる
 六 ものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 六 地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ
 七 そのあはれみは永遠にたゆることなければなり 七 巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよその憐憫は
 八 とこしへに絶ることなければなり 八 晝をつかさどらるるために日をつくりたまへる者にかんしやせよその
 九 憐憫はとこしへにたゆることなければなり 九 夜をつかさどらるるために月ととももろの星をつくりたまへる
 一〇 者にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一〇 もろもろの首出をうちてエジプトを責た
 二 まへるものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 二 イスラエルを率てエジプト人のなか
 三 より出したまへる者にかんしやせよそのあはれみはとこしへに絶ることなければなり 三 臂をのばしつよき手

イ詩一五九・一一 七・二、一八・一 ホ申一〇・二七 耶五一・二五 詩一四・一 一三五・八
 口詩一三三・三 二代上二六・三四、四 代上二七・一八 二創一九・詩二四・ 又詩一・二六 七出二二・二五、一三三
 へ詩一〇六・一、一〇 代下二〇・二二 一創一・一三、一三九 二創一〇・二二 九出二二・二九 詩 三三・一七 三三・一七
 カ出一四・二二、二二 一三五・九 一三三・一〇、一 一三三・二二 詩一〇四・二七、
 詩七八・二三 二出二二・一八、一五 一三三・一八 一三三・一八 一三三・一八 一三三・一八
 三出二二・二七 二二・二八、二五 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九
 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九 一三三・二九

三 をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一三 紅海をふ
 四 たつに分たまへる者にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一四 イスラエルをしてその
 五 中をわたらしめ給へるものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 一五 バロとその軍兵とを
 六 紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 一六 その民をみちび
 七 きて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 一七 大なる王たち
 八 を撃たまへるものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 一八 名ある王等をころしたまへる
 九 者にかんしやせよその憐憫はとこしへに絶ることなければなり 一九 アモリ人のわうシホンをころしたまへる者
 二〇 にかんしやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 二〇 バシヤンのわうオグを誅したまへるもの
 二一 感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 二一 かれらの地を嗣業としてあたへたまへる者にかん
 二二 しやせよその憐憫はとこしへにたゆることなければなり 二二 その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたま
 二三 へるものに感謝せよそのあはれみは永遠にたゆることなければなり 二三 われらが微賤かりしときに記念したま
 二四 へる者にかんしやせよその憐憫はとこしへに絶ることなければなり 二四 わが敵よりわれらを助けいだしたまへ
 二五 る者にかんしやせよその憐憫はとこしへに絶ることなければなり 二五 すべての生るものに食物をあたへたまふ
 二六 ものに感謝せよそのあはれみはとこしへに絶ることなければなり 二六 天の神にかんしやせよその憐憫はとこし
 へに絶ることなければなり

第一三七篇

われらバビロンの河のほとりにすわりシオンをおもひいでて涙をながしぬ 二 われらその

三 あたりの柳にわが琴をかけたなり 三 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり 我儕をくるしむる者
 四 われらにおのれを歡ばせんとて シオンのうた一つうたへといへり 四 われら外邦にありていかでエホバの歌を
 五 うたはんや 五 エルサレムよもし我なんちをわすれなば わが右の手にその巧をわすれしめたまへ 六 もしわれ
 七 汝を思ひいでずもしわれエルサレムをわがすべての歡喜の極となさずばわが舌をわが唇につかしめたまへ 七 エホ
 八 バよねがはくはエルサレムの日に エドムの子輩がこれを掃除けその基までもはらひのぞけといへるを 聖意に
 九 とめたまへ 八 ほろぼさるべきバビロンの女よ なんちがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいはひなるべし
 九 なんちの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは福ひなるべし

第一三八篇

ダビデのうた

二 われはわが心をつくしてなんちに感謝し もろもろの神のまへにて汝をほめうたはん 我な
 三 んちのきよき宮にむかひて伏拜み なんちの仁慈とまこととの故によりて聖名にかんしやせん そは汝そのみこと
 四 ばをもろもろの聖名にまさりて高くしたまひたればなり 汝わがよばはりし日にわれにこたへ わが靈魂に
 五 ちからをあたへて雄々しからしめたまへり 四 エホバよ地のすべての王はなんちに感謝せん かれらはなんちの
 六 口のもろもろの言をきゝたればなり 五 かれらはエホバのもろもろの途についてうたはん エホバの榮光おほい
 七 なればなり 六 エホバは高くましませども卑きものを顧みたまふ されど亦おこれるものを遠よりしりたまへり
 八 縦ひわれ患難のなかを歩むとも 汝われをふたゝび活し その手をのばしてわが仇のいかりをふせぎ その右の手
 九 われをすくひたまふべし 八 エホバはわれに係れることを全うしたまはん エホバよなんちの憐憫はとこしへに

イ詩七九・一 哀四・二二 結二五・一 一 耶二五・一一 歌一八六 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五
 口結三二・六 一 耶二五・一一 歌一八六 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五
 多伯一〇・三 八 一 耶二五・一一 歌一八六 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五
 レ詩一七・三 耶二 王下九・二七 新伯三・一四 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五
 多伯一〇・三 八 一 耶二五・一一 歌一八六 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五
 レ詩一七・三 耶二 王下九・二七 新伯三・一四 王上八・二九 三〇 又賽四二・二二 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五 詩一〇二・一五

たゆることなし 願くはなんちの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

第一三九篇

俗長にうたはしめたるダビデの歌

二 エホバよなんちは我をさぐり我をしりたまへり 二 なんちはわが坐るをも立をもしり 又とほく
 三 よりわが念をわきまへたまふ 三 なんちはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし わがもろもろの途をことごと
 四 く知たまへり 四 そはわが舌に一言ありとも 視よエホバよなんちことごとく知たまふ 五 なんちは前より後より
 五 われをかこみ わが上にその手をおき給へり 六 かゝる知識はいとくすしくして我にすぐ また高くして及ぶこと
 六 あたはず 我いづこにゆきてなんちの聖靈をはなれんや われいづこに往てなんちの前をのがれんや 八 われ
 七 天にのぼるとも 汝かしこにいまし われわが榻を陰府にまうくるとも 視よなんち彼處にいます 我あけぼの
 八 の翼をかりて海のはてにすむとも 九 かしこにて尙なんちの手われをみちびき 汝のみぎの手われをたちたま
 九 はん 暗はかならず我をおほひ 我をかこめる光は夜とならんと我いふとも 二 汝のみまへには暗ものをかくす
 一〇 ことなく 夜もひるのごとくに輝けり なんちにはくらきも光もことなることなし 三 汝はわがはらわたをつくり
 一〇 又わがはりの胎にわれを組成たまひたり 四 われなんちに感謝す われは畏るべく奇しくつくられたり なんちの
 一五 事跡はことごとくくすし わが靈魂はいとつばらに之をしれり 五 われ隠れたるところにてつくられ 地の底所に
 一六 て妙につどりあはされしとき わが骨なんちにかくるゝことなかりき 六 わが體いまだ全からざるに なんちの目
 一七 ははやくより之をみ 日々かたちづくられしわが百體の一だにあらざりし時に ことごとくなんちの冊に 記さる
 一七 たり 神よなんちのもろもろの思念はわれに實きこといかばかりぞや そのみおもひの總計はいかに多きかな

三 わが歎息をそゞぎいだしそのみまへにわが患難をあらはす 三 わが靈魂わがうちにきえうせんとするときも汝
 四 わがみちを識たまへり人われをとらへんとてわがゆくみちに縲をかくせり 四 願くはわがみぎの手に目をそゞ
 五 ぎて見たまへ一人だに我をしるものなしわれには避所なくまたわが靈魂をかへりみる人なし 五 エホバよわれ
 六 汝をよばふ我いへらく汝はわがさけどころ有生の地にてわがうべき分なりと 六 ねがはくはわが號呼にみこゝろ
 をとめたまへ われいたく卑くせられたればなり 我をせむる者より助けいだしたまへ 彼等はわれにまさりて
 七 強ければなり 願くはわがたましひを囹圄よりいだし われに聖名を感謝せしめたまへ なんぢ豊かにわれを
 待ひたまふべければ 義者われをめぐらん

第一四三篇

ダビデのうた

一 エホバよねがはくはわが祈をきゝ わが懇求にみゝをかたぶけたまへ なんぢの眞實なんぢの
 二 公義をもて我にこたへたまへ 二 汝のしもべの審判にかゝつらひたまふなかれ そはいけるもの一人だにみまへ
 三 に義とせらるゝはなし 三 仇はわがたましひを迫めわが生命を地にうちすて 死てひさしく世を経たるものごと
 四 く我をくらき所にすまはせたり 四 又わがたましひはわが衷にきえうせんとし わが心はわがうちに曠さびれた
 五 り われはいにしへの日をおもひいで 汝のおこなひたまひし一切のことを考へ なんぢの手のみわざをおもふ
 六 われ汝にむかひてわが手をのべ わがたましひは燥きおとろへたる地のごとく汝をしたへり セラ エホバよ
 七 速かにわれにこたへたまへ わが靈魂はおとろふわれに聖顔をかくしたまふなかれ おそらくはわれ穴にくだるも
 八 のごとくならん 八 朝になんぢの仁慈をきかしめたまへ われ汝によりたのめばなり わが歩むべき途をしらせ

イ詩一四三・四 二詩三一・二、八八、ハ詩二七・一三、三三、三九、四〇、五
 ロ詩一四〇・五 八八、一八、ト詩一六・五、七三、二六、二九、五七、リ詩三三・二、二九、三三、四二、
 ハ詩四六・九、一〇、二二、二六、二九、五七、リ詩三三・二、二九、三三、四二、
 三詩七・五、一〇、ツ詩四六・五 一三九、二四、ノ詩五四・五、マ詩一〇九・二、一、
 一、一、ニ詩五八、ム尼九・二〇、オ詩一六・二六、ク後二二・三五、詩八、コ詩一八・九、賽六四、サ詩六九・二、二、一、
 ヌ詩二六・一、ナ詩二五・一、キ詩一九・二五、三、一八・三四、ケ後四・一九、一四、二、エ詩一〇四・三、二、キ詩五四・三、
 ソ詩二八・一、ラ詩二五・四、五、七四〇、十後三二・二、三、詩三九・五、六、二九、テ詩一八・三、一四、キ詩五四・三、
 一、一、ニ詩二二・二、三、一、一、

九 たまへわれわが靈魂をなんぢに擧ればなり 九 エホバよねがはくは我をわが仇よりたすけ出したまへ われ匿れ
 一〇 んとして汝にはしりゆく 一〇 汝はわが神なり われに聖旨をおこなふことををしへたまへ 惠ふかき聖靈をもて
 二 我をたひらかなる國にみちびきたまへ 二 エホバよねがはくは聖名のために我をいかしなんぢの義によりて
 三 わがたましひを患難よりいだしたまへ 三 又なんぢの仁慈によりてわが仇をたち 靈魂をくるしむる者をことごとく滅したまへ そは我なんぢの僕なり

第一四四篇

ダビデのうた

一 戦することをわが手にをしへ 闘ふことをわが指にしへたまふ わが磐エホバはほむべきかな
 二 エホバはわが仁慈わが城なり わがたかき櫓われをすくひたまふ者なり わが盾わが依頼むものなり エホバは
 三 わが民をわれにしたがはせたまふ 三 エホバよ人はいかなる者なれば之をしり 人の子はいかなる者なれば之をみ
 四 こゝろに記たまふや 四 人は氣息にことならずその存らふる日はすぎゆく影にひとし 五 エホバよねがはくは
 六 なんぢの天をたれてくだり 手を山につけて煙をたゞしめたまへ 六 電光をうちいだして彼等をちらしなんぢの
 七 矢をはなちてかれらを敗りたまへ 七 上より手をのべ我をすくひて 大水より外人の手よりたすけいだしたまへ
 八 かれらの口はむなしき言をいひ その右の手はいつはりのみぎの手なり 八 神よわれ汝にむかひて新らしき歌
 九 をうたひ 十絃の琴にあはせて汝をほめうたはん 九 なんぢは王たちに救をあたへ 僕ダビデをわざはひの劍より
 一〇 すくひたまふ神なり 一〇 ねがはくは我をすくひて外人の手よりたすけいだしたまへ かれらの口はむなしき言を

二一 いひその右の手はいつはりのみぎの手なり
 二二 われらの男子はとしわかきとき育ちたる草木のごとくわれ
 二三 らの女子は宮のふりにならひて刻みいだし、隅の石のごとくならん
 二四 われらの倉はみちたらひてさまさまのものをそなへ
 二五 われらの羊は野にて千萬の子をうみ
 二六 われらの牡牛はよく物をおひ
 二七 われらの衛にはせめいること
 二八 なく亦おしいづることなく叫ぶこともなからん
 二九 かゝる状の民はさいはひなり
 三〇 エホバをおのが神とする民は
 三一 さいはひなり

第一四五篇

ダビデの讚美のうた

一 わがかみ王よわれ汝をあがめ 世々かぎりなく聖名をほめまつらん
 二 われ日ごとに汝をほめ
 三 世々かぎりなく聖名をほめたへん
 四 エホバは大にましませば最もほむべきかなその大なることは尋ねしることかたし
 五 この代はかの代にむかひてなんぢの事跡をほめたへん
 六 なんぢの大能のはたらきを宣つたへん
 七 われ汝のほまれの榮光ある稜威となんぢの奇しきみわざとを深くおもはん
 八 人はなんぢのおそるべき動作のいきほひをかたり
 九 我はなんぢの大なることを宣つたへん
 一〇 かれらはなんぢの大なる恵の跡をいひいでなんぢの義をほめうたはん
 一一 エホバは恵ふかく憐情みちまた怒りたまふことおそく憐憫おほいなり
 一二 エホバはよるづの者にめぐみありそのふかき憐憫はみわざの上にあまねし
 一三 エホバよ汝のすべての事跡はなんぢに感謝しなんぢの聖徒はなんぢをほめん
 一四 かれらは御國のえいくわうをかたり
 一五 汝のみちからを宣つたへて
 一六 その大能のはたらきとそのみくにの榮光あるみいづとを人の子輩にしらすべし
 一七 なんぢの國はとしへの國なりなんぢの政治はよろづ代にたゆることなし
 一八 エホバはすべて倒れんとする者をさへかどむものを直したしめ

イ詩一二八・三 一四六・五 二 伯五・九・九・一〇 へ出三四・六・七 民 八 八 詩一九一 又詩一四六・八
 口申三三・二九 詩三 八 詩九六・四、一四七 一四一八 詩八六 ト詩一〇〇・五 第一 詩一四六・二 徳前 又詩一四六・八
 ル詩一〇四・二七 二 約四・二四 二 詩一八・八、九 樂 詩一四四・一五 耶 ノ詩六八・六、一〇七 四七六 路一三、 出二五・二八 詩一
 ヲ詩一〇四・二五 夕詩三一・二二、九七 二二二 一七・七 一〇・一四 一三三 〇・一六、一四五、
 夕詩一〇四・二二、一 未詩一〇四・二九 傳 ム制一・一四四・七 才太九・三〇 約九、 十申一〇・一八 詩 一三三 歌二・二五
 四七・九 一 詩一〇三・一 一二・七 樂二・三三 七三三 夕詩一〇三・六 六八・五 一三三 歌二・二五
 カ申四七 一 詩一〇四・三三 一 詩一〇三・一 一 詩一〇三・六 夕詩一〇三・六 六八・五 一三三 歌二・二五

二五 たまふ よろづのもの目はなんぢを待 なんぢは時にしたがひてかれらに糧をあたへ給ふ
 二六 きてもろもの生るもの願望をあかしめたまふ
 二七 エホバはそのすべての途にたゞしくそのすべての作爲に
 二八 めぐみふかし
 二九 エホバは近くましますなり
 三〇 エホバは己
 三一 エホバは己
 三二 エホバは己
 三三 エホバは己
 三四 エホバは己
 三五 エホバは己
 三六 エホバは己
 三七 エホバは己
 三八 エホバは己
 三九 エホバは己
 四〇 エホバは己

第一四六篇

一 エホバを讚稱へよ わがたましひよエホバをほめたへよ
 二 われ生るかぎりエホバをほめ
 三 たへ わがながらふるほどはわが神をほめうたはん
 四 もろもろの君によりたのむことなく人
 五 の子によりたのむなかれ かれらに助あることなし
 六 その氣息いでゆけばかれ土にかへるその日かれがもろも
 七 ろの企圖はほろびん
 八 ヤコブの神をおのが助としその望をおのが神エホバにおくものは福ひなり
 九 此は
 一〇 あめつちと海とそのなかななるあらゆるものを造りとこしへに眞實をまもり
 一一 虐げらるゝもののために審判を
 一二 おこなひ 餓えたるものに食物をあたへたまふ神なり
 一三 エホバはとらはれたる人をときはなしたまふ
 一四 エホバは
 一五 めしひの目をひらき
 一六 エホバは義しきものを愛しみたまふ
 一七 エホバは他邦人を
 一八 まもり 孤子と寡婦とをさへたまふ
 一九 されど悪きもの徑はくつがへしたまふなり
 二〇 エホバはとしへの統御
 二一 めたまはん
 二二 シオンよなんぢの神はよろづ代まで統御めたまはん
 二三 エホバをほめたへよ

三六 かへつて我がすべての勸告をすて 我が督斥を受ざりしに由り 三六 われ汝らが禍災にあふとき之を笑ひ 汝ら
 二七 の恐懼きたらんとし嘲るべし 三七 これは汝らのおそれ颯風の如くきたり 汝らのほろび颯風の如くきたり 艱難と
 二八 かなしみと汝らにきたらん時なり 二八 そのとき彼等われを呼ばん 然れどわれ應へじ 只管に我を求めん されど
 二九 我に遇じ 二九 かれら知識を憎み又エホバを畏るゝことを悦ばず 三〇 わが勸に従はず凡て我督斥をいやしめたるに
 三〇 よりて 三〇 己の途の果を食ひおのれの策略に飽べし 三一 拙者の違逆はおのれを殺し 愚なる者の幸福はおのれ
 三二 を滅さん 三二 されど我に聞ものは平穩に住ひ かつ禍害にあふ恐怖なくして安然ならん
 三三 第二章 我が子よ汝もし我が言をうけ 我が誠命を汝のこゝろに藏め 三三 斯て汝の耳を智慧に傾け 汝の
 三四 心をさとりにむけ 三三 もし知識を呼求め聰明をえんと汝の聲をあげ 三四 銀の如くこれを探り 秘れ
 三五 たる寶の如くこれを尋ねば 汝エホバを畏るゝことを曉り 神を知ることを得べし 三六 そはエホバは智慧をあた
 三六 へ 知識と聰明とその口より出づればなり 三六 かれは義人のために聰明をたくはへ 直く行む者の盾となる
 三七 九八 そは公平の途をたもち その聖徒の途すぢを守りたまへばなり 九八 斯て汝はつひに公義と公平と正直と一切の
 三九 善道を曉らん 一〇〇 すなはち智慧なんぢの心にいり 知識なんぢの靈魂に樂しからん 一〇〇 謹慎なんぢを守り 聰明
 四〇 なんぢをたもちて 一〇一 悪き途よりすくひ虚偽をかたる者より救はん 一〇一 彼等は直き途をはなれて幽暗き路に行み
 四一 悪を行ふを樂しみ 悪者のいつはりを悦び 一〇二 その途はまがり その行爲は邪曲なり 一〇二 聰明はまた汝を妓女
 四二 より救ひ 言をもて諂ふ婦より救はん 一〇三 彼はわかき時の侶をすて その神に契約せしことを忘るゝなり 一〇三 その

イ詩一〇七・一一 箴一一・二五 ホ伯二・二四 箴二
 一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 二九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 三九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 四九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 五九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 六九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 七九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 八九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九一 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九二 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九三 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九四 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九五 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九六 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九七 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九八 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 九九 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四
 一〇〇 一・一四 耶一・一四 耶二・一四 耶三・一四 耶四・一四 耶五・一四 耶六・一四 耶七・一四 耶八・一四 耶九・一四 耶十・一四

家いへは死しに下くだり 其そのの途みちは陰府よみに赴おもむく 一〇九 凡すべててかれにゆく者は歸かへらず 又また生命いのちの途みちに達いたらざるなり 聰明さとり汝なんぢを
 二 ともちてよき途みちに行いませ 義人よしひとの途みちを守まもらしめん 一〇 是こゝろは義人よしひとは地ちにながらへをり 完全者まことは地ちに止とどまん
 三 三 されど悪者あしきものは地ちより亡なほされ 悖逆者かたがはは地ちより拔はさらるべし
 三 第三章 我わがが子こよわが法はを忘わするゝなかれ 汝なんぢの心こゝろにわが誠命まことをまもれ 二 さらば此事このことは汝なんぢの日ひをながくし
 三 生命いのちの年としを延のべ 平康やすきをなんぢに加くはふべし 一 仁慈あはれみと眞實まこととを汝なんぢより離はなすことなかれ 之これを汝なんぢの項かたに
 四 むすび 此こゝろを汝なんぢの心こゝろの碑いしにしるせ 二 さらばなんぢ神かみと人ひととの前に恩寵めぐみと好名なまとを得うべし 三 汝なんぢこゝろを盡つくし
 五 てエホバに倚頼よりのたのめ おのれの聰明さとりに倚よることなかれ 一 汝なんぢすべての途みちにてエホバをみとめよ さらばなんぢの途みちを
 六 直ただくしたまふべし 二 自みづから見て聰明さとりとする勿なかれ エホバを畏おそえて惡あくを離はなれよ 三 此こゝろを汝なんぢの身に良藥よきくすりとなり 汝なんぢの
 七 骨ほねに滋潤うるほとならん 一 汝なんぢの貨財たからと汝なんぢがすべての産物うぶものの初生はつむぎをもてエホバをあがめよ 二 さらば汝なんぢの倉庫くらはみちて
 八 餘あまり 汝なんぢの酒醉さかぶねは新あらたしき酒さけにて溢あふれん 一 我わが子こよ汝なんぢエホバの懲治こらしめをかるんず 勿なかれ 其そのの譴責いしめを受うくるを厭いとふこと
 九 勿なかれ 二 其そのれエホバは其そのの愛あいする者ものをいましめたまふ 又またか父ちちの愛あいする子こを諷いむるが如ごとし 三 智慧ちえ
 一〇 を求め得える人ひとおよび聰明さとりをうる人は福ふちなり 一 其そのは智慧ちえを獲とるは銀ぎんを獲とるに愈まさり 其その利りは精金せいぎんよりも善よければ
 二 なり 一 智慧ちえは眞珠しんじゆよりも貴たふとし 汝なんぢの凡すべての財寶たからも之これと比くらぶるに足たらず 一 其その右みぎの手てには長ながい壽いきあり 其その左ひだりの手て
 三 には富とみと尊貴たふととあり 一 其そのの途みちは樂たのしき途みちなり 其その徑みちすぢは悉ことごとく平康やすし 一 此こゝろは執とる者ものには生命いのちの樹じゆなり
 四 之これを持もつものは福ふちなり 一 一 エホバ智慧ちえをもて地ちをさだめ 聰明さとりをもて天てんを置おきたまへり 二 其その知識ちしきによりて海洋うみやうは

二〇 いたらん 恐くは他人なんぢの資財によりて盈され 汝の勞苦は他人の家にあらん 終にいたりて汝の身な
 二二 んぢの體亡ぶる時 なんぢ泣き悲みていはん われ教をいと心に謹責をかるんじ 我が師の聲をきかず
 二四 我を教ふる者に耳を傾けず あつまりの中會衆のうちにてほとんど 諸の惡に陥れりと 汝おのれの
 二六 水溜より水を飲み おのれの泉より流るゝ水をのめ 汝の流をほかに溢れしめ 汝の河の水を衝に流れしむべけ
 二七 んや これを自己に歸せしめ 他人をして 汝と偕に之に與らしむること勿れ 汝の泉に福祉を受しめ 汝の
 二九 少き時の妻を樂しめ 彼は愛しき鹿のごとく 美しき鹿の如しその乳房をもて常にたれりとしその愛をもて
 三〇 常によろこべ 我子よ何なればあそびめをたのしみ 淫婦の胸を懐くや 一人の途はエホバの目の前に
 三二 あり彼はすべて其行爲を量りたまふ 惡者はおのれの愆にとらへられその罪の繩に繋る 彼は訓誨なき
 三三 によりて死 その多くの愚なることに由りて亡ぶべし

第六章

一 我子よ汝もし朋友のために保証をなし 他人のために汝の手を拍ば 汝その口の言によりて
 二 わなにかゝりその口の言によりてとらへらるゝなり 我子よ汝友の手に陥りしならば斯して自ら
 三 救へすなはち往て自ら謙だり只管なんぢの友に求め 汝の目をして睡らしむることなく 汝の眼瞼をして閉し
 四 むること勿れ かりうどの手より鹿のがるゝごとく 鳥とる者の手より鳥のがるゝ如くしてみづからを救
 五 へ 情者よ蟻にゆき其爲すところを觀て智慧をえよ 蟻は首領なく有司なく君王なけれども 夏の
 六 うちに食をそなへ 收穫のときに糧を斂む 情者よ汝いづれの時まで臥息むやいづれの時まで睡りて起さ
 七 るや しばらく臥ししばらく睡り 手を叉きてまた片時やすむ さらば汝の貧窮は盜人の如くきたり 汝の

一 我子よ汝の父の誠命を守り 汝の母の法
 二 則ち驕る目 いつはりをいふ舌 つみなき人の血を流す手 惡き謀計をめぐらす心 すみやかに惡に趨る足
 三 詐偽をのぶる證人 および兄弟のうちに争端をおこす者なり 我子よ汝の父の誠命を守り 汝の母の法
 四 を棄る勿れ 常にこれを汝の心にむすび 之をなんぢの頸に佩よ 此は汝のゆくとき汝をみちびき 汝の寢
 五 るとき汝をまもり 汝の寤るとき汝とかたらん され誠命は燈火なり 法は光なり 教訓の懲治は生命の道なり
 六 此は汝をまもりて 惡き婦よりまぬかれしめ 汝をたもちて 淫婦の舌の諂媚にまどはされざらしめん 其の
 七 艶美を心に戀ふことなかれ 其の眼瞼に捕へらるゝこと勿れ され娼妓のために人はたゞ僅に一撮の糧をの
 八 こすのみにいたる 又淫婦は人の貴き生命を求むるなり 人は火を懷に抱きてその衣を焚れざらんや 人は
 九 熱火を踏て其足を焚れざらんや 其の隣と姦淫をおこなふ者もかくあるべし 凡て之に捫る者は罪なしと
 一〇 せられず 竊む者もし飢しときに其飢を充さん爲にぬすめるならば人これを藐ぜじ もし捕へられればその
 一一 七倍を償ひ 其家の所有をことごとく出さざるべからず 婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり 之を行ふ者は
 一二 おのれの靈魂を亡し 傷と凌辱とをうけて其恥を雪ぐこと能はず 妬忌その夫をして忿怒をもやさしむれば
 一三 その怨を報ゆるときかならず寛さじ いかなる贖物をも願みず 衆多の饋物をなすともやはらがざるべし

第七章

我子よわが言をまもり我が誠命を汝の心にたくはへよ 我が誠命をまもりて生命をえよ 我法を守ること汝の眸子を守るが如くせよ これを汝の指にむすびこれを汝の心の碑に銘せ なんぢ智慧にむかひて汝はわが姉妹なりといひ明理にむかひて汝はわが友なりといへ さらば汝をまもりて淫婦にまよはざらしめ 言をもて媚る媚妓にとほざからしめん われ我室の牖により 穢子よりのぞきて 拙き者のうち幼弱者のうちに 一人の智慧なき者あるを觀たり 彼衢をすぎ婦の門にちかづき其家の路にゆき 黄昏に半背に夜半に黑暗の中にあるけり 時に媚妓の衣を着たる狡らなる婦かれにあふ この婦は譁しくして つゝしみなく 其足は家に止らず あるときは衢にあり 或時はひろばにあり すみすみにたちて人をうかゞふ この婦かれをひきて接吻し 恥しらぬ面をもていひけるは われ酬恩祭を獻げ今日すでにわが誓願を償せり これによりて我なんぢを迎へんとていで 汝の面をたづねて汝に逢へり わが榻には美しき褥およびエジプトの文象をしき 浚薬 蘆薈 桂皮をもて我が榻にそゞげり 來れわれら詰朝まで情をつくし愛をかよはして 相なくさめん そは夫は家にあらず遠く旅立して 手に金囊をとれり 望月ならでは家に歸らじと 多の婉 言をもて惑し 口唇の諂媚をもて誘へば わかき人たゞちにこれに隨へり あだかも牛の宰地にゆくが如く 愚なる者の桎梏をかけるる爲にゆくが如し 遂には矢その肝を刺さん 鳥の速かに羅にいりてその生命を喪ふに至るを知るがごとし 小子等よいま我にきけ 我が口の言に耳を傾けよ なんぢの心を淫婦の道にかたむくこと勿れ またこれが徑に迷ふこと勿れ そは彼は多の人を傷つけて仕せり 彼に殺されたる者ぞ多かる その家は陰府の途にして死の室に下りゆく

第八章

智慧は呼はらざるか 聰明は聲を出さざるか 彼は路のほとりの高處また街衢のなかに立ち 邑のもろもろの門 邑の口および門々の入口にて呼はりいふ 人々よ われ汝をよび 我が聲をもて人の子等をよぶ 拙き者よなんぢら聰明に明かなれ 愚なる者よ汝ら明かなる心を得よ 汝きけ われ善事をかたらん わが口唇をひらきて正 事をいださん 我が口は眞實を述べ わが口唇はあしき事を憎むなり わが口の言はみな義し そのうちに虚偽と奸邪とあることなし 是みな智者の明かにするところ 知識をうる者の正とするところなり なんぢら銀をうくるよりは我が教をうけよ 精金よりもむしろ知識をえよ それ智慧は眞珠に愈れり 凡の寶も之に比ぶるに足らず われ智慧は聰明をすみかとし 知識と謹慎にいたる 一 エホバを畏るゝとは悪を憎むことなり 我は傲慢と驕奢 惡道と虚偽の口とを憎む 謀略と聰明は我にあり 我は了知なり 我は能力あり 我に由て王者は政をなし 君たる者は義しき律をたて 我によりて主たる者および牧伯たちなど凡て地の審判人は世ををさむ われを愛する者は我これを愛す 我を切に求むるものは我に 遇ん 富と榮とは我にあり 貴き寶と公義とも亦然り わが果は金よりも精金よりも愈り わが利は精銀よりもよし 我は義しき道にあゆみ 公平なる路徑のなかを行む これ我を愛する者に貨財をえさせ 又その庫を 充しめん爲なり エホバいにしへ其御わざをなしそめたまへる前に その道の始として我をつくりたまひき 永遠より元始より地の有ざりし前より我は立られ いまだ海洋あらず いまだ大なるみづの泉あざりし とき我すでに生れ 山いまださだめられず 陵いまだ有ざりし前に我すでに生れたり 即ち神いまだ地をも 野をも地の塵の根元をも造り給はざりし時なり かれ天をつくり 海の面に穹蒼を張たまひしとき我かしこに

六 おもひは直し 悪者の計るところは虚偽なり 悪者の言は人の血を流さんとて伺ふ されど直者の口は人を救ふ
 八七 なり 悪者はたふされて無ものとならん されど義者の家は立べし 人はその聰明にしたがひて譽られ心
 〇九 の恃れる者は藐めらる 卑賤してしもべある者は自らたかぶりて食に乏き者に愈る 義者はその畜の生命
 二 を顧みる されど悪者は残忍をもてその憐憫とす 〇二 おのれの田地を耕すものは食にあく 放蕩なる人にしたがふ
 三 者は智慧なし 悪者はあしき人の獲たる物をうらやみ 義者の根は芽をいだす 悪者はくちびるの慾に
 四 よりて昏に陥る されど義者は患難の中よりまぬかれいでん 人はその口の徳によりて福祉に飽ん 人の手の
 五 行爲はその人の身にかへるべし 愚なる者はみづからその道を見て正しとす されど智慧ある者はすゝめを
 六 容る 愚なる者はたゞちに怒をあらはし 智きものは恥をつゝむ 眞實をいふものは正義を述べ いつはりの
 七 證人は虚偽をいふ 妄りに言をいだし 剣をもて刺がごとくする者あり されど智慧ある者の舌は人をいやす
 八 眞理をいふ口唇は何時までも存つ されど虚偽をいふ舌はたゞ瞬息のあひだのみなり 悪事をはかる者の心
 九 には欺詐あり 和平を議る者には歡喜あり 義者には何の禍害も來らず 悪者はわざはひをもて充さる
 一〇 つはりの口唇はエホバに憎まれ 眞實をおこなふ者は彼に悦ばる 賢人は知識をかくす されど愚なる者の
 一一 こゝろは愚なる事を述べ 勤めはたらく者の手は人ををさむるにいたり 情者は人に服ふるにいたる
 一二 れひ人の心にあれば之を屈ます されど善言はこれを樂します 義者はその友に道を示す されど悪者は自ら
 一三 途にまよふ 情者はおのれの獵獲たる物をも燔す 勉めはたらくことは人の貴とき寶なり 義しき道には

イ 箴一・二一、二八 二 箴前二五・一七 七 箴三〇・一一 九 箴五七・四、五九 二〇 箴二二・一五 一五 箴五〇・四
 ク 箴一・三、五六 二 箴一〇・二〇、二二 二七、二六、二二 二二 箴二二・一五 一五 箴五五・三三 二六 箴二八・八 箴二・
 十 箴一八・五六、六二 二 箴一〇・二〇、二二 二七、二六、二二 二二 箴二二・一五 一五 箴五五・三三 二六 箴二八・八 箴二・
 十一 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十二 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十三 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十四 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十五 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十六 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十七 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十八 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 十九 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇
 二十 箴一七・三六、三七 八 箴一三・七 九 箴一八・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇 箴一七・三六、三七 九 箴一三・七 一〇

生命ありその道すぢには死なし

第一三章

一 智慧ある子は父の教訓をきき 戲謔者は懲治をきかず 人はその口の徳によりて福祉をくらひ
 二 悖逆者の靈魂は強暴をくらふ 三 その口を守る者はその生命を守る その口唇を大きくひらく者に
 三 は滅びきたる 情者はこゝろに慕へども得ることなし 勤めはたらく者の心は豊饒なり 義者は虚偽の
 四 言をにくみ 悪者ははぢをかうむらせ面を赤くせしむ 義は道を直くあゆむ者をまもり 悪は罪人を倒す 自
 五 ら富めりといひあらはして些少の所有もなき者あり 自ら貧しと稱へて資財おほき者あり 人の資財はその
 六 生命を贖ふものとなるあり 然ど貧者は威嚇をきくことあらず 義者の光は輝き 悪者の燈火はけさる
 七 驕傲はたゞ争端を生ず 勸告をきく者は智慧あり 詭詐をもて得たる資財は減る されど手をもて聚めたく
 八 はふる者はこれを増すことを得 望を得ること遅きときは心を疾しめ 願ふ所既にとぐるときは生命の樹を得
 九 たるがごとし 御言をかるんずる者は亡され 誠命をおそるゝ者は報賞を得 智慧ある人の教訓はいのちの
 一〇 泉なり 能く人をして死の昏を脱れしむ 善にして哲きものは恩を蒙る されど悖逆者の途は艱難なり 凡そ
 一一 賢者は知識に由りて事をおこなひ 愚なる者はおのれの痴を顯す 悪き使者は災禍に陥る されど忠信なる
 一二 使者は良薬の如し 貧乏と恥辱とは教訓をすつる者にきたる されど譴責を守る者は尊まる 望を得れば
 一三 心に甘し 愚なる者は悪を棄つることを嫌ふ 智慧ある者と偕にあゆむものは智慧をえ 愚なる者の友となる
 一四 者はあしくなる わざはひは罪人を追ひ 義者は善報をうく 善人はその産業を子孫に遺す されど罪人の
 一五 資財は義者のために蓄へらる 貧しき者の新田にはおほくの糧あり されど不義によりて亡る者あり 鞭を

二二 人に思ふ 人の心のたかぶりは滅亡に先だち 謙遜はたふとまるゝ事にさきだつ 二二
 二一 應ふる者は愚にして辱をかうふる 人の心は尙其疾を忍ぶべしされど心の傷める時は誰かこれに耐んや
 二〇 哲者の心は知識をえ 智慧ある者の耳は知識を求む 人の贈物はその人のために道をひらき かつ貴きもの
 一九 の前にこれを導く 先に訴訟の理由をのぶるものは正義に似たれどもその鄰人きたり詰問ひてその事を明か
 一八 にす 籤は争端をとどめ且つよきものの中にへだてとなる 怒れる兄弟はかたき城にもまさりて説き伏せ
 一七 がたし 兄弟のあらしひは櫓の貫木のごとし 人は口の徳によりて腹をあかし その口唇の徳によりて自ら飽
 一六 べし 死生は舌の権能にありこれを愛する者はその果を食はん 妻を得るものは美物を得るなり 且エホバ
 一五 より恩寵をあたへらる 貧者は哀なる言をもて乞ひ 富人は厲しき答をなす 多の友をまうくる人は遂に
 一四 その身を亡す 但し兄弟よりもたのもしき知己もまたあり

第十九章

一 たゞしく歩むまづしき者は うちびるの悖れる愚なる者に愈る 心に思慮なければ善らず足に
 二 て急ぐものは道にまよふ 人はおのれの痴によりて道につまづき 反て心にエホバを怨む 資財
 三 はおほくの友をあつむされど貧者はその友に疎まる 虚偽の證人は罰をまぬかれず 謙言をはくものは避る
 四 ることをえず 君に媚る者はおほし 凡そ人は贈物を與ふる者の友となるなり 貧者はその兄弟すらも皆こ
 五 れをにくむ 況てその友これに遠ざからざらんや言をはなちてこれを呼とも去てかへらざるなり 智慧を得る
 六 者はおのれの靈魂を愛す 聰明をたもつ者は善福を得ん 虚偽の證人は罰をまぬかれず 謙言をはく者はほろぶ

一 箴一六・二二、一五、
 二 箴一六・二二、一五、
 三 箴一六・二二、一五、
 四 箴一六・二二、一五、
 五 箴一六・二二、一五、
 六 箴一六・二二、一五、
 七 箴一六・二二、一五、
 八 箴一六・二二、一五、
 九 箴一六・二二、一五、
 一〇 箴一六・二二、一五、
 一一 箴一六・二二、一五、
 一二 箴一六・二二、一五、
 一三 箴一六・二二、一五、
 一四 箴一六・二二、一五、
 一五 箴一六・二二、一五、
 一六 箴一六・二二、一五、
 一七 箴一六・二二、一五、
 一八 箴一六・二二、一五、
 一九 箴一六・二二、一五、
 二〇 箴一六・二二、一五、
 二一 箴一六・二二、一五、
 二二 箴一六・二二、一五、
 二三 箴一六・二二、一五、
 二四 箴一六・二二、一五、
 二五 箴一六・二二、一五、
 二六 箴一六・二二、一五、
 二七 箴一六・二二、一五、
 二八 箴一六・二二、一五、
 二九 箴一六・二二、一五、
 三〇 箴一六・二二、一五、
 三一 箴一六・二二、一五、
 三二 箴一六・二二、一五、
 三三 箴一六・二二、一五、
 三四 箴一六・二二、一五、
 三五 箴一六・二二、一五、
 三六 箴一六・二二、一五、
 三七 箴一六・二二、一五、
 三八 箴一六・二二、一五、
 三九 箴一六・二二、一五、
 四〇 箴一六・二二、一五、
 四一 箴一六・二二、一五、
 四二 箴一六・二二、一五、
 四三 箴一六・二二、一五、
 四四 箴一六・二二、一五、
 四五 箴一六・二二、一五、
 四六 箴一六・二二、一五、
 四七 箴一六・二二、一五、
 四八 箴一六・二二、一五、
 四九 箴一六・二二、一五、
 五〇 箴一六・二二、一五、
 五一 箴一六・二二、一五、
 五二 箴一六・二二、一五、
 五三 箴一六・二二、一五、
 五四 箴一六・二二、一五、
 五五 箴一六・二二、一五、
 五六 箴一六・二二、一五、
 五七 箴一六・二二、一五、
 五八 箴一六・二二、一五、
 五九 箴一六・二二、一五、
 六〇 箴一六・二二、一五、
 六一 箴一六・二二、一五、
 六二 箴一六・二二、一五、
 六三 箴一六・二二、一五、
 六四 箴一六・二二、一五、
 六五 箴一六・二二、一五、
 六六 箴一六・二二、一五、
 六七 箴一六・二二、一五、
 六八 箴一六・二二、一五、
 六九 箴一六・二二、一五、
 七〇 箴一六・二二、一五、
 七一 箴一六・二二、一五、
 七二 箴一六・二二、一五、
 七三 箴一六・二二、一五、
 七四 箴一六・二二、一五、
 七五 箴一六・二二、一五、
 七六 箴一六・二二、一五、
 七七 箴一六・二二、一五、
 七八 箴一六・二二、一五、
 七九 箴一六・二二、一五、
 八〇 箴一六・二二、一五、
 八一 箴一六・二二、一五、
 八二 箴一六・二二、一五、
 八三 箴一六・二二、一五、
 八四 箴一六・二二、一五、
 八五 箴一六・二二、一五、
 八六 箴一六・二二、一五、
 八七 箴一六・二二、一五、
 八八 箴一六・二二、一五、
 八九 箴一六・二二、一五、
 九〇 箴一六・二二、一五、
 九一 箴一六・二二、一五、
 九二 箴一六・二二、一五、
 九三 箴一六・二二、一五、
 九四 箴一六・二二、一五、
 九五 箴一六・二二、一五、
 九六 箴一六・二二、一五、
 九七 箴一六・二二、一五、
 九八 箴一六・二二、一五、
 九九 箴一六・二二、一五、
 一〇〇 箴一六・二二、一五、

一〇 愚なる者の驕奢に居るは適當からず 況て僕にして上に在る者を治むることをや 聰明は人に怒をしの
 一一 べし 過失を宥すは人の榮譽なり 王の怒は獅の吼るが如くその恩典は草の上におく露のごとし 愚なる
 一二 子はその父の災禍なり 妻の相争そふは雨漏のたえぬにひとし 家と資財とは先祖より承嗣ぐもの 賢き妻はエ
 一三 ホバより賜ふものなり 懶惰は人を酣寐せしむ 懈怠人は飢べし 誠命を守るものは自己の靈魂を守るなり
 一四 その道をかろむるものは死ぬべし 貧者をあはれむ者はエホバに貸すなり その施濟はエホバ償ひたまはん
 一五 望ある間に汝の子を打て これを殺すこゝろを起すなかれ 怒ることの烈しき者は罰をうく 汝もしこれを
 一六 救ふともしばしば然せざるを得じ なんぢ勸をきし訓をうけよ 然ばなんぢの終に智慧あらん 人の心には
 一七 多くの計畫あり されど惟エホバの旨のみ立べし 人のよるこびは施濟をするにあり 貧者は謙 人に愈る
 一八 エホバを畏るゝことは人をして生命にいたらしめ かつ恒に飽足りて災禍に遇ざらしむ 情者はその手を
 一九 盤にいろゝも之をその口に擧ることをだにせず 嘲笑者を打て さらば拙者も慎まん 哲者を謹めよ さらば
 二〇 かれ知識を得ん 父を煩はし母を逐ふは羞根をきたらし 凌辱をまねく子なり わが子よ 哲言を離れしむる
 二一 教を聴くことを息めよ 悪き證人は審判を嘲り 悪者の口は悪を呑む 審判は嘲笑者のために備へられ 鞭は
 二二 愚なる者の背のために備へらる

第二十章

一 酒は人をして嘲らせ 濃酒は人をして騒がしむ 之に迷はざるゝ者は無智なり 王の震怒は獅の
 二 吼るがごとし 彼を怒らす者は自己のいのちを害ふ 穩かに居りて争はざるは人の榮譽なり

いへどもその心は汝に眞實ならず 汝つひにその食へる物を吐出すにいたり 且その出しゝ懇勸の言もむなしく
 ならん 愚なる者の耳に語ることを勿れ 彼なんぢが言の示す明哲を藐めん 古き地界を移すことなかれ 孤子
 の畑を侵すことなかれ 二 是はかれが贖者は強し 必ず汝に對らひて之が訴をのべん 汝の心を教に用ゐ 汝の
 耳を知識の言に傾けよ 子を懲すことを爲さるなかれ 鞭をもて彼を打とも死することあらじ 一四 もし鞭をもて
 彼をうたばその靈魂を陰府より救ふことをえん 一五 わが子よもし汝のこゝろ智からば我が心もまた歡び 一六
 汝の口唇たゞしき事をいはじ 我が腎腸も喜ぶべし 一七 なんぢ心に罪人をうらやむ勿れ 汝の終日エホバを畏れ
 よ 一八 是は必ず應報ありて汝の望は廢らざればなり 一九 わが子よ 汝きよて智慧をえ かつ汝の心を道にかたづけ
 よ 酒にふけり肉をたしむものと交ること勿れ 二 酒にふける者と肉を嗜む者とは貧しくなり 睡眠を食る
 者は敝れたる衣をきるにいたらん 汝を生る父にきけ 汝の老たる母を輕んずる勿れ 眞理を買へ これを
 售るなかれ 智慧と誠命と知識とまた然あれ 義き者の父は大によろこび 智慧ある子を生る者はこれがために
 樂しまん 汝の父母を樂しませ 汝を生る者を喜ばせよ 一六 わが子よ 汝の心を我にあたへ 汝の目にわが途を樂
 しめ 二七 それ妓婦は深き坑のごとく 淫婦は狭き井のごとし 彼は盜賊のごとく人を窺ひ かつ世の人の中に悖れ
 る者が増なり 禍害ある者は誰ぞ 憂愁ある者は誰ぞ 争端をなす者は誰ぞ 煩慮ある者は誰ぞ 故なくして傷を
 うくる者は誰ぞ 赤目ある者は誰ぞ 是すなはち酒に夜をふかすもの 往て混和せたる酒を味ふる者なり 酒
 はあかく盃の中に泡だち滑かにくだる 汝これを見るなかれ 是は終に蛇のごとく噬み 蝮の如く刺すべし

イ 九八 六七六 二 九三 二四一 路一六 羅一三三 弗五 力 四四 七六一 一 傳七 一八 一
 一七 九二 二七 一八 二二 一五 一 二四 二 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九 一二〇 一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七 一三八 一三九 一四〇 一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇 一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇 二〇一 二〇二 二〇三 二〇四 二〇五 二〇六 二〇七 二〇八 二〇九 二一〇 二一一 二一二 二一三 二一四 二一五 二一六 二一七 二一八 二一九 二二〇 二二一 二二二 二二三 二二四 二二五 二二六 二二七 二二八 二二九 二三〇 二三一 二三二 二三三 二三四 二三五 二三六 二三七 二三八 二三九 二四〇 二四一 二四二 二四三 二四四 二四五 二四六 二四七 二四八 二四九 二五〇 二五一 二五二 二五三 二五四 二五五 二五六 二五七 二五八 二五九 二六〇 二六一 二六二 二六三 二六四 二六五 二六六 二六七 二六八 二六九 二七〇 二七一 二七二 二七三 二七四 二七五 二七六 二七七 二七八 二七九 二八〇 二八一 二八二 二八三 二八四 二八五 二八六 二八七 二八八 二八九 二九〇 二九一 二九二 二九三 二九四 二九五 二九六 二九七 二九八 二九九 三〇〇 三〇一 三〇二 三〇三 三〇四 三〇五 三〇六 三〇七 三〇八 三〇九 三一〇 三一 三一二 三一三 三一四 三一五 三一六 三一七 三一八 三一九 三二〇 三二一 三二二 三二三 三二四 三二五 三二六 三二七 三二八 三二九 三三〇 三三一 三三二 三三三 三三四 三三五 三三六 三三七 三三八 三三九 三四〇 三四一 三四二 三四三 三四四 三四五 三四六 三四七 三四八 三四九 三五〇 三五 三五二 三五三 三五四 三五五 三五六 三五七 三五八 三五九 三六〇 三六一 三六二 三六三 三六四 三六五 三六六 三六七 三六八 三六九 三七〇 三七 三七二 三七三 三七四 三七五 三七六 三七七 三七八 三七九 三八〇 三八一 三八二 三八三 三八四 三八五 三八六 三八七 三八八 三八九 三九〇 三九一 三九二 三九三 三九四 三九五 三九六 三九七 三九八 三九九 四〇〇 四〇一 四〇二 四〇三 四〇四 四〇五 四〇六 四〇七 四〇八 四〇九 四一〇 四一一 四一二 四一三 四一四 四一五 四一六 四一七 四一八 四一九 四二〇 四二一 四二二 四二三 四二四 四二五 四二六 四二七 四二八 四二九 四三〇 四三一 四三二 四三三 四三四 四三五 四三六 四三七 四三八 四三九 四四〇 四四一 四四二 四四三 四四四 四四五 四四六 四四七 四四八 四四九 四五〇 四五 四五二 四五三 四五四 四五五 四五六 四五七 四五八 四五九 四六〇 四六一 四六二 四六三 四六四 四六五 四六六 四六七 四六八 四六九 四七〇 四七一 四七二 四七三 四七四 四七五 四七六 四七七 四七八 四七九 四八〇 四八一 四八二 四八三 四八四 四八五 四八六 四八七 四八八 四八九 四九〇 四九一 四九二 四九三 四九四 四九五 四九六 四九七 四九八 四九九 五〇〇 五〇一 五〇二 五〇三 五〇四 五〇五 五〇六 五〇七 五〇八 五〇九 五一〇 五一 五一二 五一三 五一四 五一五 五一六 五一七 五一八 五一九 五二〇 五二一 五二二 五二三 五二四 五二五 五二六 五二七 五二八 五二九 五三〇 五三一 五三二 五三三 五三四 五三五 五三六 五三七 五三八 五三九 五四〇 五四一 五四二 五四三 五四四 五四五 五四六 五四七 五四八 五四九 五五〇 五五一 五五二 五五三 五五四 五五五 五五六 五五七 五五八 五五九 五六〇 五六 五六二 五六三 五六四 五六五 五六六 五六七 五六八 五六九 五七〇 五七一 五七二 五七三 五七四 五七五 五七六 五七七 五七八 五七九 五八〇 五八一 五八二 五八三 五八四 五八五 五八六 五八七 五八八 五八九 五九〇 五九一 五九二 五九三 五九四 五九五 五九六 五九七 五九八 五九九 六〇〇 六〇一 六〇二 六〇三 六〇四 六〇五 六〇六 六〇七 六〇八 六〇九 六一〇 六一 六一二 六一三 六一四 六一五 六一六 六一七 六一八 六一九 六二〇 六二一 六二二 六二三 六二四 六二五 六二六 六二七 六二八 六二九 六三〇 六三一 六三二 六三三 六三四 六三五 六三六 六三七 六三八 六三九 六四〇 六四一 六四二 六四三 六四四 六四五 六四六 六四七 六四八 六四九 六五〇 六五一 六五二 六五三 六五四 六五五 六五六 六五七 六五八 六五九 六六〇 六六一 六六二 六六三 六六四 六六五 六六六 六六七 六六八 六六九 六七〇 六七 六七二 六七三 六七四 六七五 六七六 六七七 六七八 六七九 六八〇 六八一 六八二 六八三 六八四 六八五 六八六 六八七 六八八 六八九 六九〇 六九一 六九二 六九三 六九四 六九五 六九六 六九七 六九八 六九九 七〇〇 七〇一 七〇二 七〇三 七〇四 七〇五 七〇六 七〇七 七〇八 七〇九 七一〇 七一一 七一二 七一三 七一四 七一五 七一六 七一七 七一八 七一九 七二〇 七二一 七二二 七二三 七二四 七二五 七二六 七二七 七二八 七二九 七三〇 七三一 七三二 七三三 七三四 七三五 七三六 七三七 七三八 七三九 七四〇 七四一 七四二 七四三 七四四 七四五 七四六 七四七 七四八 七四九 七五〇 七五一 七五二 七五三 七五四 七五五 七五六 七五七 七五八 七五九 七六〇 七六一 七六二 七六三 七六四 七六五 七六六 七六七 七六八 七六九 七七〇 七七一 七七二 七七三 七七四 七七五 七七六 七七七 七七八 七七九 七八〇 七八一 七八二 七八三 七八四 七八五 七八六 七八七 七八八 七八九 七九〇 七九一 七九二 七九三 七九四 七九五 七九六 七九七 七九八 七九九 八〇〇 八〇一 八〇二 八〇三 八〇四 八〇五 八〇六 八〇七 八〇八 八〇九 八一〇 八一一 八一二 八一三 八一四 八一五 八一六 八一七 八一八 八一九 八二〇 八二一 八二二 八二三 八二四 八二五 八二六 八二七 八二八 八二九 八三〇 八三一 八三二 八三三 八三四 八三五 八三六 八三七 八三八 八三九 八四〇 八四一 八四二 八四三 八四四 八四五 八四六 八四七 八四八 八四九 八五〇 八五一 八五二 八五三 八五四 八五五 八五六 八五七 八五八 八五九 八六〇 八六一 八六二 八六三 八六四 八六五 八六六 八六七 八六八 八六九 八七〇 八七一 八七二 八七三 八七四 八七五 八七六 八七七 八七八 八七九 八八〇 八八一 八八二 八八三 八八四 八八五 八八六 八八七 八八八 八八九 八九〇 八九一 八九二 八九三 八九四 八九五 八九六 八九七 八九八 八九九 九〇〇 九〇一 九〇二 九〇三 九〇四 九〇五 九〇六 九〇七 九〇八 九〇九 九一〇 九一一 九一二 九一三 九一四 九一五 九一六 九一七 九一八 九一九 九二〇 九二一 九二二 九二三 九二四 九二五 九二六 九二七 九二八 九二九 九三〇 九三一 九三二 九三三 九三四 九三五 九三六 九三七 九三八 九三九 九四〇 九四一 九四二 九四三 九四四 九四五 九四六 九四七 九四八 九四九 九五〇 九五 九五二 九五三 九五四 九五五 九五六 九五七 九五八 九五九 九六〇 九六一 九六二 九六三 九六四 九六五 九六六 九六七 九六八 九六九 九七〇 九七一 九七二 九七三 九七四 九七五 九七六 九七七 九七八 九七九 九八〇 九八一 九八二 九八三 九八四 九八五 九八六 九八七 九八八 九八九 九九〇 九九一 九九二 九九三 九九四 九九五 九九六 九九七 九九八 九九九 一〇〇〇

第二章

また汝の目は怪しきものを見 なんぢの心は謊言をいはん 汝は海のなかに偃すもののごとく 帆桅の上に偃
 すもののごとし 汝いはん人われを撃ども我いたます 我を擗けども我おほえず 我さめなばまた酒を求めんと
 一 なんぢ悪き人を羨むことなかれ 又これと借に居らんことを願ふなかれ 二 是はその心に暴虐を
 はかりその口唇に人を害ふことをいへばなり 三 家は智慧によりて建られ 明哲によりて堅くせら
 れ 四 また室は知識によりて各種の貴く美しき寶にて充されん 五 智慧ある者は強し 知識ある人は力をます
 六 汝よき謀計をもて戦闘をなせ 勝利は議者の多きによる 七 智慧は高くして愚なる者の及ぶところにあらず
 愚なる者は門にて口を啓くことをえず 八 悪をなさんと謀る者を邪曲なる者と稱ふ 九 愚なる者の謀るところは
 罪なり 嘲笑者は人に憎まる 一〇 汝もし患難の日に氣を挫かば汝の力は弱し 一一 なんぢ死地に曳れゆく者を拯へ
 滅亡によるめきゆく者をすくはざる勿れ 一二 汝われら之を知らずといふとも心をはかる者これを曉らざらんや
 汝の靈魂をまもる者これを知ざらんや 彼はおのおのの行爲によりて人に報ゆべし 一三 わが子よ蜜を食へ 是は美
 ものなり また蜂のすの滴瀝を食へ 是はなんぢの口に甘し 一四 智慧の汝の靈魂におけるも是の如しと知れ 此れ
 を得ばかならず報いありて汝の望すたれじ 一五 悪者よ 義者の家を窺ふことなかれ 其の安居所を攻ること勿れ
 一六 是は義者は七次たふるゝともまた起くされど 悪者は禍災によりて亡ぶ 一七 汝の仇たふるゝとき樂しむこと
 勿れ 彼の亡ぶるときゝろに喜ぶことなかれ 一八 恐くはエホバこれを見て惡しとし 其の震怒を彼より離れしめ
 たまはん 一九 なんぢ悪者を怒ることなかれ 邪曲なる者を羨むなかれ 二〇 是は惡者には後の善資なし 邪曲なる

三二 者の燈火は滅されん 三三 わが子よエホバと王とを畏れよ 叛逆者に交ること勿れ 三四 斯るものらの災禍は速におこるこの兩者の滅亡はたれか知えんや 三五 是等もまた智慧ある者の箴言なり 三六 偏りて鞫するは善らず 三七 罪人に告て汝は義しといふものをば衆人これを誹ひ諸民これを惡まん 三八 これを諱る者は恩をえん また福祉これにきたるべし 三九 ほどよき應答をなす者は口唇に接吻するなり 四〇 外にて汝の工をととのへ田圃にてこれを自己のためにそなへ 四一 然るのち汝の家を建よ 四二 故なく汝の鄰に敵して證することなかれ 汝なんぞ口唇をもて欺くべけんや 四三 彼の我に爲し如く我も亦かれになすべし 四四 われ人の爲ししところに循ひてこれに報いんといふこと勿れ 四五 われ會て情 人の田圃と智慧なき人の葡萄園とをすぎて見しに 四六 荆棘あまねく生え 蕪その地面を掩ひその石垣くづれるなり 四七 我これをみて心をとどめこれを觀て教をえたり 四八 しばらく臥し暫らく睡り手を又きて又しばらく休む 四九 さらば汝の貧窮は盜人のごとく汝の缺乏は兵士の如くきたるべし 五〇 此等もまたソロモンの箴言なり ユダの王ヒゼキヤに屬せる人々これを輯めたり 五一 事を隠からず 五二 銀より渣滓を除けさらば銀工の用ふべき器いでん 五三 天の高さと地の深さと 王たる者の心とは測るべて堅く立ん 五四 王の前に自ら高ぶることなかれ 貴人の場に立つことなかれ 五五 なんちが目に見る王の前にて下にさげらるゝよりはこゝに上れといはるゝこと愈れり 五六 汝かるがろしく出でて争ふことなかれ 恐くは終にいたりて汝の鄰に辱しめられん その時なんち如何になさんとするか 五七 なんち鄰と争ふことあらば只これと争へ

第二十五章

イ 羅一三・七 彼前 六弗四・二五
 二・一七 一約七・二四 二五 二〇・二二 太五 七提前二・二二 夕 羅一三・二七
 二七 一六・一五 申一 二二 三九 四四 羅一 二 王申二九・二九 羅 一 二九 一五 二五 一八
 二七 一六・一九 二 王上五・一七 一八 一 一三 三三 九 伯二九・一六 王路一四・八一 一〇
 二八 一五・二八 二 路一四・二八 九 伯二九・一六 王路一四・八一 一〇

二〇 人の密事を洩すなかれ 二一 恐くは聞者なんぢを卑しめん 汝そしられて止ざらん 二二 機にかなひて語る言は銀の彫刻物に金の林檎を嵌たるが如し 二三 智慧をもて諱むる者の之をきく者の耳におけることは金の耳環と精金の飾のごとし 二四 忠信なる使者は之を遺す者におけること 穡收の日に冷かなる雪あるがごとし 能その主の心を喜ばしむ 二五 おくりものすと偽りて誇る人は雨なき雲風の如し 二六 怒を緩くすれば君も言を容る 柔かなる舌は骨を折く 二七 なんち蜜を得るか 惟これを足る程に食へ 恐くは食ひ過して之を吐出さん 二八 なんちの足を鄰の家にしげくするなかれ 恐くは彼なんぢを厭ひ惡まん 二九 その鄰に敵して虚偽の證をたつる人は斧刃または利き箭のごとし 三〇 艱難に遇ふとき忠實ならぬ者を頼むは 惡しき齒または跛たる足を恃むがごとし 三一 心の傷める人の前に歌をうたふは 寒き日に衣をぬぐが如く 曹達のうへに酢を注ぐが如し 三二 なんちの仇もし飢多なば之に糧をくらはせもし 渴かば之に水を飲ませよ 三三 なんち斯するは火をこれが首に積むなり 四〇 エホバなんぢに報いたまふべし 四一 北風は雨をおこし かげごとをいふ舌は人の顔をいからす 四二 争ふ婦と借に室に居らんより 屋蓋の隅にをるは宜し 四三 遠き國よりきたる好き消息は 渴きたる人における冷かなる水のごとし 四四 義者の惡者の前に服するは 井の濁れるがごとく 泉の汚れたるがごとし 四五 蜜をおほく食ふは善らず 四六 人おのれの榮譽をもとむるは榮譽にあらず 四七 おのれの心を制へざる人は石垣なき壊れたる城のごとし

第二十六章

一 榮譽の愚なる者に適はざるは 夏の時に雪ふり 穡收の時に雨ふるがごとし 二 故なき詛は雀の翔り 燕の飛ぶが如くにきたるものにあらず 三 馬の爲には策あり 驢馬の爲には銜あり 愚なる者の背のために杖あり 四 愚なる者の痴にしたがひて答ふること勿れ 恐くはおのれも是と同じからん 五 愚なる者の

六 痴にしたがひて之に答へよ 恐くは彼おのれの目に自らを智者と見ん 愚なる者に托して事を言おくる者は
 八七 おのれの足をきり身に害をうく 跛者の足は用なし 愚なる者の口の箴もかくのごとし 榮譽を愚なる者
 九 にと與ふるは 石を投石索に繋ぐが如し 愚なる者の口にたもつ箴言は 醉へるものの刺ある杖を手にて擧ぐるが
 二〇 ごとし 愚なる者を備ひ流浪者を備ふ者は すべての人を傷くる射手の如し 狗のかへり來りてその吐たる
 二 物を食ふがごとく 愚なる者は重ねてその痴なる事をおこなふ 汝おのれの目に自らを智者ある者とする人を
 二二 見るか 彼よりも却て愚なる人に望あり 情者は途に獅あり 衢に獅ありといふ 戸の蝶鉸によりて轉るご
 二四 とく 情者はその牀に轉轉す 情者はその手を盤に在るも之をその口に擧ることを厭ふ 情者はおのれ
 二六 の目に自らを 善く答ふる七人の者よりも智慧ありとなす 路をよぎり自己に關りなき争擾にたづさはる者は
 二七 狗の耳をとらふる者のごとし 既にその鄰を欺くことをなして我はた戯れしのみといふ者は 火箭または鎗
 二八 または死を擲つ 狂人のごとし 薪なければ火はきえ 人の是非をいふ者なければ争端はやむ 煨火に炭を
 二九 つぎ火に薪をくぶるがごとく 争論を好む人は争論を起す 人の是非をいふものの言はたはぶれのごとしと雖も
 三〇 かへつて腹の奥に入る 温かき口唇をもちて悪き心あるは 銀の滓をきせたる瓦片のごとし 恨むる者は口唇
 三一 をもて自ら飾れども 心の衷には虚偽をいやく 彼その聲を和らかにするとも之を信するなかれ その心に七の
 三二 憎むべき者あればなり たとひ虚偽をもてその恨をかくすとも その悪は會集の中に顯はる 坑を掘るものは
 三三 自ら之に陥らん 石を轉ばしあぐる者の上にはその石まろびかへらん 虚偽の舌はおのれの害す者を憎み 諂ふ
 三四 口は滅亡をきたらす

イ彼後二二二 一八・一一 二二二 六二一九・二四 七二二五・二八 九二二八・三三 九二九八・三八
 口出八・一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇
 一八・一一 二二二 六二一九・二四 七二二五・二八 九二二八・三三 九二九八・三八
 一八・一一 二二二 六二一九・二四 七二二五・二八 九二二八・三三 九二九八・三八
 一八・一一 二二二 六二一九・二四 七二二五・二八 九二二八・三三 九二九八・三八

第二十七章

一 なんぢ明日のことを誇るなかれ そは一日の生ずるところの如何なるを知ざればなり 汝おの
 二 れの口をもて自ら讚むることなく人をして己を讚めしめよ 自己の口唇をもてせず他人をして己を
 三 ほめしめよ 石は重く沙は軽からず 然ど愚なる者の怒はこの二よりも重し 忿怒は猛く 憤恨は烈し され
 四 ど嫉妬の前には誰か立たつを得ん 明白に譴むるは秘に愛するに愈る 愛する者の傷つくるは眞實よりし
 五 敵の接吻するは偽詐よりするなり 飽るものは蜂の蜜をも踐つくされど 飢たる者には苦き物さへもすべて甘し
 六 その家を離れてさまよふ人は その巢を離れてさまよふ鳥のごとし 膏と香とは人の心をよるこばすなり
 七 心よりして勸言を與ふる友の美しきもまた斯のごとし なんぢの友と汝の父の友とを棄るなかれ なんぢ患難
 八 にあふ日に兄弟の家にいることなかれ 親しき鄰は疏き兄弟に愈れり わが子よ 智慧を得てわが心を悦ばせよ
 九 然ば我をそしる者に我こたふることを得ん 賢者は禍害を見てみづから避け 拙者はすゝみて罰をうく
 一〇 の保證をなす者よりは先その衣をとれ 他人の保證をなす者をば固くとらへよ 晨はやく起て大聲にその鄰を
 一一 祝すれば却て呪詛と見なされん 相争ふ婦は雨ふる日に絶する雨漏のごとし これを制ふるものは風をお
 一二 さふるがごとく 右の手に膏をつかむがごとし 鐵は鐵をとぐ 斯のごとくその友の面を研なり 無花果の樹
 一三 をまもる者はその果をくらふ 主を貴ぶものは譽を得 水に照せば面と面と相肖るがごとく 人の心は人の心に
 一四 似たり 陰府と沈淪とは飽ことなく 人の目もまた飽ことなし 坩堝によりて銀をためし 鑪によりて金をた
 一五 めし その讚らるゝ所によりて人をためす なんぢ愚なる者を白にいれ 杵をもて麥と借にこれを搗ともその愚
 一六 は去らざるなり なんぢの羊の情況をよく知り なんぢの群に心を留めよ 富は永く保つものにあらず

第三章

レムエル王のことは即ちその母の彼に教へし箴言なり
 一 何をいはんか 我が願ひて得たる子よ何をいはんか
 二 わが子よ何を言んか わが胎の子
 三 なんぢの力を女につひやすなかれ 王を
 四 滅すものに汝の途をまかす勿れ
 五 レムエルよ 酒を飲は王の爲べき事に非ず 王の爲べき事にあらず 醉醺
 六 を求むるは牧伯の爲すべき事にあらず
 七 恐くは酒を飲て律法をわすれ 且すべて惱まざるゝ者の審判を枉げん
 八 醉醺を亡びんとする者にあたへ 酒を心の傷める者にあたへよ
 九 かれ飲てその貧窮をわすれ 復その苦楚を
 一〇 憶はざるべし
 一一 なんぢ瘡者のため又すべての孤者の訟のために口をひらけ
 一二 なんぢ口をひらきて義しき審判
 一三 をなし 貧者と窮乏者の訟を糺せ
 一四 誰か賢き女を見出すことを得ん その價は眞珠よりも貴とし
 一五 夫の心は彼を待み その産業は乏しくならじ
 一六 彼が存命ふる間はその夫に善事をなして 惡き事をなさず
 一七 彼は羊の毛と麻とを求め 喜びて手から操き
 一八 商賈の舟のごとく遠き國よりその糧を運び
 一九 先に起てその家人に糧をあたへ その婢女に日用の分をあたふ
 二〇 田畝をはかりて之を買ひ その手の操作をもて
 二一 葡萄園を植ゑ 力をもて腰に帶し その手を強くす
 二二 彼はその利潤の益あるを知る その燈火は終夜きえず
 二三 かれ手を紡線車にのべ その指に紡錘をとり
 二四 手を貧者にのべ 手を困苦者に舒ぶ
 二五 彼は家人の爲に
 二六 雪をおそれず 蓋その家人みな蕃紅の衣をきればなり
 二七 彼はおのれの爲に美しき褥子をつくり 細布と紫とを
 二八 もてその衣とせり
 二九 その夫はその地の長老とともに邑の門に坐するによりて人に知るゝなり
 三〇 彼は細布の
 三一 衣を製りてこれをうり 帶をつくりて商賈にあたふ
 三二 彼は筋力と尊貴とを衣とし 且のちの目を笑ふ
 三三 彼は
 三四 口を啓きて智慧をのぶ 仁愛の教誨その舌にあり
 三五 かれはその家の事を變み 怠惰の糧を食はず
 三六 その衆子は
 三七

イ 撒三〇・一
 口 撒四九・一五
 二 申一七・二七 尼一 木 傳一〇・一七
 三 二六 撒七・二六 へ 傳四・一一
 四 何四・一一 詩一〇四・一五
 五 申二九・一五 二六 又 利一九・一五 申一
 六 申前一九・四 帖四 二六 二六 申一
 七 申二七 耶三二・二六 王 羅二二・一
 八 申二二・四 一八 力 路二二・四二
 九 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一〇 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一一 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一二 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一三 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一四 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一五 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一六 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一七 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一八 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 一九 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二〇 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二一 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二二 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二三 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二四 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二五 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二六 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二七 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二八 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 二九 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三〇 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三一 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三二 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三三 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三四 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三五 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三六 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三七 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三八 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 三九 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三
 四〇 申二二・九 一四 王 第 四二・八 來 一三

二九 起て彼を祝す その夫も彼を讃ていふ
 三〇 賢く事をなす女子は多けれども 汝はすべての女子に愈れり
 三二 艶麗は
 三三 行爲によりてこれを邑の門にほめよ

箴 言 を は り

一四 智者の目はその頭にあり愚者は黑暗に歩む 然ど我し其のみな遇ふところの事は同一なり 我心に謂けらく
 一五 愚者の遇ふところの事に我もまた遇ふべければ 我なんぞ智慧のまさる所あらんや 我また心に謂り是も亦空なる
 一六 のみと 夫智者も愚者と均しく永く世に記念らるゝことなし 來らん世にいたれば皆早く既に忘らるゝなり
 一七 嗚呼智者の愚者とおなじく死るは是如何なる事ぞや 是に於て我世にながらふることを厭へり 凡そ日の下に
 一八 爲ところの事は我に悪く見ればなり 即ち皆空にして風を捕ふるがごとし
 一九 我は日の下にわが勞して 諸の動作をなしたるを恨む其は我の後を嗣ぐ人にこれを遺さざるを得ざれば
 二〇 なり 其人の智慧は誰かこれを知らん然るにその人は日の下に我が勞して爲し智慧をこめて爲たる 諸の工作
 二一 を管理るにいたらん是また空なり 我身をめぐらし日の下にわが勞して爲たる 諸の動作のために望を失へり
 二二 今茲に人あり智慧と知識と才能をもて勞して事をなさん終には之がために勞せざる人に一切を遺してその
 二三 所有となさしめざるを得ざるなり 是また空にして大に惡し 夫人はその日の下に勞して爲ところの諸の動作
 二四 とその心 勞によりて何の得ところ有るや 其の世にある日には常に憂患ありその勞苦は苦しその心は夜の
 二五 間も安んずることあらず 是また空なり
 二六 人の食飲をなしその勞苦によりて心を樂しましむるは幸福なる事にあらず 是もまた神の手より出るなり
 二七 我これを見る 誰かその食ふところその歡樂を極むるところに於て我にまさる者あらん 神はその心に適ふ
 二八 人には智慧と知識と喜樂を賜ふ 然れども罪を犯す人には勞苦を賜ひて斂めかつ積ことを爲さしむ 是は其を神の
 二九 心に適ふ人に與へたまはんためなり 是もまた空にして風を捕ふるがごとし

イ敬一七二四 傳八 二二・三、一一 永伯五・七、一四・一 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、
 二二・九、一〇 傳九 二二・三、三九 二二・五、一八、八 二二・八、一七、

第三章

一 天が下の萬の事には期あり 萬の事務には時あり 生るゝに時あり 死るに時あり 植るに時あり
 二 植たる者を抜に時あり 殺すに時あり 醫すに時あり 毀つに時あり 建るに時あり 泣に時あり
 三 笑ふに時あり 悲むに時あり 躍るに時あり 石を擲つに時あり 石を斂むるに時あり 懐くに時あり 懐くことをせ
 四 ざるに時あり 得に時あり 失ふに時あり 保つに時あり 棄るに時あり 裂に時あり 縫に時あり 黙すに時あり
 五 語るに時あり 愛しむに時あり 惡むに時あり 戦ふに時あり 和ぐに時あり 働く者はその勞して爲ところより
 六 して何の益を得んや 我神が世の人にさづけて身をこれに勞せしめたまふところの事件を視たり 神の爲し
 七 たまふところは皆その時に適ひて美麗しかり 神はまた人の心に永遠をおもふの思念を賦けたまへり 然ば人は神
 八 のなしたまふ作爲を始より終まで知明むることを得ざるなり 我知る人の中にはその世にある時に快樂をなし
 九 善をおこなふより外に善事はあらず また人はみな食飲をなしその勞苦によりて逸樂を得べきなり 是すなはち
 一〇 神の賜物たり 我知る凡て神のなしたまふ事は限なく存せん 是は加ふべき所なく是は減すべきところ無し 神
 一一 の之をなしたまふは人をしてその前に畏れしめんがためなり 昔ありたる者は今もあり 後にあらん者は既に
 一二 ありし者なり 神はその逐やられし者を索めたまふ
 一三 我また日の下を見るに審判をおこなふ所に邪曲なる事あり 公義を行ふところに邪曲なる事あり 我すな
 一四 はち心に謂けらく神は義者と惡者とを鞠きたまはん 彼處においては萬の事と萬の所爲に時あるなり 我また
 一五 心に謂けらく是事あるは是世の人のためなり 即ち神は斯世の人を檢して之にその獸のごとくなることを自ら曉
 一六 らしめ給ふなり 世の人に臨むところの事はまた獸にも臨むこの二者に臨むところの事は同一にして是も死は

九八 事の終はその始よりも善し 容忍心ある者は傲慢心ある者に勝る 汝氣を急くして怒るなかれ 怒は愚なる者の胸にやどるなり 昔の今にまさるは何故ぞやと汝言なかれ 汝の斯る問をなすは是智慧よりいづる者にあらざるなり

二二 智慧の上に財産をかぬれば善し 然れば日を見る者等に利益おほかるべし 智慧も身の護庇となり 銀子も身の護庇となる 然ど智慧はまたこれを有る者に生命を保しむ 是知識の殊勝たる所なり 汝神の作爲を考ふべし 神の曲たまひし者は誰かこれを直くすることを得ん 幸福ある日には樂め 禍患ある日には考へよ

二四 神はこの二者をあひ交錯て降したまふ 是は人をしてその後の事を知ることなからしめんためなり

二五 我この空の世にありて各様の事を見たり 義人の義をおこなひて亡ぶるあり 悪人の惡をおこなひて長 壽あり 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

二六 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

二七 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

二八 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

二九 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三〇 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三一 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三二 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三三 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三四 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三五 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三六 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三七 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三八 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三九 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四〇 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四一 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四二 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四三 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四四 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四五 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四六 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四七 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四八 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

四九 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五〇 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五一 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五二 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五三 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五四 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五五 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五六 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五七 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五八 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

五九 又 汝 義に過るなかれまた 賢に過るなかれ 汝なんぞ身を滅すべけんや 汝惡に過るなかれ

三六 索めんとし 又惡の愚たると愚癡の狂妄たるを知んとせり 我了れり 婦人のその心羅と網のごとくその手縲綆のごとくなる者は是死よりも苦き者なり 神の悦びたまふ者は之を避ることを得ん 罪人は之に執らるべし 傳道者言ふ 視よ我その數を知んとし 一々に算へてつひに此事を了る 我なほ尋ねて得ざる者は是なり 我千人の中は一箇の男子を得たれども その數の中には一箇の女子をも得ざるなり 我了れるところは唯是のみ 即ち神は人を正直者に造りたまひしに人衆多の計略を案 出せしなり

第八章

一 誰か智者に如ん誰か事物の理を解くことを得ん 人の智慧はその人の面に光輝あらしむ 又その粗暴も變改べし 我言ふ王の命を守るべし 既に神をさして誓ひしことあれば然るべきなり 早まりて王の前を去ることなかれ 惡き事につのること勿れ 其は彼は凡てその好むところを爲ばなり 王の言語には權力あり 然ば誰か之に汝何をなすやといふことを得ん 命令を守る者は禍患を受るに至らず 智者の心は時期と判断を知なり 萬の事務には時あり 判断あり 是をもて人なる禍患をうくるに至るあり 人は後にあらんとするの事を知す また誰か如何なる事のあらんかを之に告る者あらん 靈魂を掌管て靈魂を留めうる人あらず 人はその死る日には權力あること無し 此戦争には釋放たる者あらず 又罪惡はこれを行ふ者を救ふことを得せざるなり

九 我この一切の事を見また日の下におこなはるる諸の事に心を用ひたり 時としては此人彼人を治めてこれに害を蒙らしむることあり 我見しに惡人の葬られて安息にいるあり また善をおこなふ者の聖所を離れてその邑に忘らるるに至るあり 是また空なり 惡き事の報速にきたらざるが故に世人心を專にして惡をおこなふ

一六 ある貧しき人ありてその智慧をもて邑を救へり然るに誰ありてその貧しき人を記念もの無し 一六 是において
 一七 我言り智慧は勇力に愈る者なりと但しかの貧しき人の智慧は藐視られその言詞は聴れざりしなり 一七 靜に聽る
 一八 智者の言は愚者の君長たる者の號呼に愈る 智慧は軍の器に勝れり一人の悪人は許多の善事を壞ふなり

第一〇章

一 死し蠅は和香者の膏を臭くしこれを腐らす 少許の愚癡は智慧と尊榮よりも重し 智者の心は
 二 その右に愚者の心はその左に行くなり 愚者は出て途を行にあたりてその心たらず自己の愚なる
 三 ことを一切の人に告ぐ 君長たる者汝にむかひて腹たつとも汝の本處を離るゝ勿れ 温順は大なる徳を生ぜし
 四 めざるなり

六五 我日の下に一の患事あるを見たり是は君長たる者よりいづる過誤に似たり 六 すなはち愚なる者高き位に
 七 置かれ貴き者卑き處に坐る 我また僕たる者が馬に乗り王侯たる者が僕のごとく地の上に歩むを觀たり
 八 坑を掘る者はみづから之におちり石垣を毀つ者は蛇に咬れん 石を打く者はそれがために傷を受
 九 け木を割る者はそれがために危難に遭ん 鐵の鈍くなれるあらんにその刃を磨されば力を多く之にもちひざる

一〇 を得ず 智慧は功を成に益あるなり 蛇もし呪術を聽ずして咬ば呪術師は用なし
 一一 智者の口の言語は恩徳あり 愚者の唇はその身を吞ほろぼす 愚者の口の言は始は愚なりまたその言は
 一二 終は狂妄にして惡し 愚者は言詞を衆くす 人は後に有ん事を知す 誰かその身の後にあらんところの事を述る
 一三 を得ん 愚者の勞苦はその身を疲らす彼は邑に在ることをも知ざるなり

イ 傳二・二二、二四 二番七・一一、一二 二五・一五
 九・一八 傳七・一九 ホ 傳一三・一六、一八 七帖三・一
 九・一八 傳八・三 二二 九・一七 八帖五・四、五 耶 七
 八傳九・六 ト 傳前二五・二四 傳 又 傳七・一五 傳二六 二・三 傳一〇・三二、三三 一・二 傳三・二二、
 二・三 傳九・一八 傳 一・二 傳一〇・二四、一八 二・七 傳一〇・二四、一八
 ソ 傳一〇・四、一五 二番三二・二〇 四二 番九八 九帖一・二九 路六 米五・五
 二・三 傳二・二八 徒 九・一七 太一〇 六二〇 加六・九、一〇 來 八・一〇 提前六・一 牛弗五・一六
 六二〇 一・三 傳前六・一 牛弗五・一六 一・三 傳三・二二、
 一・二 傳七・二一 一・二 傳七・二一 一・二 傳七・二一
 夕 傳三・四、五、一二、
 五・一一 一・二 傳三・二四
 夕 傳三・四、五、一二、
 五・一一 一・二 傳三・二四

一六 その王は童子にしてその侯伯は朝に食をなす國よ 汝は禍なるかな 一七 その王は貴族の子またその侯伯
 一八 は醉樂むためならず力を補ふために適宜き時に食をなす國よ 汝は福なるかな 一八 懶惰ところよりして屋背は
 一九 落ち手を垂るところよりして家屋は漏る 一八 食事をもて笑ひ喜ぶの物となし酒をもて快樂を取れり 銀子は
 二〇 何事にも應ずるなり 汝 心の中にも王たる者を詛ふなかれ また寢室にても富者を詛ふなかれ 天空の鳥
 二一 その聲を傳へ羽翼ある者その事を布べければなり

第一章

一 汝の糧食を水の上に投げよ 多くの日の後に汝ふたゝび之を得ん 汝一箇の分を七また八にわ
 二 けて 其は汝如何なる災害の地にあらんかを知ざればなり 雲もし雨の充るあれば地に注ぐ また
 三 樹もし南か北に倒るゝあればその樹は倒れたる處にあるべし 風を伺ふ者は種播ことを得ず 雲を望む者は刈
 四 ことを得ず 汝は風の道の如何なるを知す また孕める婦の胎にて骨の如何に生長つを知す 斯汝は萬事を爲
 五 たまふ神の作爲を知ることなし 汝 朝に種を播け夕にも手を歇るなかれ 其はその實る者は此なるか彼なるか
 六 又は二者ともに美なるや汝これを知ざればなり 夫光明は快き者なり 目に日を見るは樂し 人多くの年
 七 生ながらへてその中凡て幸福なるもなほ幽暗の日を憶ふべきなり 其はその數も多かるべければなり 凡て來らん
 八 ところの事は皆空なり

九 少者よ汝の少き時に快樂をなせ 汝の少き日に汝の心を悦ばしめ 汝の心の道に歩み 汝の目に見るところを
 一〇 爲せよ 但しその諸の行爲のために神汝を鞠きたまはんと知べし 然ば汝の心より髪を去り 汝の身より惡き
 者を除け 少き時と壯なる時はともに空なればなり

は香柏 その垂木は松の木なり

第二章

われはシャロンの野花 谷の百合花なり
 女子等の中にわが佳耦のあるは荆棘の中に百合花
 のあるがごとし
 わが愛する者の男子等の中にあるは林の樹の中に林檎のあるがごとし
 我ふかく喜びてその蔭にすわれり その實はわが口に甘かりき
 彼われをたづさへて酒宴の室にいたたまへり
 その我上にひるがへしたる旗は愛なりき
 請ふなんぢら乾葡萄をもてわが力をおぎなへ 林檎をもて我に力を
 つけよ 我は愛によりて疾わづらふ
 かれが左の手はわが頭の下にあり その右の手をもて我を抱く
 ルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから起るときまでは殊更に喚起し
 且つ醒すなかれ
 わが愛する者の聲きこゆ 視よ 山をとび 岡を躍りこえて来る
 わが愛する者は獐の
 ごとくまた小鹿のごとし 視よ 彼われらの壁のうしろに立ち 窓より 覗き 格子より 窺ふ
 わが愛する者は
 われに語りて言ふ わが佳耦よ わが美はしき者よ 起ていできたれ
 視よ 冬すでに過ぎ 雨もやみてはやさり
 ぬ もろもろの花は地にあらはれ 鳥のさへづる時すでに至り 班鳩の聲われらの地にきこゆ
 無花果樹は
 その青き果を赤らめ 葡萄の樹は花さきてその馨はしき香氣をはなつ
 わが佳耦よ わが美しき者よ 起て出きたれ
 磐間にをり 斷崖の匿 處にをるわが鴿よ 我になんぢの面を見させよ なんぢの聲をきかしめよ なんぢの聲
 は愛らしくなんぢの面はうるはし
 われらのために狐をとらへよ 彼の葡萄園をそこなふ小狐をとらへよ
 我等の葡萄園は花盛なればなり
 わが愛する者は我につき我はかれにつく 彼は百合花の中にてその群を牧ふ
 わが愛する者よ 日の涼しくなるまで 影の消るまで身をかへして出ゆき 荒き山々の上において獐のごとく

イ歌二二・一二
 二歌二二・一七
 三歌二二・一〇
 ト歌八・三三
 二歌八・三三
 三・四四 一三・三二
 又歌四・六
 又歌二・九 八・一四
 二歌八・五
 二歌一・五 五・二二
 ツ歌六・七
 ツ歌六・七
 二歌七・四

小鹿のごとくせよ

第三章

夜われ床にありて我心の愛する者をたづねしが尋ねたれども得ず
 我おもへらく今おきて邑を
 まはりありき わが心の愛するものを街衢あるひは大路にてたづねんと 乃ちこれを尋ねたれども
 得ざりき 邑をまはりありき 夜巡者らわれに遇ければ 汝らわが心の愛する者を見しやと問ひ
 これに別れて
 過ゆき間もなくわが心の愛する者に遇たれば 之をひきとめて 放さず 遂にわが母の家にとまひゆき 我を産し
 者の室にいりぬ
 エルサレムの女子等よ 我なんぢらに獐と野の鹿とをさし誓ひて請ふ 愛のおのづから
 起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ
 この没薬乳香など商人のもろもろの薫物をもて身をかをらせ
 煙の柱のごとくして荒野より来る者は誰ぞや
 視よ 此はソロモンの乗輿にして 勇士六十人その周圍に
 ありイスラエルの勇士なり
 みな刀剣を執り 戦闘を善す 各人腰に刀剣を帯て夜の警誠に備ふ
 ソロモン王
 レバノンの木をもて己のために輿をつくれり
 その柱は白銀 その欄杆は黄金 その座は紫色にて作りその
 内部にはイスラエルの女子等が愛をもて繡たる物を張つく
 シオンの女子等よ 出きたりてソロモン王を見よ
 かれは婚姻の日 心の喜べる日にその母の己にかうぶらしし 冠冕を戴けり

第四章

あゝなんぢ美はしきかな わが佳耦よ あゝなんぢうるはしきかな なんぢの目は面帕のうしろに
 ありて鴿のごとし なんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり
 なんぢの齒は毛を
 剪たる牝羊の浴場より出たるがごとし おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし
 なんぢの唇は紅色
 の線維のごとく その口は美はし なんぢの頬は面帕のうしろにありて石榴の半片に似たり
 なんぢの頸項は

一 園の中にて群を牧ひまた百合花を探る 我はわが愛する者につきわが愛する者はわれにつく彼は百合花の中にてその群を牧ふ
 二 わが佳耦よなんぢは美はしきことテルザのごとく華やかなることエルサレムのごとく畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとし
 三 なんぢの目は我をおそれしむ請ふ我よりはなれしめよなんぢの髪はギレアデ山の腰に臥たる山羊の群に似たり
 四 なんぢの齒は毛を剪たる牝羊の浴場より出たるのごとし
 五 おのおの雙子をうみてひとつも子なきものはなし
 六 なんぢの頬は面帕の後にありて石榴の半片に似たり
 七 六十人 妃嬪八十人 數しられぬ處女あり
 八 わが鴿わが完き者はたゞ一人のみ 彼はその母の獨子にして産たる者の喜ぶところの者なり 女子等は彼を見て幸福なる者となへ 后等妃嬪等は彼を見て讚む
 九 この晨光のごとくに見えわたり 月のごとくに美はしく 日のごとくに輝やき 畏るべきこと旗をあげたる軍旅のごとき者は誰ぞや
 一〇 われ胡桃の園にくだりゆき 谷の青き草木を見 葡萄や芽し 石榴の花や咲しと見回しをりしに 意はず知ず我が心われをしてわが貴とき民の車の中間にあらしむ
 一一 歸れ歸れシユラミの婦よ 歸れ歸れわれら汝を觀んことをねがふ
 一二 なんぢら何とてマハナイムの跳舞を觀るごときシユラミの婦を觀んとねがふや

第七章

一 君の女よなんぢの足は鞋の中において如何に美はしきかな 汝の腿はまろらかにして玉のごとく巧匠の手にて作りたるのごとし
 二 なんぢの臍は美酒の缺ることあらざる圓き杯盤のごとくなんぢの腹は積かさねたる麥のまはり百合花もてかこめるが如し
 三 なんぢの兩乳房は牝鹿の雙子なる二の小鹿のごとし
 四 なんぢの頸は象牙の戍樓の如く 汝の目はヘシボンにてバテラビムの門のほとりにある池のごとく

一 歌三・一六・七・一〇 二 歌四・二
 一 歌六・一〇 二 歌六・三
 一 歌七・二 二 歌七・三
 一 歌八・一〇 二 歌八・三
 一 歌九・一〇 二 歌九・三
 一 歌一〇・一〇 二 歌一〇・三
 一 歌一一・一〇 二 歌一一・三
 一 歌一二・一〇 二 歌一二・三

一 なんぢの鼻はダマスゴに對へるレバノンの戍樓のごとし
 二 なんぢの頭はカルメルのごとくなんぢの頭の髪は紫色のごとし 王その垂たる髪につながれたり
 三 あゝ愛よ もろもろの快樂の中においてなんぢは如何に美はしく如何に悦ばしき者なるかな
 四 なんぢの身の長は棕櫚の樹に等しくなんぢの乳房は葡萄のふさのごとし
 五 われ謂ふこの棕櫚の樹にのほりその枝に執つかんとなんぢの乳房は葡萄のふさのごとくなんぢの鼻の氣息は林檎のごとく匂はん
 六 なんぢの口は美酒のごとし
 七 わが愛する者のために滑かに流れくだり 睡れる者の口をして動かしむ
 八 われはわが愛する者につき彼はわれを戀したふ
 九 わが愛する者よ われら田舎にくだり村里に宿らん
 一〇 われら夙におきて 葡萄や芽し 荳やいでし 石榴の花やさきし いざ葡萄園にゆきて見んかしこにて我わが愛をなんぢにあたへん
 一一 戀加かぐはしき香氣を發ち もろもろの佳き果物古き新らしき共にわが戸の上において わが愛する者よ我これをなんぢのためにたくはへたり

第八章

一 ねがはくは汝わが母の乳をのみしわが兄弟のごとくならんことを われ戶外にてなんぢに遇ふ
 二 とき接吻せん 然するとも誰ありてわれをいやしむるものあらじ
 三 われ汝をひきてわが母の家にいたり 汝より教誨をうけん 我かくはしき石榴のあまき汁をなんぢに飲しめん
 四 かねが左の手はわが頭の下にありその右の手をもて我を抱く
 五 エルサレムの女子等よ 我なんぢ等に誓ひて請ふ愛のおのづから起る時まで殊更に喚起し且つ醒すなかれ
 六 おのれの愛する者に倚かゝりて荒野より上りきたる者は誰ぞや 林檎の樹の下にてわれなんぢを喚さませり なんぢの母かしこにて汝のために劬勞をなしなんぢを産し者 かしこにて劬勞をなしぬ
 七 われを汝の心におきて印のごとくし なんぢの腕におきて印のごとくせよ 其は愛は

七 強くして死のごとく 嫉妬は堅くして陰府にひとし その焔は火のほのほのごとし いともはげしき焔なり 愛
 は大水も消ことあたはず 洪水も溺らすことあたはず 人その家の一切の物をことごとく與へて愛に換んとすると
 八 も向いやしめらるべし われら小なき妹子あり 未だ乳房あらず われらの妹子の間聘をうる日には之に
 九 何をなしてあたへんや かれもし石垣ならんには我ら白銀の城をその上にたてん 彼もし戸ならんには香柏
 一〇 の板をもてこれを圍まん われは石垣わが乳房は成樓のごとし 是をもてわれは情をかうむれる者のごと
 二 彼の目の前にありき 二 バアルハモンにソロモン葡萄園をもてり これをその守る者等にあづけおき 彼等を
 三 しておのおの銀一千をその果のために納めしむ 三 われ自らの有なる葡萄園われの手にあり ソロモンなんぢは
 四 一千を獲よ その果をまもる者も二百を獲べし 三 なんぢ園の中に住む者よ 伴侶等なんぢの聲に耳をかた
 四 むく請ふ我にこれを聴しめよ 一四 わが愛する者よ 請ふ急ぎはしれ 香はしき山々の上において 獐のごとく
 小鹿のごとくあれ

雅歌をばり

イザ六・三五
 口約二・三三
 八本二・一三三
 二歌二・一四
 二歌二・一七
 一〇

イザヤ書

イ民二二六	二第八・七	ワ哀三・二二	隔九	五〇・八、九、五一
口申三三・一	ホ耶九三・六	二九	二九	一六、二七、五八、
一一・六・一九二二	ト第五二・二	カ制一九・二四	結	二一、二七、五八、
二二九 結三六・四	ホ耶五七・三、四	ヨ申三三・三二	結	三、三、耶六・二〇、七
米一・二、六、一、二	三・七	一六、四六	結	二一、二、五、二、一、
ハ第五・一、二	チ察九・一三	耶二・一、四、一七	詩	二二、米六七

第一章

一 アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサ
 レムとに係る異象

二 天よきけ地よ耳をかたぶけよ エホバの語りたまふ言あり 曰くわれ子をやしなひ育てしにかれらは我に
 三 そむけり 牛はその主をしり 驢馬はそのあるじの厩をしる 然どイスラエルは識ず わが民はさとらず 四 あゝ
 四 罪をかせる國人よこしまを負ふたみ 悪をなす者のすゑ 壊りそこなふ種族 かれらはエホバをすてイスラエル
 五 の聖者をあなどり 之をうとみて退きたり 五 なんぢら何ぞかさねがさね悖りて 猶撻れんとするか その頭はやま
 六 ざる所なく その心はつかれはてたり 六 足のうらより頭にいたるまで全きところなくたゞ 創痕と打傷と腫物と
 七 のみなり 而してこれを合すものなく 包むものなく 亦あぶらにて軟らぐる者もなし 七 なんぢらの國はあれ
 八 すたれなんぢらの諸邑は火にてやかれ なんぢらの田畑はその前にて外人にのまれ 既にあだし人にくつがへ
 九 されて荒廢れたり 八 シオンの女はぶだうぞのの廬のごとく 瓜田の假舎のごとく また圍をうけたる城のごとく
 十 唯ひとり遺れり 九 萬軍のエホバわれらに少しの遺をとどめ給ふことなくば 我儕はソドムのごとく又ゴモラに
 十一 同じかりしならん 一〇

一〇 なんぢらソドムの有司よ エホバの言をきけ なんぢらゴモラの民よ われらの神の律法に耳をかたぶけよ
 二 エホバ言たまはく なんぢらが獻ぐるおほくの犠牲はわれに何の益あらんや 我はをひつじの燔祭とこえたる

三三 その日千株に銀一千の價をえたる葡萄ありし處もことごとく荊と棘はえいづべし 二四 荊とおどろと地に
 三四 あまねきがゆるるに人々矢と弓とをもて彼處にゆくなり 二五 鋤をもて掘たがへしたる山々もいばらと棘のために
 三五 人おそれてその中にゆくことを得じその地はたゞ牛をはなち羊にふましむる處とならん

第八章

一 エホバ我にいひたまひけるは 一の大なる牌をとり そのうへに平常の文字にてマヘル シヤラル
 二 ハシバズと録せ 二 われ信實の證者なる祭司ウリヤおよびエベレキヤの子ゼカリヤをもてその證
 三 をなさしむ 三 われ預言者の妻にちかづきしとき彼はらみて子をうみければ エホバ我にいひたまはくその名を
 四 マヘル シヤラル ハシバズと稱へよ 四 その子いまだ我が父わが母とよぶことを知らざるうちに ダマスコ
 五 の富とサマリヤの財寶はうばはれてアツスリヤ王のまへに到るべければなり

六 エホバまた重て我につけたまへり云く 六 この民はゆるやかに流るゝシロアの水をすてゝレヂンとレマリ
 七 ヤの子とをよるこぶ 七 此によりて主はいきほひ猛くみなぎりわたる大河の水をかれらのうへに堰入たまはん
 八 是はアツスリヤ王とそのもろもろの威勢とにして 百の支流にはびこり もろもろの岸をこえ ユダにながれ
 九 入り 溢れひろがりてその項にまで及ばん インマヌエルよそののぶる翼はあまねくなんぢの地にみちわたらん
 一〇 もろもろの民よ さばめき騒げなんぢら推かるべし 遠きくにぐにの者よ きけ腰におびせよ 汝等くだか
 一一 るべし 腰に帯せよなんぢら推かるべし なんぢら互にはかれつひに徒勞ならん なんぢら言をいだせ遂に
 一二 おこなはれじ そは神われらとともに在せばなり 一二 エホバつよき手をもて此如われに示し この民の路にあゆま
 一三 ざらんことを我にさととして言給はく 一三 此民のすべて叛逆となふるところの者をなんぢら叛逆となふるなか

イザ五・六 二七 七・二六 一ヘニ三・二五 約九七 一リ 三三〇・二八
 二王下二・二九 一ト 七・二六 一又 七・二四 一ワ 七・七
 六・九 一六九 一七・三 一チ 一〇・二二 一ル 三・九 一ニ 一建 五・ 一三 一七 一八
 二二 二四 二六 二八 三〇 三二 三三 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

一 彼等のおそるるところを汝等おそるゝなかれ懼くなかれ 一三 なんぢらはたゞ萬軍のエホバを聖としてこれを
 二 畏みこれを恐るべし 一四 然らばエホバはきよき避所となりたまはん 然どイスラエルの兩の家には蹟く石となり
 三 妨ぐる磐とならん エルサレムの民には網罟となり機檻とならん 一五 おほくの人々これによりて騒きかつ仕れ
 四 やぶれ網せられまた捕へらるべし

一六 證詞をつかね律法をわが弟子のうちに封べし 一七 いま面をおほひてヤコブの家をかへりみ給はずといへど
 一八 も我そのエホバを待そのエホバを望みまつらん 一八 視よわれとエホバが我にたまひたる子輩とはイスラエルの
 一九 うちの豫兆なり奇しき標なり 此はシオンの上にいます萬軍のエホバの與へたまふ所なり
 二〇 もし人なんぢらにつけて巫女および魔術者のさえつるがごとく細語がごとき者にもとめよといはゞ民は
 二一 おのれの神にもとむべきにあらずやいかで活者のために死者にもとむることを爲んといへ 二〇 たゞ律法と證詞
 二二 とを求むべし 彼等のいふところ此言にかなはずば晨光あらじ 二一 かれら國をへあるきて苦みうるんその飢る
 二三 とき怒をはなち己が王おのが神をさして詛ひかつその面をうへに向ん 二三 また地をみれば艱難と幽暗とくるし
 二四 みの闇とあり かれらは昏黒におひやられん

第九章

一 今くるしみを受れども後には闇なかるべし 昔しはゼブルンの地ナフタリの地をあなどられしめ
 二 給ひしかど 後には海にそひたる地ヨルダンの外の地ことくに人のガリラヤに榮をうけしめ給へり
 三 幽暗をあゆめる民は大なる光をみ 死蔭の地にすめる者のうへに光てらせり 三 なんぢ民をましその歡喜を大に

